

追放大聖女、ざまあしてたら日本 に呼ばれた件

月城 友麻

陰謀に巻き込まれた大聖女は神聖力を奪われ、大切な儀式を台無しにした罪で追放処分とされてしまう。

牢屋に入れられ、追放先でレイプされかける大聖女であったが、美しい長身の男に助けられる。それは昔大聖女が助けたドラゴンの化身であった。

ドラゴンと共に新たな生活を楽しむ大聖女であったが、自分が追放されたことで街が攻め滅ぼされつつあることを知る。まさに【ざまあ】ではあったが、大切な人は守りたいと奮闘する大聖女。

しかし、一度崩れたバランスは元には戻らない。戦乱の世に陥り、人類全体の衰退にまで至ってしまう。

それを見た世界を統べる存在はこの星の廃棄処分を決定。殺戮の天使が派遣される。

世界の存亡は大聖女に託された。そして衝撃の展開が……。

現代日本と地続きの、ただの空想にとどまらない世界が今、始まる。

目次

1 11	1 10	1 9	1 8	1 7	1 6	1 5	1 4	1 3	1 2	1 1
瞑想とシステム	アール 그레이の魔法	温かい安らぎ	ドラゴンのディナー	温かい指先	伝説のドラゴン	不可思議な青年	破られたブラウス	公爵派の陰謀	色仕掛けの聖女	連行される大聖女
73	65	57	49	43	37	29	23	15	7	1

2 3	2 2	2 1	1 21	1 20	1 19	1 18	1 17	1 16	1 15	1 14	1 13	1 12
やっぱり見てた	黄金の祝福	想定外の言葉	スタンピード	チェックメイト	ワナにハマるドラゴン	最高に訳アリの二人	双頭のワイバーン	絶望の地下71階	飛び散る水晶玉	ドラゴンは拳闘士	肉々しい手触り	賢者となったユリア

3 2 .	3 1 .	2 14 .	2 13 .	2 12 .	2 11 .	2 10 .	2 9 .	2 8 .	2 7 .	2 6 .	2 5 .	2 4 .
一億年の刑罰	爆弾の皇帝	荒廃した大地	神様の戯れ	口移し	瑠璃色の刀身	ドラゴンスレイヤー	公爵の街、ダギユラ	ざまあな惨状	大聖女の矜持	王都陥落	ガラスの五十階建てビル	天然のコンサートホール

4 3 .	4 2 .	4 1 .	3 12 .	3 11 .	3 10 .	3 9 .	3 8 .	3 7 .	3 6 .	3 5 .	3 4 .	3 3 .
僕らのクーデター	神様嘘つかない	神様誕生	一回だけ	巻き戻される世界	本当の私	六十万年の営み	海王星の衝撃	世界の本質	オフィス崩壊	時を駆ける少女	降り注ぐ命の輝き	アポカリプス

4 16	4 15	4 14	4 13	4 12	4 11	4 10	4 9	4 8	4 7	4 6	4 5	4 4
宇宙の特異点	朽ち果てた二人の思い出	絶対神ユリア	輝くデジタルの赤ちゃん	消える六十万年	黄金色に輝く星	喰われる腕	東京には負けない	絶望のプランB	目標、来ます！	鮮やかな制圧	ざまあ再び	すれ違う思い

4 21	4 20	4 19	4 18	4 17
限りなくにぎやかな未来	空飛ぶオープンカー	病める時も、健やかなる時も	プリンセスのキス	ジェイドの覚悟

1.1. 連行される大聖女

「大聖女！ 貴様は追放だ——！」

きらびやかな王宮、その大広間の壇上で国王が大聖女ユリアを指さし、真っ赤な顔で吠^ほえた。

列席の正装をした王侯貴族たちは静まり返り、お互いの顔を見合わせながら困惑の表情を浮かべている。

今日は王国の大切な儀式『蒼天の儀』の日。それは国内外から多くの賓客^{ひんきやく}を招き、神に祝福された大聖女がそのけた外れな神聖力で街を聖結界で覆い、魔を祓^{はら}う神聖な儀式だった。



ところが、ユリアは国宝『蒼天の杖』を無くし、壇上に手ぶらで現れたかと思うと、神聖力を全く出せないまま、結界を張るポーズを無様に繰り返すばかり。

王家の威信をかけた儀式を潰された国王の怒りはすさまじく、静まり返った大広間には緊張が走っていた。

「お、お待ちください！ これは何かの間違い……」

金の刺繍が施された純白の法衣をまとった十六歳の少女ユリアは、真っ青になって国王に近づこうとする。ダークブラウンの髪に健康的な艶やかな肌、そして整った目鼻立ちの美しい少女は眉をひそめ、目に涙を浮かべながら、とりなそうと必死だった。

さっきまで蒼天の杖は持っていたし、神聖力も普通にあった。それが控室でお茶を飲んだ直後、強烈な眠気に襲われ、気がついたらこんな事になってしまっていたのだ。

騎士たちが一斉にユリアを囲み、捕縛^{ほばく}する。

「ひったてろ！」

国王はアゴで出口を指し、騎士たちはユリアの両手をガッシリとつかんだまま引

きずっていく。

「い、いやあ！ やめてえ！」

ユリアは悲痛な叫びを上げるが、出席者たちはただ冷たい視線を投げかけるだけで、引きずられていくユリアを傍観していた。

ユリアは、離れたところで伏し目がちに見ている、幼なじみで男性従者のティモを見つける。

「ティモ！ 助けて！ ティモ——！」

しかし、ティモはくると背を向けると、何も言わずに逃げ出してしまった。

「えっ！ な、なんで……」

啞然とするユリア。

物心ついた時から一緒だったティモ、自分の事を一番分かってくれているはずのティモに逃げられてしまったことにユリアは愕然とし、口を開けたまま言葉を失った。

「お前たち、待て！」

豪華な純白のジャケットを着た金髪の少年が飛び出し、両手を広げ、ユリアを引

きずる騎士の行く手を阻む。透き通るような白い肌に凜とした鼻筋、そして王家の血筋を示すエンペラーグリーンに輝く瞳……、少年は第二王子だった。

「大聖女さまは何かの間違いだとおっしゃっている。まず調査が先だろう！」

少年は毅然^{きぜん}と言い放つ。

ユリアは泣きそうな顔でこの美しい少年を見つめた。

すると、同じく純白のジャケツトを着た男がニヤニヤしながら少年に近づいた。

「なんだ？ お前、コイツに惚^ほれてんのか？」

「ほ、惚れてるとかどうかじゃなく、一度の失敗で追放なんて……」

少年はちょっと頬を赤らめながら言い返す。

「国宝を無くし、大切な儀式をぶち壊し、神聖力も失った小娘を大聖女になど、もはや誰も認めんよ」

男は汚らしいものを見るかのようにユリアを一瞥してそう言うと、少年をにらんだ。男は少年の兄、第一王子だった。

「いや、でも……」

口ごもる少年。

「俺はこんな黒髪くろかみの田舎娘が大聖女だなんておかしいと思ってたんだ。父上の命令は絶対だ。文句は許さん……。いいからどけ！」

男は少年を突き飛ばした。

ぐはあ！

少年は無様に転がり……。細い腕で身を起こしながらその美しい顔を歪める。

男はフンツと鼻で笑うと、騎士たちにアゴでユリアの連行を指示した。

「い、いやあああ！」

大広間にユリアの悲痛な声が響き、そして連れ出されていく……。

ザワザワとする大広間、その中で一人ニヤけている女がいた。聖女ゲーザだった。ゲーザは美しい銀髪を編み込んでオフホワイトの法衣をまとい、整った目鼻立ちに白い肌、そして果物のようなプックリとした紅い唇……。しかし、その碧い瞳あおの奥にはかすかに昏い情念くらが揺れている。

ゲーザはでっぷりと太った教皇の隣で、ユリアの連行を眺めながらその美貌びぼうに似合あわぬいやらしい笑みを浮かべていた。

1.2. 色仕掛けの聖女

地下の牢獄で、錆びた鉄格子の扉がキキィーと嫌な音できしみながら開かれ、ユリアは冷たい石の床に転がされた。

いやあ！

ユリアは冷たい床石にひざをしたたかに打ってしまい、その痛さに鼻の奥がツーンとしてくる。

ガチャンという、まるでギロチンが落ちた時のような無慈悲で重い音が牢獄に響き、扉は閉められた。

今朝までは宮殿の最上階の部屋で最上級の待遇を受けていた王国のシンボル、ユリア。それが今、地下牢でこんな扱いを受けるまでに転落してしまったのだ。

「なぜ……、こんなことに……」

ユリアは頬を涙で濡らしながら控室の事を思い返す。

昼食後、控室に通されてティモが運んできたお茶を飲んで、その時になぜか急に眠くなつて、気がつくと杖は消えていたのだった。思えばこの時に神聖力も奪われ

ていたのだ。

誰が杖を盗んだのだろうか？　こんな事ができるのはティモくらいだが……。

「まさか……」

ユリアは頭を抱えた。

ティモがやったとは考えたくない。しかし……、彼が犯人としか考えられなかった。睡眠薬を盛られ、好きにやられたのだろう。

その認めたくない現実がユリアの首を真綿のように締め上げ、耐えきれなくなったユリアは冷たい床石にゴンと額をぶつけた。

ひとしきり涙を流すとユリアはゆっくりと起き上がる。何とか活路を見出さねばならなかった。試しに手のひらを向かい合わせて神聖力を出してみる。しかし、極わずかの神聖力しか現れなかった。さっきまでだったら無限とも思える神聖力が現れ、まぶしく手の中で光り輝いていたのに、今ではほのかな光がぼんやりと見えるだけになってしまっている。

「どうしちゃったの……？　私……」

ユリアはガックリとうなだれ、ポトポトと流れ落ちる涙をふきもせず、ただ底の

見えない漆黒の絶望に囚われていた。



カツカツカツ……。

ユリアが冷たい岩の床に横たわって動けずにいると、足音が聞こえてきた。
やがて足音はユリアの牢の前で止まる。

「いい気味だわ」

若い女の声がして、ユリアはそつと目を開く。牢を照らすほのかな魔法ランプの明かりに浮かび上がったのはゲーザだった。

ユリアは何も言えず、ぼーっとゲーザの顔を見ていた。

「みんな清々してたわ。黒髪の田舎者が大聖女だなんて、あつてはならないことなのよ」

「あなたがやったの!？」

ユリアはバツと身を起こすと、鉄格子を握って叫んだ。

「ふふっ、ティモをね、ちょっと誘ってみたの。そしたらあの子相当欲求不満だったわよ。犬みたいに必死に腰振って……、私の上で何度も果ててたわ」

うれしそうに報告するゲーザ。

「う、嘘よ！ ティモに限ってそんな！」

「バカね。若い男の性欲をなめてるからよ。それが田舎娘の限界だわ」

「せ、性欲って……」

ユリアは赤くなってうつむく。

「これ、なーんだ？」

そう言ってゲーザは『蒼天の杖』を出した。

「あっ！ 私の杖！」

ユリアは鉄格子のすき間から手を伸ばして奪おうとしたが、ゲーザはギリギリ届かない位置で杖を揺らし、見せびらかす。

「この杖は見た目を作り変えて私の杖になるのよ。大聖女の私にピッタリの杖にね」

「だ、大聖女？」

「そう、次期大聖女は私って教皇は約束してくれてるの」

いやらしい顔で笑うゲーザ。

「ま、まさか……、教皇様にも色仕掛けを……」

「男なんてね、股を開けば何でも言うこと聞いてくれるのよ。あいつらの頭の中にはセックスしかないんだから」

そう言ってケラケラと笑った。

「な、なんてことを……。でもあなたに大聖女なんて無理よ。街を守る結界なんてあなたには張れないわ！」

「そんなの作らなくていいのよ。見た目が結界っぽかったら誰も気づかないわ」

「何を言ってるの!? 魔物が街を襲ってきたらどうするつもり!?!」

「そんなの軍隊の仕事よ。私はこの杖でそれっぽい事だけしてればいいの。後は教皇が何とかしてくれるわ」

ゲーザは杖をなでながらニヤニヤする。

「ダメ! 大聖女の仕事はそんなじゃないのよ! 大聖女なめないで!」
必死に叫ぶユリア。

「はっはっは。何と叫ぼうがあなたには何もできないわ」
クッ……。

うなだれるユリア。

「ふふっ、ティモにはこれからごほうびを上げる約束になってるのよ」

ゲーザはいやらしい顔で笑った。

「ティモに……何を？」

「あいつが今一番欲しいもの……、コレよ」

ゲーザはそう言って法衣の上から自分の股間を触り、いやらしい目をしながらくちびるをゆっくりとなめた。

「ウソよ！」

ユリアはそう言うと、目をつぶって首を振り、そのままがっくりと肩を落とした。ティモは生まれてからずっと一緒だった幼なじみ。大聖女になった時に従者として王都にまで一緒についてきてもらうくらい信頼してたし、話の合わない宮殿の人たちの中で、唯一本音で話せる仲間だったのだ。でも、そう思っていたのは自分だけだったらしい。ティモの中に芽生えていた心の闇になぜ自分は気づかなかったのか。

ユリアはあまりのことに気が遠くなり、がくっとひざから崩れ、冷たい床にペタリと座りこんだ。

「でもあいつ下手くそなのよね……、ま、しょうがないけどっ」

ゲーザは勝ち誇ったようにそう言うと、うなだれるユリアを見てしゃがみこむ。そして、いやらしい目をして小声で言った。

「あなた、他人のことより自分のこと心配しなさいよ。追放先は極北の強制収容所をお願ひしておいたわ」

「えっ!? 強制収容所!? そんなの死んじゃうわ!」

目に涙をためながら叫ぶユリア。

ゲーザはそんなユリアを満足そうにニヤニヤしながら見て、

はーはっはっはー!

と、高笑いしながら靴音を高く響かせ、去って行った。

ユリアはティモのことも自分のこともぐちゃぐちゃになって、不安と絶望のあまり崩れ落ち、硬く冷たい床にゴロンと転がった。

どこかでピチョン、ピチョンと水滴が落ちる音が、いつまでも響き続けていた。

1.3. 公爵派の陰謀

コツコツコツ……。

夜半、ユリアが牢の寒さに震えていると誰かが入ってくる。

そっと目を開けると、金髪の少年……第二王子のアルシェだった。

「ア、アルシェ……。こんな所に、いません！」

ユリアは飛び上がり、鉄格子をつかんで叫ぶ。

「ユリア……。こんな所に……」

アルシェは暗く冷たい牢獄の中を見回し……。ユリアの手にそっと手を重ね、涙で潤む目でユリアを見つめた。

アルシェの温かい体温に心を動かされたユリアは、湧き上がってくる悲しみをこらえきれずポロポロと涙をこぼす。

そんなユリアの手を優しくさすりながら、アルシェは悲しそうな目でユリアを静かに見つめた。

「うっうっ……。ゲージたちに……。はめられました……。蒼天の杖も……。彼女が持つ

てます」

「ゲ、ゲーズ!? ……。そうか……。そういうことか……」

アルシェはそう言って眉をひそめ、思索に沈む。

「私を強制収容所送りにするって……。うわあああ！」

ユリアは激しく泣き始める。

「大丈夫、そんなことさせないから！」

アルシェはユリアの手をギュッとにぎって、力強く言った。

牢屋にはしばらくユリアの泣き声が響きわたる……。

「公爵派の陰謀だろう」

ユリアが落ち着くのを待って、アルシェが言った。

ヒック、ヒックとしやくりあげながら、ユリアは涙でぐちゃぐちゃになった顔で

アルシェを見つめる。

「こ、公爵派……?」

「そう、王国は多くの王侯貴族の連合体。王家でも絶対権力者じゃないんだ。そして、最近公爵派が攻勢を強めている。『蒼天の儀』を失敗させれば王家の威信は揺

らぐから、公爵派にとっては都合がいいだろう」

「ゲーザが……公爵派？」

「実は少し前にゲーザが魔法の勉強会に誘ってきたんだ。でも、出席者を調べたら明らかに公爵派だったので断ったんだ」

「危なかったですね……。何とか……ゲーザを捕まえられないかしら？」

「うーん、証拠があれば……。ある？」

ユリアは必死に考えるが、物証など思いつかなかった。

「証拠は……むずかしいわ……」

ユリアは肩を落とす。

「そうだよね……。分かった。僕ができること考えてみるよ。これは差し入れ」
そう言ってアルシェは食べ物と毛布を鉄格子の間から差し出した。

「ありがとう……」

ユリアは受け取って、アルシェの手を握る。

二人はしばらく見つめ合った。二人を隔てるのは数本の鉄の棒。でも、この鉄の棒で仕切られた二つの世界には絶望的な断絶があった。

「こんな事しかできずにゴメン……」

「ううん、ありがとう……」

ユリアは涙を浮かべてギュッとアルシエの手を握りなおす。

王子が夜中に差し入れを用意し、身の危険を冒して秘かに牢屋までやってくる、それは簡単なことではない。ユリアはアルシエの気持ちの温かさに救われる思いがして、またポトリと涙をこぼした。



その頃、東京の田町にある高級マンションの最上階、メゾネットタイプの広いリビングで、美しい女性が物憂げに画面を見ていた。画面には各星から上がってくるニュースが流れ、女性はつらつらとスクロールしていく。

すると、ユリアが涙をポロポロ流している映像が出てきて、スクロールを止めた。「ん？　これ、どうなってんの？」

チェストナットブラウンの髪をゆらしながら目を細めて画面に近づき、しばらく眺めると画面をパシパシと叩く。そして、ずらずらと出てくる関連情報に見入った。

「ルドヴィカ……、あいつか……」

そう言々と大きく息をつく。

女性はいばらく何かを考えると、おもむろに初老の男性のアイコンを押した。

「陛下、お呼びですか？」

画面から誠実そうな声が響く。

「キナ臭い奴見つけたわ。ルドヴィカ。ちょっと洗ってくれる？ それからその大聖女がかわいいそうだから、さりげなく助けてやって」

「かしこまりました」

男性はうやうやしく答える。

「じゃ、ヨロシクー」

そう言って通話を切った女性は、腕時計をチラッと見ると、焦って言った。

「ヤバいやババ、遅れちゃう！」

彼女はクローゼットからブラウンのジャケットを取り出してはおり、バッグを持ってベランダに出る。

そして、

「それっ！」

と、掛け声をかけながら軽く地面を蹴って跳びあがり、ツートとそのまま上空へと飛んで行った。

赤くライトアップされた綺麗な東京タワーの脇を、どんどんと高度を上げて行く。虎ノ門から新橋、汐留に続く高層ビル群が演出する東京の夜は、とても賑やかできらびやかに見える。さっき上がったばかりの雨は東京の夜を艶やかにいつもより輝かせ、女性は楽しそうに眺めながらさらに速度を上げていった。



翌朝、憲兵たちがドヤドヤと牢屋に入ってきて、ユリアを後ろ手に縛り、粗末な馬車に手荒く乗せた。

馬車が動き始め、王宮の門を抜けると、待っていた群衆が険しい顔をして馬車を取り囲む。

「詐欺師ユリアを許すな！」「ユリアを出せ！」

なんと、ユリアをリンチにかけたい怒りに燃えた群衆だったのだ。

ガンガン！ と馬車を叩く音が響く。

ユリアは真っ青になって両手で耳を押さえ、かがんだ。街の人のために今まで大

聖女として二年間、日々祈りをささげ、結界を維持してきたというのに、なぜこんな仕打ちを受けるのか、ユリアは胃がキリキリと痛み、絶望で吐き気を催す。

「お前ら離れろ！」「妨害するなら斬るぞ！」

騎士たちが群衆に向かって剣を抜き、凄む。

馬にムチが入り、馬車は強引に動き出した。

しかし、今度は投石が馬車を襲う。馬車にガン！ ガン！ と次々と当たり、そのうちの一つが窓ガラスを破り、破片が車内に飛び散った。その一つが、かがんでいたユリアの頬を切る。

タラリと垂れてくる鮮血……。

「えっ!？」

ユリアは手の甲にポトリと落ちた真紅のしずくに、思わず息が止まりそうになる。慌てて回復の魔法を使おうとしたが……、神聖力は湧き起こらず、傷はいやせなかった。

はああ……。

ユリアは声にならないうめきを漏らすと、そのままバタリと床に崩れ落ちてし

まった……。

1・4・ 破られたブラウス

その日は馬を替えながら一日中走り続けた。ユリアは青い顔をしてガラスのなくなった車窓から、陽の傾きだした黄色に染まっていく風景をボーッと眺める。

すると、見慣れた小さな山が見えてきた。

その山は小さいころティモと一緒によく遊んだ遊び場だった。確か犬くらいの大さきの傷ついたトカゲの幼生をティモが見つけて、ユリアが治癒魔法で治してあげたりしたのもあの山だった。今思えば、小さな羽が生えていたのでワイバーンの幼生だったのかもしれない。あの頃は毎日朝から晩までティモと一緒に野山を駆け回って、毎日が楽しい冒険だった。

「ティモ……」

ユリアはティモに裏切られたことを思い出し、涙をポロリとこぼした。ティモがゲーザの色仕掛けに堕ちたということは、そういうことに興味がある歳になっていったということなのだ。なのにユリアはそういうティモの成長を無視し、いつまでも子供の関係を維持し続けようとしていた。もちろん、背も高くなり、ヒゲも生えて

きたティモの変化に気づかない訳ではなかったが、ユリアには大聖女の仕事のことしか頭になかったのだ。従者としていつもそばに置きながら距離を保つユリアのやり方を、生殺しだと恨んでいたのかも知れない。しかし、ティモと男女の関係になることはとても想像もできなかった。

ユリアがどうしようもない事を延々と考えていると、ジフの街に馬車は進んでいく。石造りの大きな城門をくぐり、馬の蹄が石畳をパカパカと叩く音が街に響いた。やがて見えてきた大きな屋敷の前で馬車は止まる。領主の屋敷についたのだ。優美な曲線を描く鉄のフェンスに囲まれた屋敷は、手入れされた植木の庭園に囲まれ、ジフの街の中心部に潤いを与えていた。

ユリアはまた縄で後ろ手に縛られ、離れの二階まで連行されていく。

男はドアを開けるとユリアを突き飛ばし、身体をなめ回すように見ると、含みのあるいやらしい笑みをニヤツと浮かべた。そして、

「お前はこの部屋から出てはならん。外出禁止処分だ」

と言って、ドアを閉め、ガチャリとカギをかけて降りて行く。

部屋には質素なベッドとほこりをかぶった古い家具がいくつか並ぶだけ、当面こ

ここで暮らさねばならないのかと思うとユリアはゲンナリし、ベッドにそのまま倒れ込んだ。

男は縄を解いてくれなかった。きっと誰かが解いてくれるのだろうと思ってしばらく待っていたが、誰も現れない。窓から夕焼け空の美しい茜色が見えるが、その美しい色もユリアには何の慰めにもならなかった。

憔悴^{しょうすい}しきっていると誰かが階段を上ってくる。

ガチャリ！

カギが開けられドアが開いた。

現れたのは中年で小太りの男、領主のザロモだった。

ザロモは脂ぎった顔で、几帳面に整えたひげを指先でいじりながら、ベッドのユリアを見下ろす。

「りよ、領主様……」

ユリアはあわてて立ち上がった。

ザロモはユリアが大聖女として選ばれた時、まるで自分のことのように喜び、いろいろと良くしてくれた男だった。ユリアはホッとしてザロモに微笑む。

ところが、ザロモはカツカツとユリアに近づくと、手のひらでユリアのアゴを持ち上げ、じーっとユリアの顔を眺める。

「りよ、領主様？」

ユリアは朝に切った頬の傷が痛み、顔を歪めた。

「お前、大変なことをしてくれたな……」

ザロモはそう言うと言いつつユリアを鋭い目でにらんだ。

「えっ!? 今回の事は公爵派の陰謀です！ 私は利用されたのです！」

味方になってくれると思っていたザロモににらまれ、ユリアは焦る。

「ジフの街の代表として、お前を大々的に王都に送り込んだ俺の顔に泥を塗りやがって！」

ザロモはそう言うと言いつつユリアをベッドに突き飛ばした。

きやあ！

後ろ手に縛られたままのユリアはなすすべもなくベッドに転がった。

「お前の身体で払ってもらえないな……」

ザロモはユリアに近づき、ブラウスに手をかけると、一気にビリビリと音を立て

ながら引き裂いた。

「いやあ！ やめてえ！」

必死に逃げようとするユリアだったが、後ろ手に縛られていてうまく逃げられない。

「暴れるんじゃないぞ。」

ザロモはスカートをたくし上げるとショーツに手をかけた。

「や、止めてください！ いやあああ！」

ベッドの上を必死に逃げるユリア。

パン！

ザロモはユリアの頬を平手打ちした。

「おとなしくしてろ！ お前なんてもう男を喜ばせるくらいしか使い道が無いんだ」

ユリアはあの優しかった男の豹変ひょうへんに驚き、そして、自分はまだ娼婦同然なのだという言葉に涙が止まらなくなった。

堕ちるところまで堕ちてしまった……。

ユリアはその理不尽な運命を呪った。

1・5・ 不可思議な青年

うつつうつつ……。

泣きぬれるユリアをいやらしい笑みで見下ろすザロモ。

そして、彼はショーツを力任せに引っ張り、ビリビリと破きながらはぎ取った。

「いやあ！」

ユリアは必死に転がって逃げる。

「いい加減観念しろ！」

ザロモはユリアの両足をつかむと引っ張り持ち上げる。

もはや猶予はなかった。

自分は冤罪えんざいなのだからアルシエがいつか迎えに来てくれるはず。こんな所で大聖女として守ってきた純潔を穢けがされてしまう訳にはいけないのだった。

「やめてえ！」

ユリアは思いつきりザロモを蹴り飛ばす。

ぐはっ！

もんどり打って転がるザロモ……。

フーフーというユリアの荒い息が静かに部屋に響いた。

ザロモはパンパンと服のほこりを叩きながら起き上がる。

そして、真っ赤になってユリアをにらみつけた。

「お前の両親を王族侮辱罪で投獄してもいいんだぞ？」

「えっ!？」

ユリアは息をのんだ。

「お前の親の処遇を決めるのは俺だからな！」

ザロモはユリアに近寄ると勝ち誇ったように見下ろした。

「パパママは関係ないわ！」

そう叫ぶユリアだったが、領主の横暴を止める手立てがないのも分かっていた。

「よく考えろよ？」

ザロモはいやらしい笑みを浮かべながらズボンを下ろす。

ユリアは奥歯をギリッと鳴らし、動けなくなった。たつぷりと愛情をこめて育ててくれたパパとママ……。親不孝など絶対できないのだ。

「痛いのは最初だけだ。そのうち欲しくなってお前の方からせがんでくるようになる」

ザロモは再度ユリアの両足を持ち上げた。

うっうっう……。

ユリアの鳴咽おえっが部屋に響く。

「さーて、どんな声で鳴くのかな……」

そう言いながらザロモが両足を広げた時だった。

誰かが後ろからザロモの股間を蹴り上げる。

ぐわっ！

悲痛な声をあげながらザロモは床に倒れ込んだ。

「えっ!？」

ユリアが目を開けると、そこにはグレーのシャツに黒いジャケットを羽織ったスレンダーな長身の青年が立っていた。ショートカットの黒髪に印象的な切れ長の目と高い鼻、まるで俳優のような華のあるいで立ちだった。

ユリアは急いで足を閉じ、破けたシャツで胸を隠した。

すると青年はジャケットを脱いでそっとユリアにかけ、

「もう……、大丈夫だよ……」

そう言いながらじっとユリアを見つめた。アンバーの瞳の奥にはゆらりと真紅の炎が揺れる。

そして青年はユリアの前にひざまずき、そっと手を取ると、甲に優しく口づけをした。

「えっ!？」

カチッ

ユリアはその瞬間、自分の中で何かのスイッチが入った音を聞く。ユリアは何かを言おうと思ったが、言葉にならず、ただ、青年の美しい瞳に吸い込まれるように見入っていた。

「我と一緒に……来るか……?」

青年は優しい笑みを浮かべる。

ユリアはどういうことか一瞬混乱したが、ここにいたらレイプされてしまう以上、彼についていく以外道はなかった。

ユリアは困惑した表情を浮かべながら、ゆっくりとうなずく。

「ふざけんなこの野郎！」

ザロモが木の椅子を振り上げ、そのまま青年の後頭部に打ちおろした。

ガ——ン！

碎けながら飛び散る椅子……。普通の人間なら即死の勢いである。

しかし、青年は全く意にも介さずに、スクッと立ちあがり、ザロモの方を向く。後頭部をクリーンヒットしたのにノーダメージ、ザロモはその想定外の出来事にゾッとして、思わず後ずさった。これはつまり、青年は人間ではない、人智の及ばない存在だということなのだ。

「殺しておくか……」

青年はそう言うのと腕に赤い光をまわせ、振り上げた。

「ま、待って！ 殺さないで！」

ユリアは青年に抱き着いて制止する。

「なぜ止める？ こいつは……あなたを傷つけようとした」

「そ、そうなんだけど、私はまだ無事だわ。殺すほどのことじゃない……ありがとう

う……」

ユリアはそう言って、ギュッと青年を抱きしめた。

「そうか……」

青年は目をつぶり、しばらく何かを思案すると、

「今後、彼女や彼女の関係者に危害を及ぼすのであれば、お前とその一族郎党皆殺しにしてこの屋敷は焼き払う……。分かったな？」

と言って、瞳の奥の炎をゆらりと光らせながら、淡々とザロモに警告をする。

ザロモはうんうんとうなずくと、冷や汗をたらしながら聞く。

「お、お前は何者か？」

「我は超越者……、人間よ、調子に乗るなよ……」

青年は不愉快そうにそう言うと、手のひらをザロモの方に向け、光を放つ。

ぐはぁ！

ザロモは吹き飛ばされ、壁にしたたかに叩きつけられると崩れ落ち、意識を失って転がった。

「さぁ……、いきましよう……」

青年は振り返り、優しい笑みでユリアを見つめる。

「お、お願いします……」

ユリアは急いで頭を下げた。

1・6・ 伝説のドラゴン

青年は窓から外に飛びだすと、ボン！ と爆発を起こし、一面煙で覆われた。やがて、煙の中から巨大なものが姿を現してくる。

それは厳ついウロコで覆われた巨大な恐竜のような生き物……ドラゴンだった。大きな翼をゆつくりとゆらしながら、地面に降り立ち、巨大な鋭いかぎ爪に恐ろしげな牙を光らせ、ギョロリとした真紅に光る特大の瞳をユリアに向ける。

「ド、ドラゴン……」

ユリアは口到手を当て、驚きのあまり固まった。

ドラゴンは後頭部を窓枠に合わせると、重低音の声を響かせる。

「さあ、乗って」

ユリアは一瞬躊躇^{ちゆうちゆう}したが、このままここにいる訳にもいかないのだ。意を決すると窓枠に乗り、腕を伸ばし、ドラゴンの頭に生えている長いとげをつかむと恐る恐るドラゴンの上に乗移った。

ウロコはつやつやとして綺麗で、意外にも温かかった。

「こ、ここでもいいのかしら？」

ユリアはトゲのないウロコの上にペタリと座って聞く。

「しっかりとつかまって振り落とされないように……」

ドラゴンはそう言くと、バツサバツサと翼を大きく羽ばたかせた。

そして太い後ろ足で一気に跳び上がると、そのまま翼で空気をつかみ、大空へと飛び立った。

「うわぁ！」

初めて乗る伝説の存在、ドラゴンにユリアは歓喜の声をあげた。

地平線に残る茜色から夜の群青色へと続く、美しいグラデーションの空をドラゴンは優雅に飛んだ。

見下ろすとジフの街には明かりが灯り、美しい夜景が広がっている。

「すごい、すごい！」

大喜びのユリア。

見ると、地平線の向こうからポツカリと黄色い満月が昇ってくる。いつもよりはるかに大きく見えるその満月にユリアは思わず見入った。

「落ちないでね……」

ドラゴンはそう言うのとさらに力強く翼をはばたかせ、一気に速度をあげた。

「きやあ！」

ユリアは驚きながらも、昏く押しつぶされていた心が一気に軽くなっていくのを感じていた。

「ねえ、あなた、お名前は？」

ユリアは弾む心で聞いた。

「私はジェイド……、ユリアに昔助けられた龍だ」

「あ、あの時のトカゲ……じゃなかった、傷ついた生き物があなただったのね！」

「そうだ。ユリアは私の命の恩人だ」

「ふふっ、傷ついた者は誰でも助ける、それが私の仕事なの」

ユリアはうれしそうに言った。

「でも、それだけじゃ陥れられる……。人間界は恐ろしい」

ユリアはあまりにも正しいジェイドの言葉に、返す言葉を失う。

「私の棲み処でゆつくりと暮らすといい。もう誰にもユリアを傷つけさせない」

「……。ありがとう……」

ユリアは目をつぶると、温かいドラゴンのトゲに頼ずりをした。



巨大な火山オンテークの方へ、満月の照らす森の上をしばらく飛ぶ。力強くバツサバツサと羽ばたく翼……。ユリアは風になびくダークブラウンの髪を押さえながら、すごい速さで後ろへと流れていく景色を楽しそうに眺めていた。

やがてジェイドは下降を始める。見るとオンテークの中腹にある断崖絶壁にポツカリと大きな穴が開いている。

「あそこがあなたの家？」

「そうだ。誰も近づけない」

そう言いながらジェイドは翼を大きくはばたかせて減速し……。器用に洞窟内に着地をした。

「私の棲み処すかにようこそ」

そう言いながらジェイドは首を地面にまで下ろし、ユリアはトゲをつかみながら器用に床に降りた。

ボン！

ジェイドは爆発をすると、煙の中から長身ですらりとした男となって出てくる。そして、

「お疲れ様……」

そう言いながらユリアの手を取り、微笑んだ。

ユリアは頬を赤らめてうつむいて言った。

「ありがとうございます……。お世話になります……」

ジェイドはニコツと笑うと、

「こっちだ」

と、ユリアを引っ張った。

洞窟をしばらく歩くと、魔法の光に照らしだされた荘厳な白亜の神殿が現れる。それは優美なグレーの筋が入った純白の大理石で作られており、随所に精緻な彫刻が施されて厳かな雰囲気漂わせていた。

「えっ、ここがお家？」

「龍の棲み処^{すか}とはこういうものだ」

ジェイドはそう言って階段をのぼり、巨大な大理石の広間にユリアを案内した。

1・7・ 温かい指先

「うわぁ……、広い……」

ユリアは広間を見回し、壁際のリアルな彫刻群や立派な円柱を眺める。

「龍の姿だとこれでも狭い」

ジェイドはそう言って肩をすくめた。

「全然生活の匂いが……しないわ。家具もないの？」

「奥に倉庫と……、人用の小部屋がある。おいで……」

ジェイドは奥の重厚な扉を開いて廊下を進み、突き当りの部屋へユリアを案内した。

そこにはベッドやテーブルなどが配してある。

「ユリアはここを使うといい」

部屋のランプに魔法の明かりをつけ、ニッコリと笑うジェイド。

「あ、ありがとう……」

ユリアは窓に駆け寄り、外の景色を眺めた。見渡す限りの森が満月に照らされて

静かに佇^{たたず}んでいる。オンテークは魔の火山として人々に恐れられており、近づく者など誰もいない。確かに安全な棲み処ではあったが……、昨日まで王宮で暮らしていたユリアには少し心細く感じた。

「どうした？ 不満か？」

いつの間にか隣に立っていたジェイドに聞かれ、ユリアは焦って返す。

「ふ、不満なんて無いわ。ただ……ちょっと寂しいかなって……」

そっと目を閉じるユリア。

「我ではダメか？」

ジェイドは少し寂しそうにユリアを見る。

「そ、そんなこと……ないわ……」

ユリアはほほを赤くしてうつむいた。

「ん？ ちょっと見せてみろ」

ジェイドはいきなりユリアが羽織っていたジャケットのボタンを外した。

破かれたブラウスのすき間から胸元が露わになる。

「えっ!? 何するの?」

焦って腕で胸を隠し、後ずさるユリア。

「いいから、見せてみろ」

ジェイドはユリアに迫る。

「えっ!? えっ!？」

ユリアは身をかかわそうとして、不覚にもスツールにつまずき、ベッドに転がってしまった。

「逃げなくていい」

ジェイドはそう言うベッドの上でユリアの腕を押さえた。

美しい切れ長の目に真紅の炎が揺れる。

「ちよ、ちよっと待って、こういうのは順序が……」

ユリアは抵抗しようとしたが、ドラゴンの力は圧倒的で身動きができない。

ジェイドの細く長い指がスツとユリアの胸に伸びる……。

ひっ！

ユリアは目をギュツとつぶる。

ジェイドの温かい指づかいが優しく胸のあたりをスーッと這^はう。

「あっ……」

ユリアの漏らした声が部屋に響く……。

ペリペリペリ……。

ジェイドはユリアの心臓の辺りに貼られていた、ごく薄いフィルム状のものをはがした。

直後、ユリアは光に包まれる。

「えっ!？」

ユリアは驚いた。失っていた神聖力が復活したのだ。

身体を起こし、両手に向かい合わせにして気を込めると、以前のように激しい輝きが両手の間に輝いた。

「うわぁ……」

ユリアは満面に笑みを浮かべ、その神聖な輝きに見入る。

「封印の魔法陣が貼られていた」

ジェイドはそう言って、剥がした封印のシールに火を吹きかけた。シールは一気に燃やし尽くされ、紅く輝く火の粉がパラパラと舞う。

「これでもう安心だな」

ジェイドは微笑んだ。

しかし、ユリアはジェイドをジト目でにらむ……。

「どうしたんだ？ 嬉しくないのか？」

ジェイドは不思議そうに聞く。

「嬉しいわよ！ でも……、やり方ってものがあるわよ！」

口をとがらせて言う。

「何がマズかった？」

「乙女の身体に勝手に触っちゃダメなの！」

「そうか……」

「そうよ！」

ユリアは腕組みをして、キッとジェイドをにらんだ。

「……。分かった。二度と……触らないと……誓うよ」

しょんぼりしてうつむくジェイド。

そのしょげっぷりを見てユリアは言い過ぎたと思った。やり方はともあれ、純粹

に善意で神聖力を取り戻してくれたのにお礼も言っていない。

それにあの指先の温かさは、不思議に不快ではなかったのだ。むしろ……。

「あ、いや……絶対に触るなって……言ってる訳じゃ……ないのよ？」

ユリアは真っ赤になって言う。

「触ってもいいのか？」

ジェイドはキョトンとする。

「じゅ、順序っていうものを守ってっただけなの！」

「順序？」

「あー、何でもない！」

ユリアは大きな枕に抱き着くと、真っ赤な顔を隠して転がった。

自分は何を言っているのだろう？ 男に体を触らせるなど絶対の絶対にダメな

はず。それを順序だなんて……。

ユリアはしばらく動けなかった。

1-8. ドラゴンのディナー

グウ——ギュルルル。

ジェイドが心配そうにユリアを見守っていると、静かな部屋にユリアのおなかの音が響いた。

クスツとジェイドは笑い、

「夕飯にしよう。肉しかないんだがいいか？」

と、聞いた。

ユリアは恥ずかしくなまってさらに真っ赤になって固まる。

ジェイドは首をかしげ、そっとユリアの手をさすった。

ユリアは枕をそっとずらし、心配そうに見つめるジェイドを眺める……。

そして大きく息をつくと、バツと起き上がり、言った。

「ごめんなさい、言い過ぎたわ。夕飯、お願いします。何か手伝うことがあったら……」

「大丈夫、ちょっと待ってて」

ジェイドは優しく微笑んでそう言うのと、部屋を出ていった。

ユリアは立ち上がると、窓辺から月を眺め、

「私……、どうしちゃったのかしら……」

そうつぶやいて眉をひそめ、ため息をついた。

満月が優しくユリアの美しく張りのある肌を照らす。

ホーウ、ホーウ

どこかで鳥が鳴くのが聞こえた。



しばらくして、ジェイドがプレートに大きな肉と飲み物や食器を載せて部屋に戻ってきた。

「あっ、手伝うわ」

ジェイドはニコツと微笑むと、

「大丈夫、座ってて」

そう言ってテーブルにプレートを置き、手早く食器を整えた。

肉は五キロくらいはあろうかと言う大きな塊で、いい焼き色がつき、表面には

ローズマリーなどのハーブがついていた。

ジェイドは人差し指の爪を鋭くナイフのように伸ばすと、シュッシュと肉をスライスしていく。そして、全部スライスし終わると斜めに倒し、切り口が並ぶようにして綺麗に盛り付けた。

「美味しそう！」

ユリアは目を輝かせ、思わずつばを飲む。

そんなユリアを見てうれしそうに微笑むと、ジェイドはブランデーを全体に振りかけた。そして、手のひらから魔法で豪炎を放つ……。

ゴォォォ——。

炙られた肉はブランデーが燃え上がって大きな炎を噴き上げる。そして、ジュ——というおいしそうな音を放ちながら香ばしい香りをあげていく。

「うわぁ……」

ユリアはその見事な料理ショーに魅せられる。

王宮でもこんな見事なディナーは見た事が無かった。

ジェイドはユリアを席に座らせると、肉を三切れ皿に盛ってサーブする。

そして、リンゴ酒をグラスに入れてユリアに渡した。

「どうぞ召し上がれ」

「ありがとう……」

二人は見つめあい、シュワシュワ音を立てるグラスをカチンと合わせる。

「我の棲み処すかにようこそ」

「素敵な出会いに乾杯……」

ユリアはと口の中ではじける泡の感覚を楽しみながらリンゴ酒を飲み、鼻に抜けていく華やかな香りにウットリする。

肉も柔らかく、ジューシーで、表面はカリッと香ばしく極上の味わいだった。こんなのを自分で作ってしまえるなんてドラゴンは相当な美食家なのだ。

「これ、すんごく美味しい」

ユリアはパアッと明るい顔をしてジェイドに微笑む。

「口に合ってよかった。ハーブと塩をまぶして低温のオーブンに入れてただけなんだ」

そう言って静かにグラスを傾けた。

ユリアは少し酔いが回ってきたのかそんなジェイドをボーッと見つめる。凜とした切れ長の目にシュツとした高い鼻……、見れば見るほど美形なのだ。そして細く長い指……。あれがさっき胸を這っていた、温かな指先……。

「えっ!？」

なぜそんなことを思い出してしまったのか、ユリアはポツと頬を赤らめてブンブンと首を振った。

「どうした？」

ジェイドは心配そうにユリアの顔をのぞき込む。

「な、な、な、何でもないわ!」

ユリアは両手を振って全力で否定する。

そして、リング酒をゴクゴクと飲んだ。

ジェイドはそんなユリアを不思議そうに眺める。

「し、神聖力、と、取り戻してくれてありがとう……」

ユリアはちょっと伏し目がちに言った。

「あんな封印をするなんて許し難い連中だ」

ジェイドは眉をひそめ、自分の事のように怒る。

「ありがとう……」

「王都を焼き払うか？」

ジェイドは恐ろしい事を平然と言う。

「あ、いや、悪いのは一部の人だけだから……」

ユリアは驚いて否定する。

「では、そいつらに復讐するか？」

ジェイドは瞳の奥を真紅にゆらりと光らせた。

「だ、大丈夫。誰にどう復讐したらいいのかもわからないし、復讐したからと言って元には戻らないわ……」

ユリアはため息をつき、うつむく。

「このままでいいのか？」

「うーん、なんか疲れちゃった……。しばらくはここでゆっくりさせて欲しいの……」

「そうか……。我は構わない。好きなだけここで暮らすといい」

ジェイドは真剣なまなざしでユリアを見つめた。

「ありがとう……」

目をつぶりしばらくユリアは何かを考える……。

「私……神聖魔法しか使えないからここでは役に立てそうにないの……。それでもいい？」

「別に何もしなくていい。ただ、ユリアに使えない魔法なんて無いぞ」

「へ!? だって、私、神聖力しかないわよ？」

「それが原因だ。『使えない』と思ってるから使えないだけだ」

「え——!? そんなことって……あるの？」

「明日、使い方を教えてあげる」

ジェイドは優しく微笑む。

「そ、そう……」

ユリアは半信半疑で静かにうなずいた。

1・9・ 温かい安らぎ

「ユリアはベッドを使って」

食後にジェイドが片付けながら言った。

「ダ、ダメよ！ 私は床で寝るわ！」

「ふふっ、我は龍となり広間で寝るから気にするな」

ジェイドはニコツと笑う

「あ、そ、そうなの？」

「歯ブラシやタオルなどはその棚にある。好きに使っていい。パジャマは大きい
が我慢して欲しい。ではまた明日……」

そう言うと、ジェイドは食器などを一式持って出ていった。



ふう……

静かになった室内で、ユリアはベッドに転がり今日あったことを丁寧に思い返す。
群衆や領主に襲われ……、ドラゴンに助けてもらい……、それで、胸のシールを

はがして……もらった……。

ボツと顔が真っ赤になり、ユリアはベッドを転がり、悶えた。

そして、毛布をかぶり、気持ちを落ち着ける。

一体自分はどうしてしまったのか……。

悩んでいるとそのうち意識が遠くなり……寝入っていった。牢屋でほとんど寝ていない上に長旅で疲れがたまっていたのだ。



「い、いやぁ！」

夜半にユリアが叫んで起き上がる。

「あ、あれ……？」

はぁはぁと荒い息をしながら暗い室内を見渡すユリア。

ホーウ、ホーウ……。

窓の外からは鳥の声が聞こえている。

「ゆ、夢……だったのね」

ユリアは大きく息をつき、びっしりと汗をかいた額を手のひらでぬぐった。

男たちに追いかけて回され、襲われる夢……、それは弱っていたユリアの心の傷をさらに抉^{えぐ}っていた。

うっうっう……。

今までの人生をすべて否定され、プライドも尊厳も粉々にされたユリアの心はボロボロだった。昏い想いが胸を蝕んでいくのをどうしても止められない。一体どうしてこんな事になってしまったのか……。

うううう……。

ユリアは流れる涙を止めることができず、綺麗な顔を歪めながら月明かりに照らされた毛布を濡らした。

コンコン！

「どうした？ 大丈夫か？」

ドアが叩かれ、ジェイドの声がする。

「ご、ごめんなさい……、大丈夫……」

ユリアは急いで涙を拭いた。

ジェイドは部屋に入ってくると、涙にぬれ、憔悴しきったユリアをしばらく見つ

め、そして、静かに近づいてユリアの隣に座る。

ユリアは恥ずかしくなつてうつむいた。

するとジェイドは、涙にぬれたユリアの手を取り、両手で包んで温める。

うつうつ……。

ユリアはその温かさに、押さえていた涙が止められなくなり、またポロポロと涙をこぼしてしまふ。

「我慢……しなくていい……」

ジェイドは優しくそう言つて、ユリアの頭をそつとなでた。

するとユリアは、ジェイドに抱き着いて、堰を切つたように大きな声で泣き叫ぶ。

うわあああ……。

ポロポロになった心が求めていた温もりを、自然とジェイドに求めるユリア……。ジェイドは優しく抱きかかえ、何も言わず、ただゆっくりと背中をさすった。



しばらく泣き叫ぶとユリアは落ち着きを取り戻し、ジェイドの厚い胸板から伝わってくる温かさに癒されていた。

「添い寝してあげよう」

ジェイドはそう言うのと、優しくユリアを横たえる。

「えっ……」

ユリアは驚いた。男の人と一緒に寝るなんて、想像もしてなかった事態だった。

「嫌か？」

ジェイドはちょっと寂しそうにユリアを見る。

「い、嫌じゃ……ないけど……、ちょっと、そのお……」

ユリアは何と言ったらいいか悩んだ。

するとジェイドはニコツと笑い、ユリアの隣に寄り添うと、毛布を掛ける。

「えっ、えっ……」

思わず身体を硬くしてしまうユリア。

ジェイドはそんなユリアの頭をそつと持ち上げると腕枕をして、優しく髪をなでた。

最初は緊張していたユリアだったが、優しいジェイドの手の動きに徐々に心がほぐれていく。

「安心して寝るといい」

ジェイドは耳元でささやく。

ユリアはゆっくりとうなずくと眠気に身をゆだねる……。

最後にはユリアはまるで赤ちゃんになったかのようにジェイドに抱き着き、温かい安らぎに包まれ、すうっと眠りに落ちて行った。



その頃、ジフの南、公爵が治める王国第二の都市ダギユラの宮殿で、公爵ホレス・ダギユラは土下座をしていた。

静まり返った夜の宮殿の応接間、高い窓から差し込む月明かりを浴びながら少女は豪華な椅子に深く腰掛け、すらっとした細い足を組んでキセルをくゆらせている。土下座されている少女はつまらなそうに、薄くなったホレスの頭を眺めながら言った。

「大聖女、ドラゴンに取られちゃったわよ？ あんた何やってんの？」

「も、申し訳ございません。まさかドラゴンが来るとは……」

小太りの中年男、ホレスは冷や汗をたらしながら弁解する。

少女はスクツと立ちあがり、細いヒールでホレスの後頭部をガシツと踏むと、

「私、いい訳嫌いって言わなかったかな？」

そう言ってヒールでグリグリと薄い頭を踏みにじった。

「ぐわあ……、お、お許してください……」

少女はその間抜けなさまを眺め、首を軽く振ると、ボスつとまた椅子に腰かける。ウェーブのかかった金髪が月明かりにキラキラと揺れた。

「まあいいわ、次はスタンピードよ、うまくやんなさい」

と言ってニヤツと笑う。

「はっ！ 大聖女なき今、スタンピードは相当効くでしょう。お任せを！」

挽回しようと必死のホレス。

少女は美味しそうにキセルを吸い、

「楽しみになってきたわ……」

そう言うのと、すうっと消えていった。

1・10・ アールグレイの魔法

チチチチ！ チュン！ チュン！

鳥の声で目を開けると、すっかり明るくなっていた。

「えっ!? あれっ!?」

急いで飛び起きて、目をこすりながら周りを見回すユリア。

「あっ、そうだわ……。ここはジェイドのお家……」

ユリアはぶかぶかの男物のパジャマをじっと見つめながら、何か大切なことを忘れていた感じがした。

「えーと、昨晚は悪い夢を見たような……。それで……ジェイドに腕枕してもらって……。えっ!?」

ユリアはジェイドとの事を思い出し、真っ赤にした顔を両手で覆う。

「あわわ……。な、なんというはしたない……」

今まで男性の胸なんて触ったこともなかったのに、自ら抱き着いて行ってそのまま添い寝してもらうなんてありえない話だった。追放されたとはいえ、復帰する可

能性がない訳でもない。自分の中ではまだ大聖女なのだ。

「ど、ど、ど、どうしよう!!」

ユリアはどんな顔でジェイドに会えばいいのか途方に暮れた。

「ジェ、ジェイドはドラゴンだから、こんな小娘のことなんて何とも思っていないよね？　そう！　ジェイドは人間じゃないからノーカウント！」

ユリアは頭を抱え、必死に正当化を試みる……。

ふと、パジャマの袖からジェイドの匂いがする事に気がついた。

「えっ……？」

ユリアは思わずパジャマに鼻を近づけ、そーっと嗅いでみる……。
昨晚の温かな気持ちがいよみがえってきて、思わず顔がほころんだ。

コンコン！　と、ドアが鳴る。

「ひいっ！」

思わず跳び上がるユリア。

「どうした？　大丈夫か？」

ドアの向こうでジェイドが聞く。

「だ、だ、だ、大丈夫よ！」

爽やかな顔をして入ってきたジェイドは、両手に袋を下げていた。

「市場でユリアの食べ物を買ってきた」

見ると、大きく丸いパンやトマトやキュウリ、柑橘に瓜などが入っている。

「わ、私のために!? ごめんなさい、ありがとう」

「人間は肉だけじゃダメだから」

「うん、嬉しい！」

喜んでジェイドを見上げたユリアだが……、ジェイドの優しいまなざしに昨晚の事を思い出し、顔を真っ赤にしてうつむいた。

「どうした？」

「さ、昨晚はごめんなさい……」

「ん？ 寝返り打ちながら蹴ってきたことか？」

「えっ!? 蹴ったの？ 私が!？」

目を真ん丸に見開くユリア。

「元気にゲシゲシ蹴ってた」

うれしそうに目を細めるジェイド。

ユリアは思わず天をおおぐと、

「ごめんなさい！ ホント——に、ごめんなさい！」

と、ひたすらに謝った。

「大丈夫。ダブルベッドに替えよう」

「えっ!? これからも添い寝!？」

慌てるユリア。

「ん？ 嫌なのか？」

「い、い、い、嫌じゃ……ない……わ。でも……」

うつむいたまま、どうしたらいいか分からなくなるユリア。

「では、後で一緒に買いに行こう」

ジェイドはそう言うと、朝食をつくりキッチンへと出ていった。

「ダブルベッドでずっと添い寝……？ それってまるで夫婦……ええっ!？」

ユリアは呆然^{ぼうぜん}となって固まった。



肉料理に、サラダ、パン。美味しそうな食卓をかこんで朝食を食べる二人。

チチチチと鳥のさえずりが森から聞こえてくる。

「お茶はアールグレイでいい？」

ジェイドが優しく聞いてくる。

「あ、もう、何でも……」

ユリアはまだちょっとぎこちない。

ジェイドはニコツと微笑むと、水魔法で空中に水玉を浮かべた。何をするのかと思ったら次は火魔法で水玉を器用に囲む。

「うわあ、すごい！」

まるでマジックショーのようなジェイドの技に思わず歓声を上げてしまうユリア。

ジェイドはそんなユリアを優しい目で見る。そして、火を止めると湯気の立ち昇る水玉にサラサラと茶葉を振りかけた。茶葉は茶色の軌跡を描きながらゆらゆらと踊り、ふんわりとベルガモットの爽やかな香りを放つ。

王宮でも見たことのない、素敵なお茶のショーにユリアはじっと見入った。

水玉をクルクルと回して渦を作って茶葉を集めると、ジェイドは水玉から茶葉のない小さな水玉を作り、ティーカップへと落としてユリアへと差し出した。

「はいどうぞ」

「うわぁ！　ありがとー！」

ユリアは満面の笑みで受け取る。

そして一口含むと、目を閉じて満足そうに軽く首を振った。

「うーん、美味しー！　私もそれ、やってみたいな……」

ユリアはニコニコしながら言った。

「うん、教えてあげる。でも……これはちょっと上級だ」

「そうよね……。まずは火魔法と水魔法覚えないと……」

ジェイドは優しい目でうんうんとうなずく。そして言った。

「魔法ってなんだか分かる？」

「私は神聖魔法しか使ったこと無いけど、身体の芯に神聖力をためて、それを術式のイメージの上に乗せるの。そうすると魔法が起動するわ」

「そうだね、でも本当は魔法を起動するのに神聖力も術式も要らないんだ」

「へっ!?　なんで？」

ユリアは予想外のことに声が裏返った。

1・11. 瞑想とシステム

「人の思考には表層意識と深層意識がある。魔法は深層意識のイメージの実体化にすぎないんだ」

ジェイドは淡々と説明する。

「どういう……こと？」

いきなり難しいことを言われ、首をかしげるユリア。

「理屈を考えたりするのは表層意識、そして、心の動きが深層意識だね」

「うーん、では魔法は心の動き……なの？」

「そう、心の奥底でイメージを練り、システムに渡す」

「システム？」

「ユリアも無意識にやってるはずだよ。術式のイメージを固めたらどうしてる？」

「どうって……、おへその辺りに……集めてる……かな？」

ユリアは宙を見つめながら答える。

「その先にシステムがある」

「おへそがシステム!？」

「システムは実体があるわけじゃない。深層心理の出入り口だ」

「出入り口？」

ユリアは首をかしげる。頭の上には「？」マークが浮かびそうだ。

「まあ、実際にやってみよう。これを見て」

ジェイドは手のひらの上にろうそくのような小さな炎を出した。

「綺麗な……炎ね……」

ユリアは近づいてじっと見つめる。

真紅の炎は手のひらの上でゆらゆらと揺らめき、鮮やかな光の微粒子をパラパラと宙に放っている。

「手を近づけると……、熱い。やってみて」

ユリアはそっと手を近づけて……、

「あちちち！」

と、手を引っ込めた。

「そう、熱いもの、熱いエネルギーのイメージをシステムに送るんだ」

「分かったわ！ 熱いエネルギー……熱いエネルギー……」

ユリアは目をつぶってイメージするが……何も出てこない。

「それは表層意識だね」

「えっ!？」

「深層意識でイメージしないと」

「そんなの……どうやれば？」

ユリアは眉をひそめる……。

「深呼吸を繰り返すんだ。四秒息を吸って、六秒止めて、八秒かけて息を吐く。やってごらん」

「わ、分かった……」

スウ——、……、フウ——。

スウ——、……、フウ——。

「うまいうまい。徐々に深層意識へ降りていくよ」

スウ——、……、フウ——。

スウ——、……、フウ——。

ユリアはだんだんポワポワした気分になってきて……、やがてすう——っと意識が深い所に落ちて行く感覚に囚われた。

「この状態で熱いエネルギーをイメージだ」

ユリアはトロンとした目をして手のひらを上にする……。

しかし、何も起こらない。

「焦らなくていい、もっと奥へもぐってみて……」

スウ——、……、フウ——。

スウ——、……、フウ——。

ユリアはさらに深層意識の奥深く潜っていく……。

次の瞬間、

ボワッ！

炎が手のひらの上に灯った。

そして、さらにイメージを追加していく……。

どんどんと大きくなる炎……。

やがてキャンプファイヤーのような炎になった時、ジェイドは水玉をぶつけ、消

火した。

ジュワー！ 湯気がもうもうと上がる。

「上出来だ。はい、戻っておいで」

ジェイドがそう言うのと、ユリアの目がパッと開き、

「できたわ！」

と、喜んで両手を高く突き上げた。

「さすがユリアだな。普通はこんなにはすぐは無理だ。後は魔法の種類と強さを鍛えて行けばいい」

ジェイドは微笑む。

ユリアには適性が無いとされていた火魔法が出せたなら、水魔法も風魔法も出せるだろう。飛行魔法だって使えるはずだ。

今、この瞬間、ユリアに無限の可能性が開けたと言える。

「ありがとう！」

ユリアはキラキラした瞳で、ジェイドの手を両手で包んだ。

ジェイドはニコツと笑ってうなづく。

「でも……、魔法がこういうものだとしたら、神聖力とか術式って……、何なのかしら？」

ユリアは首をかしげる。

「深層心理で何かやるというのは普通なかなかできないので、簡略化した方式が開発されたんだよ。楽な分、制約がついてる」

「開発……？」

「昔、魔法なんてなかったんだ。あるお方が導入して、その際に設定されたんだよ」
「へっ!？」

ユリアは目を真ん丸くして言葉を失った。生まれてからずっと親しんできた、自分の一部ともいえる神聖魔法。それは大いなる自然の摂理の一環だと思っていたら、誰かに作られたものだと言う。

ドラゴンが嘘なんか言わないだろうし、実際自分もジェイドの言うとおりにやったら火魔法が使えたのだ。

一体この世界はどうなっているのか？ 知られざるこの世のカラクリの裏を垣間見たユリアはブルッと震え、背筋に悪寒が走った。

「そ、そのお方って……、誰なの？」

ユリアは恐る恐る聞く。

「うーん、説明が難しいな。そのうち……会えるかもね」

ジェイドは眉をひそめながら言った。

魔法を作った存在、それはもはや神と言えるような存在だろう。一体どんなお方なのだろう……。

ユリアはゆっくりとうなずき、今まで想像もしたことなかった新しい世界観を、どうとらえたらいいいのか困惑していた。

1・12・ 賢者となったユリア

ユリアはその後、延々と魔法の練習に打ち込んだ。今まであきらめていたいろんな魔法が全部使える、それはユリアにとって新たなフロンティアであり、好奇心旺盛なユリアは必死に試行錯誤を繰り返す。

水魔法を練習していると、コンコンとノックされた。

「どうぞー」

気楽に返事をする、ジェイドが大荷物を持って現れた。

「えっ!? なにそれ!?」

驚いた拍子に水玉がピシャン! とテーブルに落ちてしまう。

あああ!

思わず声を上げるユリア。

するとジェイドは飛行魔法でふきんを棚からポンと動かして、テーブルをササつと拭いた。

それを見ながらユリアは、

「すごいわ……。私も早くそれやりたい……」

と、羨ましそうにふきんの動きを眺める。

「悪いけど、ちょっとどいて」

そう言ってジェイドはテーブルを動かし、持ってきた長い板を並べる。

「なにをするの？」

ユリアが不思議そうに聞くと、

「今晚の寢床」

と、答える。ダブルベッドを買ってきたらしい。

「えっ!? 本当にダブルにするの!？」

頬を赤らめて口を押えるユリア。

「広い方がいいだろ？」

ジェイドは爽やかにほほ笑む。

「そ、そ、そ、そうだ……けど……」

ユリアはドキドキする心臓を押さえ、目をつぶる。

もちろん、ジェイドはドラゴン、自分をどうしようとする意図なんてないだ

ろう。しかし、自分は十六歳の純潔の乙女なのだ。一緒に寝てるなんてことを誰かに知られたら……。――

「どうした？」

ジェイドは板を組み立て終わると、悩んでユリアに聞いた。

「一緒に寝てること……、誰かに知られたらまずいかな……って……」

モジモジしながらユリアが答えると、

「じゃあ、二人の秘密にしよう」

そう言ってニコツと笑う。

「ひ、秘密って……。そ、そうじゃなくて！」

秘密にしたらすべて解決……。な訳ではない。

若い男女は一緒に寝ちゃいけないことをどう説明したらいいのか……。

「大丈夫、誰にも言わない」

ジェイドはまっすぐな目でユリアを見る。

「あー！ もう！ 間違いがあったらどうするのよ！」

ユリアはイライラして叫んだ。

「間違いつて？」

ジェイドはキョトンとする。

「ま、間違いつていうのは……そのう……」

ユリアは説明しようとして固まってしまった。

そして、みるみるうちに真っ赤になり、頭から湯気が上がる。

ユリアは目をつぶってブンブンと首を振り、大きく息をついた。

よく考えればジェイドから迫られることはないだろう。彼のユリアを見る目はまるで妹を見るような優しい目で、異性に向けるようなまなざしではないのだ。

で、あれば、ユリアから迫らない限り間違いなど起こりようがない。

なんだ、大丈夫……。そう思いかけた時、ふと、ジェイドの厚い胸板の感触がよみがえり、顔がボツと真っ赤に染まった。

うそ……。

一体自分は何を考えているのか？

ユリアは自分に自信が持てなくなってしまう。

スウ——、……、フウ——。

スウ——、……、フウ——。

ユリアは深呼吸を繰り返した。

やがて眼がトロロンとしてきて、雑念は消え去っていく。

「どうした？ 大丈夫か？」

ジェイドはユリアの行動に心配になって声をかける。

「大丈夫、一緒に寝ましょう」

賢者となったユリアはうつろな目でほほ笑んだ。



日も暮れて、昨日より少しやせた月が昇ってくるのをユリアがボーっと見ていると、ジェイドが料理と食器をプレートに入れて持ってきた。

「今日は照り焼きにしてみた」

そう言ってニコツと笑う。

「うわぁ！ 美味しそう！」

ユリアは目を輝かせて湯気の上がる大きな肉の塊を見つめた。

ジェイドが肉をスライスすると、

「ねえ、今日は私に炙^{あぶ}らせて」

と、ユリアが言う。

ジェイドはユリアをじっと見て、

「やってごらん」

と、微笑んだ。

スウ——、……、フウ——。

スウ——、……、フウ——。

ユリアは深呼吸をし、綺麗に並んだ肉のプレートに手をかざす……。

直後、ブワツと炎が上がり、肉はジュワァといい音を立てる。

ユリアはまんべんなく炎を肉全体にいきわたらせていく……。

「うまい、うまい。もういいぞ」

ふんわりと立ち上る香ばしい香りに、ユリアはニッコリと笑うと、

「やったあ！」

と、言ってピョンと飛び跳ねた。

ジェイドは皿に肉を盛ってユリアに渡す。

「初の火魔法の味だ、どうぞ」

「ふふっ！　ありがと！」

ユリアは受け取るとフォークで口に運ぶ。

そして、目を大きく見開くと、

「美味し〜！」

と、言って、目をギュッと閉じて首をフルフルと振った。

1・13・ 肉々しい手触り

気を良くしたユリアはリンゴ酒を何杯かおかわりしながら、上機嫌で魔法の魅力を語り、肉料理をモリモリと食べる。

そんなユリアを、ジェイドは微笑みながらうんうんとうなずいて聞いていた。絶好調に盛り上がり、すっかり満足したユリアは、

「うーん、お腹いっぱい！」

と、言ってベッドにダイブする。

「歯を磨かないとダメだぞ」

そんなユリアに声をかけるジェイド。

「だいじょぶ、だいじょぶ、それー！」

クリーナップ
生活浄化！」

ユリアはそう叫んで手を上にあげた。

すると、ユリアは光に包まれていく。

そして、光が消えた後にはツヤツヤでさっぱりとしたユリアが満足げに横たわっていた。

「さすが大聖女……」

ジェイドは感心しつつも釈然としない様子で、だらしなく転がる幸せそうなユリアを眺めていた。



ユリアはキラキラと光あふれる世界を飛んでいた。温かく、心温まる世界……。ふわふわと輝く光の結晶と戯れながら、この上ない幸福感に包まれていた。すると、光の結晶がスーッとどこかへと飛んで行ってしまう。

ユリアは急いで追いかける。

「ダメ！ 行かないで！」

そう言いながら、両手でギュッと光の結晶を抱きしめた……。

だが……、手触りが妙に肉々にくにくしい……。

あれ……？

ここでユリアは目を覚ます。

月明かりが照らすダブルベッドの上で、ユリアが抱きしめていたのはジェイドだった。それもパジャマのすき間から腕を滑り込ませ、肌を直に抱きしめている。

「あわわわ！」

ユリアは一気に眠気が吹き飛び、急いで手を抜くとジェイドから離れ、毛布を頭まで被った。

一緒に寝るのはダメなどと言いながら、自分はジェイドの肌をまさぐっていた。それは信じられない事態だった。

目をギュツとつぶり、必死に言い訳を考えていると、

「どうした？ またうなされたか？」

と、ジェイドの声がする。

「だ、だ、だ、大丈夫よ！」

顔から火が出るような思いで返事をする。

「腕枕してあげるからおいで」

優しい声がする。

「う、腕枕は痺れちゃうでしょ？ 無理しないで」

「何を遠慮してる？ 龍は腕枕くらいでなんともならない」

ジェイドは飛行魔法でふわっとユリアを持ち上げると、自分の隣に引き寄せ、毛

布を整えながら腕枕をした。

目をギュッとつぶって硬くなるユリア。

「我はユリアの味方だ。怖がらなくていい……」

ジェイドは耳元でそっとささやく。

ユリアは大きく息をつくとゆっくりうなづく。

じんわりと伝わってくるジェイドの体温、そしてサンダルウッドのような奥行きのある森の匂いがユリアを包む。

逃げることもない、今はジェイドの厚意に甘えておこうと思った。



それからしばらく、ユリアは魔法の練習に精を出した。大聖女として魔法の扱いに長けていた彼女は、次々と新たな魔法を覚え、また、威力と精度を上げていった。

「いい？ 見ててね！」

ユリアは飛行魔法でテーブルの上に野菜と肉を浮かべる。そして、風魔法で細かくにカットすると火魔法でそれを包んだ。しばらくするとジューっといういい音がして香ばしい香りが漂ってくる。

続いて水魔法で水を加え、塩とハーブとコンソメを追加したらさらに火力を上げる。

グツグツという音がしてきたら、弱火にしてしばらく経ったら出来上がり。それをスープ皿に分配した。ちゃんと、一つは野菜抜きにしてある。

「どう？　すごいでしょ？」

ドヤ顔のユリア。

「素晴らしい。お料理上手だな」

ジェイドは自分のことのようにうれしそうに微笑んだ。

味わってみると、奥行きのある味がする。最初に炙った火加減が合っていたらしい。

「これは美味しいな……」

ジェイドはそう言いながらあっという間に平らげる。

「うふふ、今度はもっとたくさん作るわね」

ユリアはうれしくてグツとこぶしを握った。

1・14・ ドラゴンは拳闘士

「ねえ、私、冒険者になろうと思うの」

ユリアはスープを飲みながら言った。

「冒険者？ 危ないぞ」

ジェイドは顔を曇らせる。

「でも、ずっと山にこもっていても将来がない気がする……」

「いつまでもこうやって二人で暮らせればいい」

「ありがとう……。でもお金も稼ぎたいし、何か挑戦したいのよ」

ユリアは上目づかいにジェイドを見た。

「そうか……」

ジェイドは腕組みをして考え込む。

「ダンジョンで魔物を倒して魔石を売るの。そこそこ稼げるって聞いたわ」

「うーん……。では二人パーティでやってみるか……」

ジェイドは気乗りしなさそうに言う。

「やったー！」

ユリアはうれしそうに笑った。



翌朝、ドラゴンの背に乗ってスウワの街へ飛んだ。ユリアは金髪碧眼に変身して、パッと見大聖女とは気づかれないようにしている。

山をいくつか越え、遠くに大きな湖が見えてくる。スウワの街はその湖のほとりにあるのだ。

ジェイドは街の近くで速度を落とし、

「そろそろ人に戻るぞ」

と、重低音の声を響かせる。

ユリアはピョンと空中に跳びあがると、ふわふわと浮いた。

ボン！ と煙を上げて、中から人化したジェイドが出てくると、ユリアをお姫様抱っこする。

「えっ!？」

驚くユリア。

「舌を噛まないようにしてて」

ジェイドはそう言う一気に速度を上げ、隠ぺい魔法を展開して街の中心部へと降下して行く。

高い城壁に囲まれたスウワの街は、湖の水を生かし、水路が整備されている水の街である。

「うわー、綺麗……」

金髪をなびかせながらユリアは、小舟が行きかう美しく整備された街を眺めた。ジェイドは人気のない裏通りにスーッと着地して、ユリアを下ろす。

「ありがとう！」

ユリアにとっては久しぶりの街である。目をつぶってしばらく人々の生活の匂い、響いてくる生活音を感じながらうれしそうに笑った。



「ギルドは……これかな？」

剣と盾の木製の看板を見上げながらジェイドが言う。

「まずは冒険者登録……、しないとね」

ユリアも看板を見上げ、少し緊張してゴクツとツバを飲んだ。

ギギギ……。

年季の入った木製のドアを開けると臭いタバコの煙が漂ってくる。手前は冒険者たちがくつろぐロビースペースとなっていて、奥にカウンターが見えた。

二人はカウンターを指すが、長身のイケメンと金髪碧眼の若い娘のペアはどうしても目立ってしまう。冒険者たちの値踏みをするような視線が刺さる。

「いらっしやいませ。どういったご用件ですか？」

えんじ色のジャケットをピシッと決めた若い受付嬢が、にこやかに声をかけてきた。

「冒険者登録をお願いしたい」

ジェイドはカウンターの周りを慎重に見回しながら答える。

「分かりました。お二人とも……、ですよね？ 職業は何ですか？」

「職業？」

ジェイドは困惑する。ドラゴンに職業などあるわけではない。

「あ、私は魔術師です。彼は……、何だろう？」

二人は顔を見合わせて考え込む。

「教会で宣託せんたくを受けてると思いますけど……？」

受付嬢は困惑する。

「魔物をこう、ボコボコと殴る職業ジョブはなんて言うんだ？」

グラディエーター

「拳闘士……ですかね？」

受付嬢は首をかしげる。

「なんだよ！ 自分の職業ジョブも分かんねーのかよ！」

ロビーの禿はげた中年の冒険者がヤジを飛ばし、ゲラゲラと笑う。

それにつられて他の冒険者もからかうような笑い声を立てた。

ズズズズ……。

ジェイドの身体の周りから黒いオーラが漏れ出てくる。

「えっ……？」「うお……」

その異様な雰囲気、笑っていた者たちの顔から血の気が引いていく。

ジェイドは静かに振り向くと、無表情のまま指を鳴らした。

ガン！

禿げた男が派手に吹き飛ばされて床に転がる。

周りの冒険者たちは何が起こったのか理解できず、凍り付く。

静まり返るロビー。

ジェイドはニヤツと笑うと、前を向いて言った。

グラディエーター

「それではその拳闘士とやらで登録してくれ」

1・15・ 飛び散る水晶玉

受付嬢は吹き飛ばされた中年男を見て青ざめていたが、目をつぶって大きく息をつくと気を取り直して言った。

「わ、分かりました。そうしたら、ランクを決めますので、まず、お嬢さんはこの水晶玉に手を置いて魔力をこめてください」

ユリアは緊張した。大聖女である自分の魔力はSSSクラス。ここで自分の魔力が正確に測定されたら、騒ぎになって自分が逃走している大聖女だとバレかねない。魔力を出し切らないように慎重に絞って出そうと、深呼吸を繰り返す。

ユリアはそっと水晶玉に手を置くと、小さな炎を出すイメージで魔力を出した。水晶玉はほんのりオレンジ色に色づいた。

「うーん、Fか……E……ですかね……」

受付嬢は水晶玉をジツとのぞき込み、ユリアはホツとする。

その時だった。中年男を吹き飛ばした時の埃が漂^{ほこり}ってきて、ユリアの鼻をくすぐった。

へ……、へ……。

ヘクチュン！

くしゃみをした瞬間、間違って全魔力が水晶玉を貫く。水晶玉は一瞬激しい閃光を放ち、パン！と割れて飛び散った……。

「へっ!？」

嘩然とする受付嬢。水晶玉が割れるなんてこと、いまだかつて聞いた事が無かったのだ。Sクラスの魔術師だって明るく輝くだけなのに。

指先で男を吹き飛ばしたこのイケメンにしても、水晶玉を割った少女にしても明らかに異常だった。

「ちょ、ちょっと待ってください！」

受付嬢はあわてて二階へと駆けあがって行ってしまった。

ユリアはジェイドと目を見合わせ、『やっちゃったー』という感じでがっくりと肩を落とした。



ギルドマスター室に呼ばれた二人は、眼鏡をかけたやり手風の女性にソファーに

座るように勧められる。アラサーくらいだろうか、その鋭い視線にはただ者ではない雰囲気を感じられた。

「私がマスターよ、ヨロシク。早速だけど、あなた達何者なの？」

単刀直入に切り込んでくるマスター。

ユリアが口ごもっていると、ジェイドが淡々と言った。

「ダンジョンで小銭を稼ぎたいだけの、ただの冒険者候補だが？」

マスターは眉をひそめてジェイドを見つめ、ジェイドは無表情で見返す。

部屋には嫌な静寂が漂う……。

「あ、あのー。私たち、本当にダンジョンに潜りたいだけなんです。そのためのギルドカードを出してもらえませんか？」

ユリアが横から言う。

ギルドマスターは大きく息をつくと、自嘲^{じちよう}気味に言った。

「もちろん、冒険者になりたいって連中はみんな訳アリよ。こんなのマトモな人がやるような仕事じゃないんだから……」

そして、二人にお茶を勧め、自分も一口すすった。

「でも、聞けばあなたたち相当な実力者よね？　そういう人たちには高いランクを授けて支援する代わりに、国の仕事も手伝ってもらわないといけないの。そういう法律があるのよ」

マスターは二人を交互に見ながら説明する。

「そういうのは困る」

ジェイドは眉をひそめる。

「分かるわ。あなた達も訳アリなんでしょ？　だったら取引しない？」

ニヤッと笑うマスター。そして、続けた。

「あなた達の実力が本当に破格だったら……、ギルドと裏契約しましょう」

「裏契約……？」

ユリアは怪訝けげんそうな顔をする。

「蛇じゃの道は蛇《へび》。あなたたちのこと、秘密にしてあげるわ……。でも……、ギルドの仕事、手伝ってもらおうわよ」

「その仕事というのは？」

ジェイドは眉をひそめたまま聞く。

「公にできない調査やスパイの摘発とか……。犯罪ではないからそこは安心して」

「絶対やらなきゃいけないんですか？」

「んー、もちろん断ってもいいわよ。でも、全部断るのは止めてね」

マスターは斜に構えてユリアを見る。

「それなら……。まあ……。いいかも？」

ユリアはジェイドを見ながら様子をうかがった。

ジェイドは大きく息をつくと、ゆっくりとうなずいた。

「ただ！ あなた達の実力をちゃんと見せてもらってからよ！」

マスターはニヤツと笑って言う。

「どうやって……。見るんですか？」

ユリアは心配そうに聞いた。

「ダンジョンで魔物をチャチャツと片付けてみて」

「ダンジョン？ 何階に行けばいいんだ？」

「何階でもどうぞ？ でも地下十階とかは止めてね。評価できないから」

「分かった」

ジェイドはそう言っていると、不安そうにしているユリアの頭を優しくなでた。

1・16・ 絶望の地下 71 階

三人は街の近くのダンジョンへとやってきた。

エントリーするとポータル魔法陣が並んで淡く光っている。それぞれ、近くには『11』、『21』、『31』と飛び先の階数の数字が書かれていた。ただ、『81』と『91』は暗いままである。まだ開通していないらしい。

「さて、何階から行く？」

マスターは挑発的な笑みを浮かべ、聞いてくる。

「行ける最高は地下 71 階ってことか？」

「そうね、過去最高の到達階数が 72 階だから……」

「では、71 階で……」

ジェイドはそう言うと言とユリアの手を取って 71 階の魔法陣を踏んだ。

「えっ!? ちょっと待ちなさいよ! 二人で行ける訳ない……、あああ……」

マスターが叫んでる間に二人は 71 階へ行ってしまった。

ぼうぜん
呆然とするマスター。

フル装備のSランク6人パーティですら72階で壊滅したのだ。何の装備もしていない二人組が行こうものなら即死である。マスター自身名を馳せたAランク冒険者ではあったが、自身の最高到達階は59階。70台などまさに未知の領域だった。「どうしたら……」

頭を抱えてしばらくしゃがみこんでしまうマスター。

しかし、マスターとしてこのまま帰るわけにもいかない……。

「ううう……、バカ者どもがあ!!」

そう叫ぶとポータルを踏んだ。



マスターが71階に着くと、ユリアが真紅に光る魔石を拾っていた。その鮮やかな赤は見まごうことないグレーターオーガの魔石、つまり、もうすでに二人はグレーターオーガを倒してしまっていたのだ。

グレーターオーガは最低でもレベル百。Sランクパーティでも手こずる相手である。その魔石が点々と落ちているということは、グレーターオーガの群れを瞬殺したという証拠なのだ。

マスターはこの二人の恐るべき強さに唾然^{あぜん}として言葉を失った。

「あ、マスターさん。もうやっちゃってますよ」

ユリアはニコニコしながらマスターを見る。

マスターは何も言えず、ただ、うなずいた。



「さあ行くぞ」

ジェイドはそう言って洞窟の奥を目指し、チヨコチヨコとユリアはついていく。

「ちよ、ちよっと待って！ もうちよっと上へ行きましょう。ここは危険だわ」

マスターが蒼ざめて言う。

「危険？ ここが？」

ジェイドは首をかしげる。

「結構いい魔石が落ちるんです。このまま行きましょう！」

ユリアはうれしそうに笑い、当たり前のように二人は奥へと進んだ。

「えっ、ちよっと、置いて行かないで！」

マスターは必死に追いかける。

しばらく行くとジェイドはピタツと止まる。

「ど、どうしたのよ？」

マスターはびくびくしながら聞く。

「落とし穴だ」

そう言いながらジェイドは手近な石を放り投げた。

カチッ！

床がガン！　と開き、深い穴が姿を現す。のぞきこんでも底は見えない。相当

深い階に繋がっているようだ。

ヒュオオオオオ——。

下から風が吹き上がってくる。

「降りるぞ」

ジェイドはユリアを見る。

ユリアは好奇心いっぱいニッコツと笑ってうなずいた。

「ちょ、ちょっと待って——」

慌てるマスターを、ジェイドは飛行魔法で持ち上げると一緒に穴へと飛び込み、

ユリアもそれに続く。

「ひやあああ！」

マスターの叫び声が洞窟に響いた。

しばらく降りて行くとフロアが見えてきた。しかしそこには無数の魔物がうようよとしており、降りてくる一行を待ち構えている。トロールにゴーレムにジャイアントスケルトン……どれも超 A ランクの厄介な魔物だった。

「ひい！ だから嫌だったのよお！」

マスターはほとんど泣き顔で叫んだ。

しかし、ジェイドは表情一つ変えず、ほわあ！ と気合を込め、全身を魔力で青白く光らせる。その圧倒的な魔力に空気はビリビリと震え、熱気が吹き上がってきた。

ジェイドはゆっくりと魔物たちに向かって両手を向ける……。

フン！

ジェイドがそう声を上げると、

ブウン！

という空気の震える音が響き、激しく光る青白い衝撃波が放たれた。

「うわぁ！」

あまりのまぶしさにマスターは腕で顔を覆う。

衝撃波は超音速で一直線に魔物たちに迫り、

ズガン！

と、大爆発を起こし、ダンジョン全体が揺れ動くほどの振動が巻き起こった。パラパラと小石が落ちてくる。

爆煙が晴れてくると、魔物たちは倒されており、全て魔石となってコロコロと地面に転がった。

マスターは目を疑う。Sランクパーティーでも手こずる超Aランクの魔物の群れがたった一撃で消え去ってしまったのだ。一体このイケメンは何をやったのだろうか？ あの衝撃波は何なのだろう？

1.17. 双頭のワイバーン

ほどなくして床に降りてきた一行。そこは巨大な広間となっており、床には色とりどりの魔石が転がっている。

ユリアはうれしそうに魔石を集め、ジェイドはそんな様子を微笑んで見守る。するとユリアは向こうの柱の陰になにかを見つけた。

ユリアはポケットに魔石をしまおうとゆっくりと深呼吸をし始める。

スウ——、……、フウ——。

マスターがその視線の先を見ると、盛り上がる筋肉に覆われた赤い巨軀、禍々しい角の魔物が鼻息荒くこちらに歩き出した。一瞬、グレーターオーガかと思ったが、それよりも一回り大きく、伝わってくる圧倒的な魔力を考えると……、もしかしたらジェネラルオーガかも知れない。

ひ、ひい……。

マスターはタラリと冷や汗を流し、思わず後ずさる。

ジェネラルオーガはオーガの最終進化系と伝えられているが実際に見たことなど

無いし、見たことがある人など聞いた事が無い超レアモンスターだった。その強さは想像を絶する。

すると、ユリアが両手をオーガにかざし、ハッ！ と気合を入れた。直後、激しい閃光が走り、強烈なエネルギー弾がオーガへと放たれた。

ズン！

激しい爆発が巻き起こり、ダンジョン内は閃光に埋め尽くされる。

きやああ！

マスターは思わず倒れ込む。こんな魔法見たこともなかったのだ。その圧倒的な魔力量、爆発の規模、それは今まで見てきた魔法のどれとも似つかず、かつ圧倒的な威力だった。

そして、マスターは魔力測定の水晶玉が割れた理由を理解する。たしかにこの威力なら割れてしまうだろう。人間離れた魔力量、一体この少女は何者なのだろう。直後、爆発の衝撃波が一行を襲ったが、それはマスターたちには届かなかった。

「へっ!？」

見ると、ジェイドがシールドを張って一行を守っていた。

「近い敵に撃つときはシールドが要るんだ」

ジェイドはニコツとしながらそうユリアに説明する。

「あ、ありがとう」

ユリアは恥ずかしそうにジェイドに頭を下げた。

すると、爆煙から何かが飛び出し、目にも止まらぬ速さでジェイドのシールドを砕いた。それは体表が焦げたオーガだった。

ひゃあ！

思わず両手で頭をかばうマスター。

しかし、ジェイドは顔色一つ変えることなくオーガの胸元に瞬歩で迫ると、青白く光らせたこぶしでオーガの胸を打ち抜いた。

ゴフツ！

オーガの体が宙に浮く。そしてそこにジェイドは青白い衝撃波を放った。

ズン！

衝撃波はオーガの身体をメチャクチャに潰す。直後、オーガは鮮やかな朱色の魔石となって落ちてくる。

コン、コン、コロコロ……。

マスターは転がる魔石の音を聞いてそつと顔を上げ、ハイタッチして喜んでいる二人を今にも泣きそうな目で見上げた。そして、二人の底知れない強さに言葉を失い、試そうとした自分の浅はかさを呪った。



ジェイドが急に険しい顔をして大きな通路の向こうをにらんだ。

ズーン、ズーン！

地響きが近づいてくる。

とんでもない魔物の気配にマスターは青ざめ、思わず後ずさった。

曲がり角からニョキつと巨大な恐竜のような頭が二つ現れる。そのウロコに覆われた頭には鋭い角が生え、口には大きな牙が光っていた。

「そ、双頭のワイバーンだわ！　Sランクモンスターよ！　だから嫌だったのよお！」

マスターが悲鳴に似た叫びを上げる。ジェネラルオーガも相当な難敵だが、双頭のワイバーンは破格だ。街すら焼き尽くすその圧倒的な攻撃力は伝説にもなってい

るのだ。

しかし、ジェイドは表情を一つも変えることなくワイバーンをにらむ。

ワイバーンは、ギュアアア！ と重低音の叫びを上げ、ドスドスと迫ってくる。

「いやあああ！」

マスターは真っ青な顔で叫び、急いで柱の陰に隠れた。

ところが……、近くまで来たワイバーンはジェイドを見つめると急に歩みを止めた……。

そして、なんと後ずさりし始める。

「え？」

何が起ったのか分からないマスター。

次の瞬間、ワイバーンは急いで逃げ始めた。

S ランクモンスターが逃げるなんてこと、聞いたこともない。マスターは唾然とする。

「逃がさんよ」

ジェイドはそうつぶやくと手のひらに気合を込め、真紅のレーザービーム状のエ

エネルギー弾を放つ。

ドン！

衝撃音を放ちながら、エネルギー弾はワイバーンの巖ついウロコを貫いた。

1・18・ 最高に訳アリの二人

グアアアア！

ワイバーンは断末魔の叫びを上げながら薄くなっていき、最後には金色の魔石となつて転がる。

マスターは信じられないものを見たかのように呆然として立ち尽くす。最高レベルの魔物ですらこのイケメンにとっては雑魚にしかないのだ。それはSSSランクとかそう言うレベルではなく、人間の到達できる強さをはるかに超えている。逆に言えばこのイケメンがその気になったら人類は滅ぼされてしまうに違いない。言うならば魔王クラス……、いや、そのものずばり魔王なのではないだろうか？

マスターはひざがガクガクと震えた。

「ジェイドすごい！」

ユリアは無邪気にジェイドに駆け寄り、手を握って興奮気味に喜んでいる。

ジェイドは、

「魔法の才能はユリアの方が上だから、そのうちこのくらいできるようになるよ」
そう言って優しく微笑んだ。

それを聞いてマスターはさらに驚く。少女の方が上だというのだ。イケメンが魔王だとしたら、この少女は何なのだろう？ 魔王妃？ 何にしても今、自分は人類の脅威を目にしているのだ。

ギルドマスターなんて引き受けなければよかった……。早く家に帰りたい……。マスターは心細くなり、早く逃げる事ばかり考えていた。



しばらく通路を進むと下への階段があった。

二人は迷うことなく降りて行く。

マスターは何か言おうとしたが言葉が見つからない。もはや彼らについていく以外生還する方法などないのだ。

階段を下りると高さ十メートルはあろうかという巨大な扉が見える。青色の金属製で、金の縁取りがされた扉は美しく、風格すらあった。

これはボス部屋だ。しかし、普通のボス部屋の扉には装飾などされていない。こ

こは特別なボス部屋……つまり、ダンジョンの最下層、百階だろう。

マスターはとんでもない所に来てしまったことを知り、言葉を失う。

今まで誰も見たことのない、ダンジョン最強のボスが出てくるのだろう。一体どんな戦いになるのだろうか？ それは想像すらしたくない恐ろしい話だった。

ジェイドは躊躇することもなく、無造作に扉を押し開いて進み、ユリアはチョコチョコとそれに続く。

マスターは一瞬扉の外で待っているかとも思ったが、待っていたからと言って生存確率が上がると思えない。洩々二人に続いた。

扉の向こうは大広間になっていて、豪華な大理石で作られたインテリアで飾られている。そして奥の壇上には豪華な椅子があり、そこには誰かが座っている……。

「いらっしゃーい」

全身紫色の筋肉質の男が声を上げると、魔法のランプが一斉に大きく吹き上がり、大広間は明るく照らしだされた。

マスターはゾツとしてブワツと全身の毛が逆立ったのを感じる。言葉を話す魔物なんて初めて見たのだ。確か、上級魔族は言葉を話すということを聞いたことがあ

る。しかし、詳しいことは分かっていない。何しろ上級魔族に会って生き残った人間など、ほとんどいないのだから。

ガタガタと震えるマスターを気にすることもなく、ジェイドはスタスタとその男の方へと歩いた。

「誰かと思えばアバドンじゃないか」

ジェイドは男に声をかける。何と知り合いらしい。

「クフフフ、来てしまいましたか……。十年前に殺しきっておかなかったのは失敗でしたね」

「やはり、あれはお前だったのか。世代替わりを狙うとはあいかわらず卑怯な奴だ」

「卑怯？　誉め言葉ですねぇ。クフフフ」

「十年前の恨み、晴らさせてもらおう」

「魔族とドラゴンは相容れない存在……。いいでしょう、雌雄を決しますか……」

そう言うど魔族は全身をまばゆい紫色の光で覆った。

ジェイドも負けじと身体を青白く光らせる。

地下百階の大広間は魔族対ドラゴンの因縁の対決の戦場と化したのだった。

「えっ!? ド、ドラゴンって……」

マスターは目を丸くしながら二人の会話に圧倒される。

「ああ、バレちゃった……。彼はドラゴンなんですよ……」

ユリアは苦笑いしながらそう言うと、マスターはユリアを見て固まった。世界最強の伝説の存在、ドラゴン。そんな恐るべき存在を自分は試そうとしていたのだ。ユリアは言葉を失っているマスターの手を引いて部屋の隅に下がり、強固な結果のドームを展開した。その壮麗に美しく輝く結果を見てマスターはさらに驚く。いまだかつてこんなに精緻で強固な結果は見た事が無かったのだ。一度有名な聖女の作った結果を見たことがあったが、こんなに上質なものではなかった。聖女の上にはもう大聖女しかないが、現在大聖女と言われているのは一人だけ……。

「あなた！ 魔術師じゃなかったの!?!」

マスターはあわてて聞く。

「一番得意なのは神聖魔法なんです」

そう言って苦笑いをする。

マスターはここで全て分かってしまった。そうなのだ、この二人はドラゴンと大

聖女、最高に訳アリの二人だったのだ。

「な、なんでギルドカードなんて作りに来るのよお!？」

マスターは半分泣きそうになって言った。

1・19. ワナにハマるドラゴン

グオオオオオ！

魔人が恐ろしげな重低音を響かせ、吠える。そして、全身に力を入れると、周囲に十個くらいの球が紫色に輝きながら浮かび上がった。球は黒と紫の炎を揺らめかせながら不気味に揺れている……。

「死ねい！」

と叫ぶと、球は紫色の矢となって一斉にジェイドの方へぶっ飛んで行った。先頭を鋭く輝かせ、キラキラと光の粉を放ちながら、ジェイドに向かって一直線に飛ぶ魔法の矢。

ジェイドは冷静にスッと横っ飛びに飛んでかわす……が、外れた矢はＵターンして追尾してくる。

チッ！

ジェイドは舌打ちをすると、輝かせた腕を振って矢に向かって青白い衝撃波を放つ。

ズーン！

激しい閃光が大広間を埋め尽くし、大爆発が起こって煙がもうもうと上がった。直後、爆煙の中から真紅のまばゆいビームが飛び出し、魔人を襲う。

しかし、魔人は待っていたかのように、手の甲に展開しておいた金色の魔法陣を斜^{はず}に構えてビームを捉え、軌道をそらした。

ズガン！

大理石の壁に当たったビームが大爆発を起こし、大広間が激しく揺れ、パラパラと天井から小石が落ちてくる。

「あわわわ……」

マスターは異次元の激しいやり取りに圧倒され、ユリアの後ろに隠れて目をギュッとつぶった。

「さすがだな、ドラゴン。だが、これはどうかな……」

魔人はニヤッと笑うと

フンッ！

と、気合を入れる。すると、ボコボコと紫色の筋肉が盛り上がり、さらに鮮やか

に紫の光を放った。

そして、瞬歩で一氣にジェイドの目の前に移動すると、目にも止まらない速さですさまじいパンチを放つ。

ズン！

ジェイドは腕に白く輝く小さな魔法陣を展開し、パンチを受けたが、衝撃で後ろにずらされた。

クッ……

美しい顔を少しゆがめる。

「どうした優男？ うりゃあ！」

魔人はいやらしい笑みを浮かべた顔でそう叫ぶと、左右のパンチを交互に高速にくりだし、ボコボコと殴り始める。

ガッガッガッガッガッ！

重い響きの打撃音が大広間に響いた。

ジェイドは両腕に展開した魔法陣でパンチを受け続けるが、徐々に後ろに押されていく。

「あぁっ！ ジェイド！」

ユリアは手に汗を握り、思わず叫ぶ。

「どうした？ 手も足も出ないか？ フハハハ！」

魔人はさらに殴る速度を上げ、目にも止まらぬ速度でジェイドに襲いかかる。

ガガガガガガ！

しかし……、その直後、

ズン！

重低音が響き、魔人が吹き飛ばされる。

ぐはぁ！

もんどり打って転がる魔人。

見ると、ジェイドの後ろから太いシッポが伸びている。ドラゴンの尾で魔人を殴り飛ばしたのだった。

そしてジェイドは何やら腕をビュンと振り、

「手も足も出なかったけどな」

と、爽やかに笑う。

「ひ、卑怯者……」

魔人は口から紫色の血をタラタラとたらしながら、ヨロヨロと立ち上がる。

「俺は龍だからな、卑怯でも何でもない」

ジェイドは涼しい顔をして言う。

魔人は大広間を駆けてジェイドと距離を取ると、

「正々堂々勝負しろ！」

そう叫んで腕を前に出して、手のひらでクイクイツと挑発する。

ジェイドはスタスタと距離を詰める……。

それをニヤニヤしながら見ていた魔人は、

「クフフフ、馬鹿め！ 死ねい！ ^{超重力}ギガグラヴィティ！」

そう叫ぶとジェイドの足元に紫色の大きな魔方陣を輝かせる。

前もって秘かに描いておいた魔法陣にジェイドを誘い込んだのだった。

マスターが驚いて叫ぶ。

「^{超重力}ギガグラヴィティ!? ま、まずいわ！」

「な、何なんです……あれ？」

ユリアは青い顔をしながら、しがみついているマスターに聞く。

「あの魔法陣の内部は重力百倍なのよ。彼が八十キロだとしたら、今、八トンが彼の上に乗っかっている計算になるわ」

「八トン!?!」

ユリアは思わず両手で口を覆う。

しかし、ジェイドは落ち着き払っている。ユリアは助けに行きたい思いをぐっとこらえ、

「大丈夫、ジェイドは負けないわ!」

と、ジェイドを信じて待った。

1・20・ チェックメイト

魔人は『してやったり』という顔をして、

「もちろんこのくらいじゃお前は殺せない。でも、動きは鈍くならざるを得ないだろう？ もはやお前はこれを避けられない……」

そう言いながら、真紅に輝く魔法陣をジェイドに向けて自分の前に展開した。

ジェイドは激しい重力に耐えながら、それでも涼しい顔で言う。

「魔法陣があることくらい気づいてたよ」

「えっ……？」

ポカンとする魔人。

「チェックメイト」

ジェイドがニヤッと笑ってそう言うと同時に、魔人の首がスパッと斬り落とされ、地面にゴロゴロと転がった。

切り口から紫色の血液がピューッと吹き上がる。

ジェイドは飛んでくる何かを手で捕まえた。それは龍のウロコで作った鋭く精巧

なブーメラン。魔人がジェイドを魔法陣に誘導する時に立つであろう位置に、事前に投げておいたのだった。

「やったあ！」

ユリアは思わず両手を上げる。そして、

「ね、うちのジェイドは強いでしょ？」

と、ドヤ顔でマスターの顔を見た。

するとマスターは熱に浮かされたようなポワンとした表情をしている……。

「イケメンのドラゴン……、すごいわ……」

「ど、どうしたんですか？」

ユリアは怪訝そうに言う。

「ねえ、あなた達付き合ってるの？」

いきなりプライベートなことに踏み込んでくるマスター。

「えっ!? そ、そんな、っ、付き合ってるだなんて……ち、違います……」

ユリアは真っ赤になる。

「だったら……、私が彼を誘ってもいいわよね？」

「さ、誘うって？」

ユリアはポカンとして聞く。

「男女の関係ってことよ……」

マスターはウツトリとした目でジェイドを見つめる。

「ダ、ダ、ダ、ダメです！」

ユリアは真っ赤になって叫んだ。

「あら？ あなたに止める権利なんてあるのかしら？」

マスターは挑発する視線でユリアを見る。

「な、何でもダメなんです！」

そう叫んで、ユリアは駆け出した。

「ジェイド——！」

ユリアは両手を前に出して駆けて行き、ジェイドに飛びついた。

ジェイドは、幸せそうな顔でユリアを受け入れると、

「心配させちゃったか？ ごめんな」

そう言って優しく頭をなでた。

「ううん……。信じてたわ……」

ユリアは目を閉じて温かなジェイドの体温を感じる。

それを見たマスターは、

「何よ、入るすき間なんて無いじゃない……」

と、ため息をついた。

「なんや、お熱いところ見せつけんで欲しわ」

転がってる魔人の生首が声を上げる。

「ひっ!？」

ユリアが驚いて跳び上がった。

すると、魔人の胴体が歩いて行って生首を拾う。

「今回は負けや！ お宝はあんさん方のもんや。好きにせえ。ほな！」

そう言うど魔人は徐々に薄くなり、消えていく……。

「あれでも……死なないのね……」

ユリアはポカンとした表情をしてジェイドを見る。

「いつもこうなんだ」

ジェイドは苦笑いしてユリアを見つめた。



奥のドアを開けるとそこは宝物庫になっており、光り輝く金銀財宝がまさに山積みだった。全部換金したら国家予算規模を超えそうな勢いである。

「すごい！」

ユリアは目を真ん丸くして驚く。

「これは我らがもらってもいいのか？」

ジェイドはマスターに聞く。

「当たり前じゃない。どうぞどうぞ！」

マスターはサバサバした感じで答える。

「では、一旦全部我が預かっておこう」

ジェイドはアイテムバッグを出すと、口を広げ、魔法を使って財宝を全部袋に吸い込ませた。アイテムバッグは異空間に物を収納できる優れたもののアイテムである。

マスターは、高価で希少なアイテムバッグを、無造作に使いこなすジェイドを見

て苦笑した。



ギルドマスター室へ戻ってくると、マスターは二人に頭を下げた。

「試すようなことをして申し訳ありませんでした。ドラゴンに大聖女……、ギルドが契約できるようなお方たちではありませんでした。ごめんなさい」

「そ、そんな、隠していたのは我々の方なので、頭を下げないでください」
ユリアは焦って返す。

「ありがとうございます。ギルドカードは好きなランクの物をお出しします。ただ……ダンジョンはクリアしてしまったので、しばらくはもぐれませんが……」

「一月もしたら再生するだろう」

ジェイドは淡々と言った。

「何ランクがいいかな？」

ユリアはうれしそうにジェイドに聞く。

「時間はあるからゆっくりと考えればいい」

ジェイドはそんなユリアを優しく見つめ、微笑んだ。

1・21・スタンプード

階段を下りていくと、ロビーが騒然としていた。

「ダンジョンがクリアされたらしいぞ！」

「えっ!? 一体誰が!？」

「クリアした人、きつとまだこの街にいるわよね？」

「そもそも、さっきダンジョンから帰ってきたパーティって誰？」

冒険者たちは興奮気味に口々に言葉を交わす。

「ちよっとすみません……」

ユリアが声をかけながら、ザワザワしている人ごみの間を抜けていく。

「さっき帰ってきたのは……」

禿げた中年の男がユリアを目で追う。

しかし、ユリアは若い男と二人パーティである。たった二人でダンジョンをクリアできるはずがないのだ。

「まさか……なあ……」

男は腕を組んで首をかしげた。

ギルドを出ると、ユリアはクスツと笑ってジェイドを見る。

ジェイドは涼しい顔でそれでも口元には笑みがあつた。



「この後どうする？」

ジェイドは優しい目でユリアを見る。

「あー、ちょっと買い物したいんだけどいいかな？ あのお金……使っている？」

ユリアは手を合わせておねだりする。

「もちろん……」

ジェイドはニコツと笑ってそう言うと、アイテムバッグの中に手を入れて、金貨をひとつかみ取り出し、ユリアのポーチにチャリチャリと流し込んだ。

「えっ!？」

驚くユリア。

「本日の予算はこのくらいで」

ジェイドはウインクする。

「こ、こんなに要らないわよ。馬車が買えちゃうわ！」

「じゃあ、馬車でも買う？」

うれしそうにジェイドは答える。

「いやいやいや……」

ユリアは天を仰いだ。

「毎日これくらい使ったって一生使いきれないから大丈夫」

「一生!？」

目を真ん丸くして驚くユリア。

「今日は久しぶりの街なんだから楽しんで」

「そ、そうよね……。ありがと！」

ユリアは満面に笑みを浮かべてジェイドを見上げた。



服や調味料、小物などを買って、ちょっと高級なレストランに来た二人。

「ダンジョンクリアを祝って、乾杯」

「カンパニー！」

二人はグラスを合わせてリング酒を口に含んだ。

爽やかな香りとシュワシュワした炭酸が身体に沁みる。

「美味しいわ……」

ユリアはトロンとした目で、心地よい疲れが癒されていくのを感じていた。

攻撃魔法も通用したし、ギルドカードももらえる……。

冒険者としてやっていけそうな手ごたえに、新たな人生が楽しみになってきていた。

その時だった――。

「ねえ、聞いた？ スタンピードですって！」

隣のテーブルのおばさんがキナ臭いことを言っている。

ユリアは思わず眉をひそめてジェイドを見た。

ジェイドも険しい表情で聞き耳を立てる。

話を総合すると、数日前に王都にスタンピードが襲ってきたらしい。幸い撃退はできたようではあったが多くの死傷者が出たという話だった。

ユリアはがっくりと肩を落としてため息をつく。自分が張っていた結界が健在で

あれば死傷者など出なかったはずなのだ。ゲーザだか公爵派だか知らないが、彼らの陰謀が引き起こした被害に腹が立って……、それでもどうしようもない自分に打ちひしがれていた。

食べ物がのどを通らなくなってしまったユリアを、ジェイドは心配そうに見つめる。

二人は早々にレストランを引き上げ、オンテークの家に帰った。



ダブルベッドの上で月明かりを浴びながら、泣きそうな顔でユリアは言った。

「ねえ……、私、どうしたらいいのかしら……」

「どう……って？」

ジェイドが少し困惑したように返す。

「手を尽くして、また大聖女に復帰できるように頑張った方がいいんじゃないかって……」

「でも、ユリアは罪人とされてしまってるから、公爵派の陰謀を暴いて名誉の回復をしないとならないんだろ？　できるのか？」

「そう……、そうなんだけど……」

ユリアは沈む。どう考えてもそんな事不可能に思えたのだ。

2・1・ 想定外の言葉

「我と暮らすのは嫌になった？」

寂しそうな声を出すジェイド。

「そ、そんなこと無いわ！ いつまでも一緒にいたいわ！」

ユリアは慌ててジェイドの胸に顔をうずめながら言った。

優しく背中をさするジェイド……。

「ただ……。多くの人が傷つくのが耐えられないの……」

「ユリアは優しい娘だな……」

「神様にもらった『大聖女』の力を生かさないのは……なんだかサボってる感じがして……」

ジェイドは優しくユリアの頭をなで、しばらく思案すると言った。

「分かった。我の方で、それとなく王都の情報を調べておこう」

「……。ありがとう……。ジェイド大好き……」

ユリアは自分の口をついた、とんでもない言葉に仰天する。

「あ、いや！　だ、だ、だ、大好きっていうのはね……」

真っ赤になって慌てて取り繕う言葉を探す……、見つからない。

「私も好きだぞ」

ジェイドはそう言ってユリアをギュッと抱きしめた。

「えっ!?　えっ!?!」

ユリアは激しく高鳴る心臓の音にどうしたらいいのか分からず、頭から湯気をあげながらただギュッとジェイドにしがみつく……。

そんなユリアの頬を愛おしそうにジェイドはなでた。

優しい指使いに、ユリアはゾクツと背筋に痺れるものを感じ、恐る恐るジェイドの顔を見上げる……。

月明かりに照らされた部屋の中で、ジェイドの瞳の中には紅く炎が揺らめいて見えた。

ユリアは思わずジェイドの頬に手を伸ばし……、指先でそっと触れる。

ジェイドの整った顔に真剣な表情が浮かび、ゆっくりとユリアに近づいた。

ユリアは緊張で硬くなりながらもそっと目を閉じる。

温かなジェイドの唇がユリアの可愛い唇に重なり……、柔らかな舌がユリア唇を温かく湿らせる。

ユリアはピクツとファーストキスの感覚に驚き、固まる。

でも高まってくる熱い胸の内をどうしたらいいか困惑し……。

そして、意を決した時、ジェイドは離れる。

「おやすみ……」

ジェイドはユリアの額にキスをして、髪をなでると毛布を優しくかける。

……、え……、終わり？

ユリアは思わず口をポカンと開けてしまう。

モジモジと動くユリアだったが、やがて、ジェイドの寝息が聞こえてくる。

「えっ!？」

フレンチ・キスだけで放置するジェイドに、

「バカ……」

と、つぶやくと、寝返りを打ち、毛布をかぶった。

ただ、火照った身体は鎮まらない。

ユリアは毛布をそっと持ち上げて、幸せそうに寝ているジェイドをちょっとにらむと、

「あー！ もう！」

と、一人で憤慨し、また毛布をかぶる。

その晩ユリアはしばらく寝付けなかった。



それから数週間、二人は毎日のようにお出かけを楽しんだ。

「ねえ、ジェイド。今日は海を見に行きたいわ」

「海？ 魚でも獲るのか？」

「違うわよ、泳ぐの！ 海辺の街の人は暖かい季節にはビーチでくつろいだり泳いだりするって聞いたわ」

ユリアはノリノリで言った。

「それ、楽しいのか？」

「知らないわよ！ だから行ってみたいの！」

ユリアは口をとがらせる。

「……。南の島まで行けばもぐると綺麗かも……。でも……。南の島はちょっと遠いぞ？」

ジェイドはユリアの気迫に押されながら言う。

「ふふっ、頼りにしてるわ！」

ユリアは最高の笑顔を見せる。

ジェイドは大きく息をつき、目をつぶってしばらく考えると、
「では、いつものピクニックセット用意して、肉多めで行くか」
そう言ってニッコリと笑った。



ジェイドはドラゴンとなり、ユリアを首の後ろに乗せ、言った。

「すごく高い所に行くからシールド張って」

「わ、分かったわ」

ユリアは得意の神聖魔法で自分の周りに強固なシールドを張る。

「では行くぞ！」

いつもより気合を入れた声が響いた。

後ろ足で大きく跳び上がり、そのまま大きな翼でバサッバサッと羽ばたいていくジェイド。

羽ばたくごとに森の木々が小さくなり、グングンとオンテークの山が遠ざかっていく……。

ジェイドは加速しながら雲をつき抜けた。

すると雲海の世界が広がる……。さんさん 燦燦と太陽がまぶしく輝き、真っ青な空に真っ白い雲の海……。

「うわあ、素敵……」

ユリアは初めて見る雲海に驚く。

すると、ジェイドは羽ばたくのをやめて翼を畳み、全身を青白く光らせた。

「えっ!？」

ユリアがビックリしていると、ジェイドは飛行魔法でものすごい加速を始める。

「うわわわわ」

速度はグングンと上がり、やがて、ドン！ という衝撃音を立てて音速を突破する。そして、さらにジェイドは高度を上げていった。

2・2・ 黄金の祝福

やがて青空は暗くなり、昼なのに夜のような空になる。宇宙に近づいたのだ。下を見ると、まるで地図を見ているみたいにくっきりと海岸線が見て取れる。よく見ると、小さく城壁で囲まれた街がある……。なんとそれは王都だった。

「えっ!？」

あの壮大な街がまるでオモチャみたいなのだ。

ユリアは大聖女として奮闘した二年間を思い出す。最後は追放されてしまったが、思い出の詰まった王都……。

よく見ると城門の周辺が黒く焼け焦げて見える。その激しい戦闘の傷跡に思わず心臓がキュツとするのを感じた。

ユリアは急いで手を合わせ、魔物の襲来で死傷してしまった人たちのことを思い、祈った。

そして、手を金色に光らせるとキラキラとした光の祝福を王都に向けて放つ。祝福はまるで黄金のオーロラのようにゆらゆらと光跡を描きながら王都の上空に展開

し、まばゆい光の粒をひらひらと振りまいた。

王都の人々は皆、いきなり現れた光の舞う空を驚きながら見上げる。一体何が起ったのか分かっていなかったが、みんな神聖なる光に手を合わせ、幻想的な光景にしばらく見入っていた。

ゲーザは王宮の執務室で知らせを聞いて急いでテラスに出る。そして、美しく煌めく黄金のオーロラを見上げ、目を見開くと、キュツと唇を噛む。

「ユリアめ……、やはり殺しておけばよかった。忌々しい！」

そうつぶやくと急いで教会へと走り出した。



ジェイドはさらに速度をあげながら南西へと進む。西隣の国オザッカ、その南の小さな島国サヌーク、そして遠く向こうに見えてくる大きな島国のサグ。

ユリアは地図でしか見たことのない国々を無言で静かに眺めていた。ここところ平和な時代は続いているが、噂によればこれらの国々は軍拡を進めているという。王国とは友好関係にはあるもののいつまでも平和な時代が続く保証はない。手を合わせて平和を祈っては見たものの、何の力にもなれない自分の無力さ思わず

ため息を漏らした。

さらにしばらく飛んで、サグを越えた辺りでジェイドは高度を落としていく。見ると、広い海の中に点々と島があった。

さらに降りて行くと、島の様子が見えてくる。島の周りはエメラルドグリーンに明るく彩られていた。最初は何の色か分からなかったが、さらに近づいて行くと、それはサンゴ礁と透明度の高い海の色だった。

「うわぁ……」

ユリアはシールドを解いて思わず身を乗り出す。

「どうだ？ 綺麗だろ？」

ジェイドが言う。

「うん！ すごい、すごい！」

ユリアはキラキラとした笑顔を振りまきながら、初めて見る南国の海に魅了されていた。



ジェイドはさらに高度を落とし、そのまま真っ白なビーチの沖へ着水する。

ザザザザー！ と派手に波しぶきをあげながら徐々に減速し……、ビーチのそばまでくるとゆっくりと止まった。

ザザーンという静かな波の音が響き、爽やかな潮風が吹き抜けていく……。

「到着だ。お疲れ様」

ジェイドは首を低く下げる。

熱を持つジェイドのウロコは、波を受けるとシュワァと音を立てながら湯気を立てた。

ユリアは、真っ白なビーチにエメラルドグリーンの透明な海、真っ青な空にポツカリと浮かぶ白い雲を見回して、

「ヤッター！」

と、両手を突き上げて叫ぶ。そして、そのまま海に飛び込んだ。

ザッブーン！ と上がる波しぶき……。

ユリアはしばらく陽の光の煌めく透明な海の中をスーッと進み、

コポコポコポオと上がる泡の音を楽しむ。そして浮力に身を任せて水面に戻ってくると、

プハ———！

と、水面から頭を出し、満足げな顔で大きく息をついた。

「素敵！ でも塩辛いね」

ユリアは片目をぎゅっとつぶりながら、それでもうれしそうに言った。

ジェイドはうなずくと、

「準備してるね」

そういつてザバザバと波を立てながらビーチに上陸し、ボン！ と人化する。そして、アイテムバッグから敷物やロープなどを取り出すと拠点を設定し始めた。松のようなモクマオウの樹にロープを結んでタープを張り、その下に敷物を敷いて小さなちゃぶ台を出す。そしてガラスのピッチャーに魔法を使って氷水を注ぐと、そこにレモンとハチミツを入れてレモネードにし、グラスに注いでグーっと一気飲みをする。

ふう……。

ジェイドは一息つきながら、エメラルドグリーンの海ではしゃいでるユリアを見て目を細めた。

2・3・ やっぱり見てた

しばらくすると、ユリアが大きく手を振りながらビーチに上がってくる。

ジェイドは最初ほほえましくユリアを見ていたが、何かに気がついて手のひらで目を覆った。

「ジェイドどうしたの？」

ユリアは目を合わせようとしないジェイドを不審に思った。

ジェイドはアイテムバッグから麻のベストを出し、

「これを着て」

と、そっぽを向きながら渡す。

「え……？」

何のことか分からなかったユリアは自分の身体を見て驚いた。白いシャツは身体にピッタリと張り付き、濡れて透け透けになっていたのだ。

「きやあ！」

ユリアは両手で胸を隠し、

「み、見たわね!？」

と、真っ赤な顔で言いながら、ベストをサッと受け取った。

「遠目だったから見えてない……」

そう言って、ジェイドはそっぽを向きながらちよっと頬を赤らめる。

ユリアは急いでベストを羽織り、

「ウソばかり……」

そう言って体育座りをしてひざに真っ赤な顔をうずめた。

「レ、レモネードでも飲んで……」

ジェイドはグラスにレモネードを満たすと、ちゃぶ台に置いた。

ユリアはしばらくむくれて動かない。

「裸じゃないんだから大丈夫だよ」

ジェイドはそう言ってなだめるが、ユリアは微動だにしない……。

やがて小声で言った。

「ひ、貧弱で恥ずかしいの……」

ジェイドは首をかしげて言う。

「貧弱？ 綺麗だったぞ？」

するとユリアはガバッと起き上がり、

「やっぱり見てたんじゃないのよお——!!」

と、叫んでジェイドの二の腕をパシパシと叩いた。

「ごめん、ごめん……」

ジェイドは渋い顔で目をつぶる。

「……。でも……。ジェイドが悪い訳じゃないもんね……。ごめんなさい……」

そう言ってユリアはまた体育座りをして小さくなった。

「レモネード、美味しいよ」

ジェイドは優しく勧めた。

すると、ユリアは大きく深呼吸を繰り返し、チラッとジェイドを見ると、

「ありがと……」

と言って、レモネードをゴクッと飲み、水平線を眺めた。

コバルトブルーに見えるまっすぐな水平線、ぽっかりと浮かぶ南国の雲、
燦燦と

照り付ける太陽……。そこは楽園だった。

ユリアはふう、と息をつく、

「美味しい！」

と、言って、まだ少し恥ずかしそうな笑顔でジェイドを見る。

ジェイドはうんうんとうなずき、優しい目で微笑んだ。



「では、潜りに行くか……」

そう言うジェイドは指輪を見せた。

「ゆ……指輪？」

困惑するユリア。

「この指輪をしておくと水中でも息ができる」

「そ、そうなの……？　じゃ、つけて！」

そう言うユリアは両手の指を広げてジェイドに差し出し、赤くなつてうつむいた。

ジェイドは微笑むと、聞いた。

「どの指がいい？」

「ジェ、ジェイドが決めて！」

「そうか……」

ジェイドはそう言うのと、右手の薬指にスツとはめた。

「えっ!？」

ユリアは真っ赤になっておずおずとジェイドを見上げる。

「嫌か？」

ニコツと笑うジェイド。

「こ、これって……」

とまどうユリアにジェイドは、

「さあ行くぞ」

と、言っユリアの手を優しく引いて海へといざなった。

「えっ!？ ちょ、ちょっと……」

ユリアは困惑しながら手を引かれるままに真っ白なビーチを歩き、透明な水の浅瀬をバチャバチャと進んだ。

腰の深さまで来ると、ジェイドは魔法のシールドをユリアの頭の周りに張って

言った。

「では、海の世界にご招待だ。のぞいてごらん」

ユリアが恐る恐る海の中に顔をつけると、そこには美しいキラキラとした南国の海の世界が広がっていた。白い砂には陽の光が網目状の模様となって揺れ動き、小魚たちが群れ泳いでいる。

「うわぁ……」

ユリアは満面に笑みを浮かべ、クリアに見える海の世界に魅せられていた。

2・4・天然のコンサートホール

「さあ、行こう……」

そう言うとジェイドも一緒に潜り、ユリアの手を引いた。

二人は海の世界の中をスーッと潜っていく……。

白い砂浜はやがてサンゴ礁となり、青や真紅の鮮やかな小魚の群れがサンゴの周りを覆っている。ひらひらと舞うミノカサゴを追い越し、さらに沖へと進んでいくと、徐々に風景が青くなっていく。

上を見上げると海面がキラキラと揺れ、陽の光がオーロラのように煌めきながら光のカーテンを作り、そこをウミガメがゆったりと横切って行った。

「うわあ、素敵……」

ユリアは生まれて初めて見る海中の景色に思わずウットリとしてしまう。

すると、巨大なナポレオンフィッシュが近づいてきて、好奇心旺盛にユリアの周りをゆっくりと泳ぐ。

ユリアが手を振ると不思議そうに目玉をキョロキョロさせながら手を眺め……、

そして急に身をひるがえすと逃げていった。

何だろうと思っていると、巨大な影が近づいてくる。ゆうに三メートルは超えようかというイタチザメだった。体には特徴的なしま模様が見える。サメはスーッと近づいてくると、ギョロリとユリアをにらみ、通過していく……。ユリアは思わず身をこわばらせた。そして、ゆったりとUターンすると、こちらに戻ってくる。

ジェイドはサメをにらむと、

グルグルグル……、と重低音を発する。

するとサメはビクッと驚き、スーッと逃げて行った。

「ふう……、ビックリした……」

ユリアが胸をなでおろすと、ジェイドはサムアップしてニコッと笑う。

そして、ジェイドはさらに沖へとユリアを引っ張っていく。

しばらく行くと、紺色の海中の中にぼんやりと黒いものが見えてくる。何だろうと思っているとそれは巨大な穴だった。どこまでも真っ黒な底の見えない深さに思わずブルッと身を震わせるユリア……。

ジェイドはそんなユリアを見てニコッと笑うと、手を引いてその穴の中へと降り

て行く。

穴は洞窟となっており、向こうの方に開いたいくつかの穴からは陽の光が差し込み、まるでスポットライトが当たっているかのように、揺らめきながら洞窟内を淡く照らしていた。そして、バラクーダのような長細い大きな魚の群れがスーッとそこを横切っていく。それはまるで天然のコンサートホールのように、ユリアは思わず見とれてしまう。

海の中は驚きと感動の宝庫だった。その後もあちこち海中を散歩し、ビーチへと戻ってきた頃には陽はすでに傾き、砂浜をオレンジ色に染めている。

ユリアはタオルで髪の毛を拭きながら、

「海って素敵ね！」

と、嬉しそうに笑う。

ジェイドはレモネードを作り直しながらうれしそうに微笑んだ。

ユリアは徐々に傾いていく太陽を見ながら、

「帰るのがもったいないくらいだわ……」

と、つぶやく。

「今晚はここに泊まる？」

ジェイドは楽しそうに聞いた。

「えっ!？ ど、どこで寝るの？」

「ハンモックを釣ればいい」

ジェイドはそう言ってタープを結んでるモクマオウの樹を指さす。

「い、いいわよ」

ユリアは初めての野宿にちょっと不安を覚えつつも、好奇心に惹かれて答えた。

ジェイドは良さそうなモクマオウの樹を二本探し、それらの枝の間にロープを二本結び付け、二本のロープの間に毛布を張った。

試しに寝転がるジェイド。ハンモックはゆらゆらと揺れ、いい具合である。

ジェイドは目をつぶり、満足したようにうなずいた。

それを見たユリアは、

「私もー！」

そう言ってジェイドの脇に強引に滑り込む。

「おっとっと……」

ギシギシと揺れるハンモックに慌てるジェイド。

「うわぁ、ハンモックって不思議ね」

ユリアは無邪気に喜ぶ。

やがて夕焼けが空を覆い、水平線の向こうに真っ赤な太陽が沈んでいく。

二人は何も言わず、その荘厳な大自然のショーを見つめていた。

茜色に染まる雲、キラキラと夕陽を反射する海面、ザザーンと音を立てながら夕

日に染まる波打ち際……、その全てが神聖な感動をともなって胸に迫る。

「ジェイド……、ありがとう……」

ユリアはジェイドの手をギュッと握って言った。

「どうしたんだ？ 改まって」

「私……、ジェイドに良くしてもらってばかりで申し訳なくって……」

「我はユリアというだけで楽しいぞ」

ジェイドはユリアの頭をなでながら言う。

「ふふっ、ありがとう……」

ユリアはそう言うのと伏し目がちに続けた。

「私ね、反省してるの」

「えっ？」

「私、幼なじみに裏切られて追放されたんだけど、それって半分私のせいなのよね」

「そう……なのか？」

「私、彼のことは便利な従者だとは思ってなくて、一人の人間として接してなかったのよ」

「そんな、自分を責めなくても……」

「彼だけじゃないわ。公爵派が暗躍してたなんて知らなかったし、何の興味もなかったの。私は目の前の自分の仕事だけちゃんとしてればいいわって、狭い世界に閉じこもって自分のことだけ考えてたのよ……」

そして、ユリアは来る途中に見た王都の傷跡を思い出す。

「大聖女だからとおごっていたんだわ。結果として、多くの人を傷つけ、殺してしまっただの……」

ユリアは目をギュッとつぶり、ポロポロと涙をこぼした。

「ユリアはまだ十六才だろ？ 責任を感じることもない」

ジェイドはそう言ってギュッとユリアを抱きしめる。

うっうっうっ……。

ユリアはしばらく肩を揺らしていた。

やがて陽は沈み、茜色から群青色への美しいグラデーションが空を覆う。

宵の明星が西の空に鮮やかに輝き、いよいよ夜がやってくる。

ユリアは泣き疲れ、ジェイドの体温を感じながらいつの間にか寝入っていった。

2・5・ ガラスの五十階建てビル

パチ、パチン！

薪のはぜる音でユリアが目覚めると、満天の星々の中、濃い天の川がまるで光の柱の様に立ち昇っていて思わず目をこすり、息をのんだ。

「うわぁ……、綺麗……」

脇の方ではジェイドが焚火をたいて、ディナーの準備を進めている。香ばしい肉の焼ける匂いが漂ってくる。

「ごめんなさい、何か手伝うわ……」

ユリアは急いで駆け寄ると、ジェイドは

「では食器を並べて」

と言ってニコッと笑った。



ジェイドはお皿に肉を削いで、グラスにリング酒を注ぐ。そして、焚火の照らす明かりの中で乾杯をした。

「さっきは泣いちゃってごめんなさい……」

ユリアは、腫れぼったい目をしながら謝る。

「魔物で被害が出たならそれは魔物のせいだろ？ 責任を感じることもなんてない」

ジェイドは肉を食べながら淡々と返した。

「でも……」

「そんなことより、肉が冷めちゃうよ。早く食べて」

ジェイドは微笑んで言った。

ユリアは目をつぶって大きく息をつくと、

「そうよね……。それに、終わったことを悩んじゃダメね」

そう言ってこんがりと焼けたお肉をほお張る。

「美味しい……」

ユリアはしばらくジュシーな肉の旨味に癒されていた。

「たくさんあるから、いっぱい食べて」

ジェイドは肉を削いでユリアの皿に肉を追加する。

「ふふっ、ありがと……」

ユリアはうれしそうに笑った。

ジェイドはそんなユリアを見て微笑む。



たらふく食べた後、紅茶を飲みながらユリアは聞いた。

「ジェイドさあ……、魔法は作られたモノって言ってたよね？」

「そうだね」

「でも……、魔法って自分と深い所ですごいなじんで、後付けされたように思えないんだけど……」

首をかしげるユリア。

「んー、人間もまた神様たちに作られたものだからね」

「う？ 神様……？」

ユリアは驚いた顔でジェイドを見つめる。

「この星も一万年くらい前に作られて、その時に人間も生まれたんだ」

「ちょ、ちょっと待って!? 一万年!？」

「正確には一万二千年前くらいかな？」

「いやいや、地層とか化石とか、何千万年前の物だってあるわよ？」

「それは神様が埋めたんだよ」

ジェイドは笑いながら答える。

「埋めた!？」

「神様にしてみたら、その辺をシミュレートしてそれっぽく仕上げるのはお手の物だからね」

ユリアは絶句した。この世界は神様に作られ、自分の先祖もその時にできたものらしい。

「何か変かな？」

ショックを受けているユリアを見てジェイドが聞いた。

「え？ いや……、神様はなんでそんなことを？」

「さあ……、神様のすることなんて龍には分からない」

ジェイドは肩をすくめる。

「会ったこと……あるの？」

「前世で一回、視察に来られた女神様に会った。気さくな方だったよ」

「気さくな女神……。会って何したの？」

「この星の状況を聞かれたので答えたのと……。女神様の住む街、東京に連れてってもらった」

「東京？　神様の街？」

「住んでるのは人間だね。その中に紛れて神様たちの拠点があるんだ。とんでもない街だったよ。ガラス張りの五十階建てのビルとかが建っていて、それがたくさん並んでるんだ」

ジェイドは両手を広げ、少し興奮気味に言う。

「ガラス張りで五十階!?　すごい魔法ね……」

「それが、魔法のない街なんだ」

「へ……？　魔法も無くてどうやって？」

「わからない。東京には一千万人の人が住んでいて、空には何百人乗りの乗り物が飛んで、時速三百キロで走る乗り物が街を繋いでいるんだ」

ユリアは絶句する。魔法もなしで一体そんなことどうやって実現するのか、皆目見当もつかなかった。

「次に機会があったら連れてってもらおうといい」

微笑むジェイド。

「そ、そうね……」

この星と自分たちを作った神様が、五十階建てのガラスのビルの街で人々に紛れて暮らしている。ユリアはその信じがたい不思議な話をどう捉えたらいいか途方に暮れ、パチパチとはぜる焚火の炎をボーっと眺めていた。

2・6・ 王都陥落

寝る時間になり、ジェイドはハンモックにユリアを寝かせると毛布を掛けた。

「え？ ジェイドはどこで寝るの？」

ユリアが聞く。

「我は龍となってビーチで寝る」

そう言ってジェイドは立ち去ろうとして……、ユリアは急いでシャツの裾をつかんだ。

「ま、待って！ さっきみたいに一緒に寝たら……いいんじゃない？」

少し引きつった笑顔を見せるユリア。

「狭いよ？」

ジェイドは首をかしげて答える。

ユリアはうつむいて……、

「そ、そうよね……」

そう言って手を離し、ジェイドに背を向けて毛布をかぶった。

ダブルベッドで添い寝してもらう暮らしに慣れてしまったユリアには、一人寝はさみしく感じられてしまう。

ふと気がつくと涙がうっすらと滲んでいる。ユリアはあわてて手でぬぐった。男女の営みのないプラトニックな二人ではあったが、ユリアにとってジェイドがそれだけ大きな存在になってしまっていたのだ。

すると、毛布がそっと持ち上げられ、ジェイドがハンモックに乗り込んでくる。「寝付くまで一緒にいてあげる」

ユリアは何も言わず、ギュッとジェイドを抱きしめた。急いで動いたものだからハンモックは大きく揺れる。

「おっととと……急に動くと危ないぞ」

ジェイドは飛行魔法でハンモックの揺れを抑えながら言った。

ユリアは幸せそうにジェイドの胸に顔をうずめる。

ジェイドはそんなユリアの顔をそっとなで、微笑んだ。



翌日も二人は海に潜り、魚と戯れ、南国のリゾートライフを満喫する。

午後に海からビーチへと戻ってきた二人は、レモネードを飲んで静かに海を眺めていた。

すると急にジェイドが険しい表情でブツブツと何かをつぶやきだす……。

「……、王都？ ……、オザッカ？ ……、ありがとう……」

そして眉をひそめ、考え込む。

「ど、どうしたの？」

そのただならぬ雰囲気にはユリアは恐る恐る聞いた。

ジェイドは大きく息をつくユリアをじっと見て切り出す。

「戦争だ。王都が襲撃されすでに陥落したらしい」

「ええっ!？」

ユリアは思いもしなかった事態に青ざめた。

「オザッカの軍隊が一気に王都を襲い、王都側はまともな反撃もできずにあつという間に制圧されてしまったそうだ」

「そ、そんなことあり得ないわ！ 王都の軍隊の方が圧倒的に強かったはず……」
そこまで言って、ユリアはスタンピードのことを思い出す。

「もしかして、魔物との戦いで弱ってしまっ……いた……？」

「それもあるが、あつという間に城門を突破されてしまったらしいので、誰かが手引きしたのだろう」

「誰かって!？」

「公爵派じゃないか？」

「そ、そんな！ 公爵だって王国の一員よ。王国を裏切るなんて……」

「王国を乗っ取るために公爵はオザッカと手を組んだと考えれば全てつじつまが合う。実際、公爵の軍隊は援軍として出てきていないそうだし」

「な、なんてことを……。私が居たらスタンピードも防げたし……」

と、言ってユリアは、気がついてしまった。

大聖女の追放、スタンピード襲来、オザッカによる制圧、全部最初から計画だったのでは……？

青ざめるユリア。

自分が呑気に暮らしている間に進んでいた恐るべき計画。こんな所で遊んでる場合じゃない。

「行かなきゃ！」

ユリアは目に涙をいっばいため、ジェイドの手をガシッと握った。

「行って……、どうする？」

ジェイドは淡々と言う。

「どうするって、決まってるじゃない！ オザッカの兵士たちを王都から追い出すのよ！」

「その後は？ もう、王族は残っていないと思うが」

「えっ!？」

ユリアは言葉を失う。

確かに公爵派が仕組んだとすれば王族は皆殺しにされているだろう。と、なると、オザッカの兵士を追い出しても後に入るのは……誰？

「追い出しても次は公爵の軍隊が攻めてくるだろう」

「そ、そんなあ……」

ユリアはがっくりと肩を落とし……、うなだれた。

「これは権力闘争であり、覇権争いだ。ユリアは近づかない方がいい」

ジェイドは諭すように言う。

ユリアはあまりにもたくさんの想い、考えでぐちゃぐちゃとなり、頭を抱えた。確かに権力闘争であればユリアは近づくべきではない……。でも……。優しくしてくれた侍女や聖女の人々がひどい目に遭っているとしたらそれは助けたい。そしてアルシェ……。彼がまだ生きているなら力になりたい。自分が強制収容所送りにならなかったのは彼のおかげなのだから。

ユリアはガバッと身を起こすと、しっかりとした目で言った。

「ジェイド、王都まで送って。この目で見て、できることを考えたいの」

ジェイドは目をつぶって大きく息をつき、しばらく考える……。

そして意を決すると、ユリアを見てゆっくりとうなずいた。

2・7・大聖女の矜持

ジェイドはものすごい速さで飛んだ。行きよりもずっと高く、ずっと激しい光を放ちながら飛んだ。

島国サヌークを超え、オザツカを超え、やがて盆地の向こうに小さく王都が見えてくる。

「あぁっ！ 燃えてるわ！」

ユリアは思わず叫んだ。王都はあちこちから黒煙が上がり、物々しい雰囲気伝わってくる。

ユリアは初めて見る戦争の恐ろしさに思わず背筋が凍る。あの煙の下では多くの人の命が奪われているのかもしれない。優しかった侍女たちがひどい目に遭っているのかも……。ユリアは目の前が真っ暗になり、うなだれた。



王都が徐々に近づいてきて、被害の様子が明らかになってくる。黒煙は中心部のあちこちから立ち昇っており、宮殿の美しかった庭園も黒焦げになっていた。

「どこに行けばいい？」

ジェイドは王都へと急降下しながら聞いてくる。

「きゅ、宮殿北側の大広間にお願ひ！」

ユリアは青い顔でガタガタと震えながら答える。

ジェイドが宮殿に接近していくと、炎の矢や氷の槍といった攻撃魔法があちこちから一斉に放たれた。

ユリアは金色の魔法陣のシールドを展開してそれらの攻撃を弾き飛ばし、ジェイドは攻撃が放たれた拠点に次々とエネルギー弾を打ち込んでいく。

ズン！　ズズン！

宮殿のあちこちが爆発炎上した。きっと何人も死者が出たに違いない。

ユリアは、すでに取り返しのないレベルで戦争に関与してしまったことに顔面蒼白となり、思わず震える自分の手を見た。

しかし、これが自分の選んだ道なのだ。元大聖女として王都を守り続けた矜持きやうじにかけてこの狂った世界を正さねばならない。

ユリアは涙をポロポロとこぼしながら前を向いた。



宮殿の大広間の大きな窓から中の様子が見える。どうやら宴会が行われているようだった。もう呑気に祝勝会をしているのだ。よく見ると、侍女の女の子をはべらせて酒を飲んでいる。ユリアはぎゅっと奥歯をかみしめ、覚悟を決めた。オザツカを追い出した後の事など後で考えればいい。今は彼女たちの救出が先である。

「ジェイド！ 大広間の壁をぶち抜いて！」

と、叫んだ。

ジェイドは一瞬考え込み、意を決すると、

「……。分かった。まかせろ」

そう言って、中に人がいない辺りの壁にそのまま体当たりしながら着地した。

ズガン！

激しい衝撃音を放ちながら大広間にドラゴンが乱入し、浮かれ切っていたオザツカの将校たちは呆然とする。

「キャ——！！」「うわあ！！」

大広間には悲鳴が響いた。

直後ユリアは

「エリクスリープ範囲催眠！」

と、叫んで激しい光を放つ。

大広間には金色に輝くオーロラが展開され、無数の光の微粒子が人々に降りかかっていく。

将校たちも女の子たちも意識を奪われ、バタバタと次々と倒れた。

しかし、上級将校たちは魔法をレジストし、立ち上がる。

「これはこれは、元大聖女様じゃないですか」

一番奥で、頬に大きな傷を持つ筋骨隆々とした男が声を上げる。将軍クラスだろう。

「今すぐ王都から出て行って！」

ユリアは男をにらみ、叫んだ。

将軍はドラゴンをチラッと見ると肩をすくめながら言った。

「いいでしょう。ドラゴンと事を構えるほど馬鹿じゃない……。その代わり、王都の統治権は公爵殿に取ってもらってください。王都がまとまらずに荒れては困るの

でね」

「それはダメよ。今回の侵略の裏に公爵がいることくらい知ってるのよ！」

將軍はピクッと眉を動かし、腕組みをして考えこむ。すると隣の將校が言った。

「大聖女さまはドラゴンを使って公爵家を滅ぼすつもりですか？」

「王都の街の人たちの安全と平和のためなら何だってやるわ！」

しかし、將校はいやらしい笑みを浮かべて言う。

「あなた、追放されたんですね？ 何の権限でそんなことを？」

ユリアはハツとする。追いつく正当性を問われるとユリアは弱い。政治的に言えば無関係な第三者がドラゴンを駆って王都を侵略している形になってしまう。

そして、言葉を失い、ギュッと唇を噛んで將校をにらんだ。

「黙れ！」

ジェイドの重低音の叫びが大広間に響いた。

その腹に響く重低音は本能的に人間には抗いがたい恐怖を呼ぶ。將校たちは青い顔をして黙り込んだ。

「今後どうするかはお前らには関係ない！ 今すぐ撤退の指示をしろ！」

ジェイドはそう叫び、将校に撤退の指示を出させた。

王宮の外でパッパッパー！　パッパッパー！　と、撤退ラッパの音が響きわたる。

「て、撤退させました……」

将校は報告する。

するとジェイドは、

「ご苦労」

と言って、カッ！　と衝撃波を放ち、将校たちを吹き飛ばした。

屈強な将校たちもドラゴンにかかれば赤子同然である。皆意識を失って転がっている。

ユリアは侍女たちを起こし、オザッカの将校たちを縄で縛るように指示すると、アルシエを探しに牢屋へと急いだ。

2-8. ざまあな惨状

ユリアは人化したジェイドと一緒に、自分が監禁されていた牢屋への階段を下りていく……。

すると、もわあと、すえた悪臭が漂ってくる。

ユリアは眉をひそめ、慎重に降りて行く……。

最初の牢をのぞくと、衣服をビリビリに破られ、ぐちゃぐちゃに乱暴された女性が白い肌をさらしながら倒れ、けいれん痙攣していた。

「ひっ!？」

思わず後ずさるユリア。

それはついさっきまで男たちにもてあそばれていた女の子。体のあちこちには悪臭を放つ体液が残されていた。

「えっ……? ゲ、ゲーズ……?」

思わずユリアは口を手で覆う。

それはよく見ると銀髪を編み込んだ紅い唇の女性、ゲーズだった。

ユリアを陥れ、追放させた悪女は自らの愚行で墓穴を掘ったのだ。

「じ、自業自得だわ……。ざまあよ！」

そう言いながらもユリアの目には涙が浮かび、おもわずジェイドに抱き着く。
うっうっうっ……。

ユリアは涙を流しながら、不幸の連鎖、どこかで歯車が狂ってしまった世界を呪った。

ジェイドはそんなユリアを心配そうに見つめ、髪を優しくなでる。

すると、隣の牢からもすすり泣く声が響いてきた。聞き覚えのある声……。

ユリアはハッとして隣の牢へ走る。

そこで倒れていたのはかつての聖女の仲間たちだった。彼女たちにもまた、乱暴された跡が生々しく残り、悲痛なうめきが牢に響く。

ユリアは清浄化の魔法と治癒魔法を部屋全体にかける。牢の中は金色の光の微粒子が舞い、緑の光の渦がゆったりと牢の中を回った。

「ユリアさまぁ……。うわぁあん！」「ユリアさまぁ！」

ユリアは泣きながら飛びついてくる聖女たちを両手いっぱい抱きしめ、そして

一緒に涙を流す。

例え大聖女であっても、彼女たちの穢された悲しみを癒してやることなんて到底できない。ただ一緒に泣いてあげることしかできなかった。



さらに隣の牢を見ると、教皇が囚われていた。

教皇はユリアを見るとビクツとして無言のままうつむく。

ユリアの追放に関与していたはずの教皇。ユリアは険しい声で言った。

「公爵派の暗躍について証言してもらえますか？」

すると教皇は口を開いた。

「ワシも全貌は知らん。じゃが、こうやって収監されてしまった以上、公爵派の肩を持つ気もない。全て話そう」

「私の追放は公爵派の陰謀だったという事でいいですね？」

「そうじゃ、そなたには……、申し訳ない事をした」

そう言って教皇は頭を下げる。

「ふざけるな！」

ジェイドは目の奥に赤い炎を揺らし、重低音のどすを聞かせた声を響かせた。
ひい！

教皇は恐ろしいドラゴンの威圧にやられ、しゃがみこんで頭を抱え、

「ごめんなさい！　ごめんなさい！」

と、泣き叫んだ。

「謝ってすむ話じゃない！」

ジェイドはさらに凄んだが、ユリアはそれを制止する。

「そういうのは後にしましょう。今は公爵派の陰謀の立証を優先させたいの」

「な、何でもする。だから許してくれえ！」

すっかり恐怖で追い込まれた教皇は、ユリアに手を合わせてひたすら頭を下げた。



次に捕虜が拘束されている大講堂へと移動する。

大講堂はすでに解放の喜びで大騒ぎとなっていた。

ユリアが入り口を入ると、

「ユ、ユリア様だあ！」「あ、ありがとうございます！」「ユリア様——！」

と、歓声が上がり、次々と人が集まってくる。

予想外の大歓迎を受け、圧倒されるユリア。

もみくちゃにされながら奥に進むと、向こうの方には負傷兵たちがたくさん横たわっていた。雑に巻かれた包帯は血で滲み、高熱を出してうなされているものも少なくない。

ユリアは、ギョツとし息をのむと、ギュツと目をつぶった。そして、大きく深呼吸を繰り返して心を落ち着かせ、「^{ユリアハイヒール}範囲上級治癒！」と、叫んで緑色の光の渦を大講堂中に展開した。

緑の光の流れは負傷兵たちの身体をすり抜けながら少しずつ治癒の奇跡を起こし続け、やがて、みんな元の身体を取り戻していく。

「おおおお！」「うわあああ！」「す、すごいぞ！」

大講堂にいた人たちは皆、ユリアの起こす奇跡に圧倒され、あるものは涙を流し、あるものはユリアにひざまずいて手を合わせた。

すると、下級兵士の服装をした黒髪の少年が駆けてきて、

「ユリア、ありがとう！」

と叫んでユリアの手を両手で包んだ。

ユリアは一瞬戸惑ったが、透き通るような白い肌に凜とした鼻筋……、それはアルシェに見えるが……。

「あれ？ アルシェ……よね？」

「あ、ゴメンゴメン」

そう言うと、少年はかかっていた変装の魔法を解き、輝くような金髪とエンペラーグリーンに輝く瞳を取り戻した。

「アルシェ！ 無事だったのね！」

ユリアは死んだと思っていた恩人の登場に感極まってハグをする。

死を覚悟していたアルシェも緊張の糸が切れ、涙が止まらなくなった。

二人はしばらくお互いの体温を感じながら無事を喜びあう。

周りの観衆たちもそんな二人の涙にもらい泣きをして、鼻をすすする音がいくつも響いた。

2・9・公爵の街、ダギユラ

「こんな事態になったのは君たち王族の問題だ」

ジェイドはアルシェに厳しい声で言う。

アルシェは驚いて顔を上げ、ジェイドを見る。

「そ、そうかもしれません……」

アルシェはうなだれた。

「ジェイド、彼はまだ十四歳よ。責任は無いわ」

ユリアはアルシェをかばう。

そんなユリアをジェイドは少し不機嫌そうに見つめた。

「ユリア、いいんだ……。王族……というのはそれだけ責任が……あるんだ」

アルシェはうなだれながら絞り出すように言う。

「これからどうするんだ？」

ジェイドは淡々と聞く。

「父や兄……主要な王族は全員……処刑されてしまいました。僕が立て直すしかあ

りません……。うっうっう……」

アルシエはそう言つてうなだれ、ポトポトと涙を落とす。

「アルシエ……」

ユリアはアルシエを引き寄せ、優しくハグをする。

ジェイドは何かを言おうとして……。目をつぶるとため息をついた。



今は亡き国王の執務室に移動すると、善後策を話し合う。ポイントは二つ、内政をどう立て直すかと公爵を含めた外交をどうするかだった。内政はアルシエが王位を継承したことを国民に広く周知し、生き残った幹部で新たな体制を作り回していくしかない。これは大変だがそれでも作業の話だ。

問題は外交、これは喫緊の課題だ。公爵の影響を排除をしなくてはならないが、公爵と全面戦争なんてしたらまた外国に狙われてしまう。あくまでも戦争をせずに公爵家をお取りつぶしにしないとならない。しかし、どうやって……。

アルシエはジェイドに頭を下げて言った。

「申し訳ありません、僕に力を貸してくれませんか？」

ジェイドは不機嫌そうに答える。

「お前たちはユリアを傷つけた。気軽に味方などできん」

アルシェはうつむき、ギョツとこぶしを握ると、ジェイドに土下座して、

「それについては申し開きありません。でも、ユリアを陥れたのは公爵です。公爵を倒すのだけ、ご協力いただけませんか？ なにとぞ……」

と、大きな声で頼んだ。

ジェイドは返答に詰まる。仮にも一国の王が額を床に付けている。その意味は重いのだ。大きく息をつき……、そして、ユリアの方を向く。

ユリアは悩む。もちろん、公爵は倒さねばならない。でも、それはジェイドとは関係ない話なのだ。ユリアが頼めば力は貸してくれるだろうが、それでいいのだろうか？

「ジェイド……。私はどうしたらいいの……？」

ユリアも答えが出せずにジェイドの袖をつまんで言った。

ジェイドはしばらく思索し、毅然とした態度で言う。

「やはりダメだ。一緒に家に帰ろう。人間界の争いに首など突っ込んじゃダメだ」

「えっ!？」

一瞬驚いたユリアだったが、それは正論だった。

「王都解放までやったんだ。それで十分じゃないか。追放されたユリアがこれ以上助ける筋合いなんてない」

確かにその通りである。追放された時、群衆に石を投げられたことを思い出せば、王国で大聖女として復帰する事も素直に喜べない自分がいる。もちろん、大聖女の力を人々のために使い、安心と平和をもたらしたいという思いはある。だが、それは王国の大聖女という地位とはイコールではない。国に帰属しない道だってあるのだ。

「ユリア！　お願いだ、見捨てないでくれ！」

アルシエは立ち上がり、ユリアの手を取って真剣な目で頼む。

ユリアは悩んだ。アルシエは助けてあげたいが、ジェイドを巻き込むのも気が引けるし、公爵軍の兵士たちになんて家族がいるのだ。気軽に叩いていい話ではない。何が正解か全然見えてこなかった。

ユリアは目をつぶり、しばらく考えると、ジェイドに聞く。

「公爵をさらってくる。これだけ……、お願いできるかな？」

「さらう……」

ジェイドは気乗りのしない顔でしばらく考え、

「まあ……、さらうだけなら……」

と、嫌そうに答えた。



ユリアを乗せたドラゴンは澄んだ群青色の空を飛ぶ。公爵の支配する街、ダギユラが見えてきた頃にはすっかりと暗くなり、上弦の月が高く輝いていた。

「見えてきた、あそこだ」

ジェイドが言う。

「あそこね……、結界……かしら？」

ぼうつと明るく光る城郭都市の中心部にはガラスドームのような結界があり、淡く虹色に蛍光して神秘的なイルミネーションとなっていた。宮殿はそのドームの中にある。

「あのくらいなら破れるだろう」

「さすがジェイドね！」

ユリアはジェイドのウロコのトゲにギュッとしがみつく。

ジェイドは宮殿に向けて急降下しながら青白く全身を光らせ、直後、衝撃波を放った。

衝撃波は結界を砕き、ガシャ——ン！　パリパリというガラスが割れたような音を立てながら崩壊していった。

ジェイドはそのまま一気に綺麗に手入れされた庭園の広がる正面玄関前に着地する。

しかし……、宮殿には明かりはなく、静まり返り、ただ、不気味に街灯だけが魔法の炎を揺らしていた。

2・10 ドラゴンスレイヤー

「これは……、どういうことだ？」

ジェイドは首を低くしてユリアを下ろしながら言った。

「誰も……いないのかしら？」

「いやいや、まだ宵の口、ディナータイムだ。誰もいないなんてこと無いだろう」
ジェイドはそう言う人と人に戻る。

そして、二人は不気味に静まり返る宮殿へそろそろと近づいて行った。

正面の巨大なドアを引いてみると、ガチャリと重厚な音がして動く。カギもかかっていない。

二人は顔を見合わせ、うなずき合うと恐る恐るドアを開けた……。

中は真っ暗で、静まり返っている。

「誰も……、いないみたいよ？」

ユリアがキョロキョロと見回した時だった。急に魔法のランプがポツポツと光り始め、豪奢で広大なエントランスを照らしだす。

ひっ！

思わずジェイドにしがみつくユリア。

ジェイドはそつとユリアの頭をなで、辺りを見回す……。

エントランスの床には青を基調とした壮大なモザイクが施され、大理石でできた真つ白との壁との対比が美しく、壮麗な雰囲気演出していた。

そして、優美な曲線を描きながら二階へと続く赤じゅうたんの階段、王宮よりも立派な造りにユリアは訝^{いぶか}しがる。

「お待ちしていましたよ、グフフフ……」

いきなり声がした。

二人が見上げると、正面の階段をニヤけた男がスタスタと下りてくる。

それはユリアも見覚えもある、頭の薄くなった小太りの中年、ホレス公爵だった。

「こ、公爵！　いたのねー！」

ユリアは公爵の不気味さに気おされながら声を上げる。

「ドラゴンを殺す様子なんて、家の者には見せられないのでね……」

いやらしい笑みを浮かべるホレス。

『ドラゴンを殺す』というホレスの言葉にユリアは激しい違和感を覚えた。そんなことただの人間にできる訳がない。なぜ、そんなことが言えるのだろうか？ ホレスの異様な雰囲気ユリアは背筋に冷たいものを感じた。

「よ、よくも追放なんてしてくれたわね！ あなたの悪だくみはバレてるの。法廷で裁いてやるから神妙にしなさい！」

ユリアは勇気を振り絞って叫ぶ。

「グフフフ、弱い犬ほどよく吠える……ほわあああ！」

ホレスがそう叫ぶと、全身がボコボコと膨れだし、肌の色も緑へと変わり始める。「へっ!？」

思わず後ずさりするユリア。

グッ、グッ……グギャアア！

ホレスが瞳を黄色に光らせながら苦しそうに喚くと、シャツがパン！と破け、ボコボコと盛り上がった筋肉が不気味に緑色に光った。それは、もはや人間ではない、まるでオーガのような姿だった。

ひいひい！

異形に変化してしまった公爵、その異様さに圧倒されてユリアはジェイドの後ろに隠れる。

「この姿を見た以上、君たちには死んでもらわんとな……」

ホレスはそう言うのと、スラリと幅広の剣を引き抜いた。それは瑠璃色に輝く刀身を持つ美しい剣。表面には幻獣の模様が彫っており、もはや宝剣といった風格がある。

「くっ！ なぜ、お前がそれを!?」

ジェイドの表情が険しくなる。

「そう、ドラゴンスレイヤー、龍退治用の神の剣だよ、グフフフ」

ホレスはまるで曲芸師の様にドラゴンスレイヤーをブンブンを振り回し、クルクルと回した。

ちっ！

ジェイドは美しい顔を歪めると、気合を込め、全力の衝撃波をホレスへと放った。

ズン！

衝撃波はホレスに直撃し、周囲の階段やインテリアがぐちゃぐちゃに壊れて吹き

飛ぶ。

しかし……、ホレスは無傷だった。

「物理攻撃無効、魔法攻撃無効、ドラゴンと言えどこの身体、かすり傷一つつけることはできませんよ、グフフフ」

そう言いながら、ホレスはブンとジェイドめがけてドラゴンスレイヤーを振った。刀身から放たれた青く輝く光の刃がジェイドを襲う。ジェイドは瞬時にシールドを展開したが、刃はシールドを素通りし、そのままジェイドの身体を切り裂いた。

ぐはぁ！

ジェイドの肩口がザツクリと斬れ、血が噴き出す。

「ダ、ダメだ……、逃げる……ぞ！」

そう言ってジェイドはユリアの手を取って出口に駆けだしたが、

「逃がさんよ」

ホレスはそう言いながら瞬歩で一氣に間合いを詰めると、ジェイドめがけてドラゴンスレイヤーを振りかかぶった。

「ダメえ！」

ユリアはジェイドの手を振りほどくと、渾身の炎魔法を瑠璃色の刀身に放つ。

ボン！

刀身が爆発し、その衝撃でドラゴンスレイヤーはホレスの手から離れ、カン！

カン！ と音を立てて床に転がった。

「くっ！ このアマが！」

ホレスは瞳に憎悪の炎を燃やし、逃げようとするユリアに向けて魔法の鎖を放つ。

きやあ！

鎖は不気味な紫色の光を放ちながら、まるで触手のようにユリアに巻き付いていく。

ユリアは魔法で何とか鎖を外そうとあがいたが、全ての魔法は跳ね返され、あえなくグルグル巻きにされ、引き倒された。

「いやあ！」

「ユ、ユリア！」

ジェイドは傷口を手で押さえ、血をボタボタとたらしながらユリアを助けようとしたが、ホレスはドラゴンスレイヤーを拾って再度ジェイドに狙いを絞る。

「ダメ！ 逃げてえ！」

ユリアの悲痛な叫びが広間にこだまする。

2・11・ 瑠璃色の刀身

くっ！

敵は攻撃の効かない身体にドラゴンスレイヤー、活路を見いだせないジェイドは悔しさで顔を歪めながら一旦外に逃げた。

そして、そっと窓から中の様子をのぞく。

「おやおや、イケメンに逃げられちゃったな」

ホレスはそう言いながら鎖を引っ張り、ユリアをソファまで引きずると、髪の毛をガシツとつかみ、ソファに転がした。

「痛い！」

ユリアは苦悶の表情を浮かべる。

「さして、ドラゴン。この女をヒイヒイ言わせちゃうぞ！」

ホレスは金色の目で窓をにらみながらユリアの身体をまさぐった。

「何すんの！ やめて！」

ユリアは身体をよじらせながら叫ぶ。

するとホレスはドラゴンスレイヤーの刃をユリアの頬にピタリと当てる。

ひっ！

氷のように冷たい瑠璃色の刀身がユリアを硬直させる。

「暴れると……、この刃が食い込んでくじゃうかも……しれないよ？」

そう言ってホレスはドラゴンスレイヤーの刃を少し引く。

柔らかいすべすべとしたユリアの頬が切れ、血がタラリとたれた。

ひいひい……。

ユリアは何も言えなくなり、涙がポロリとこぼれる。

「さて、ショータイムといこう！」

ホレスは窓に向いて叫ぶと、ドラゴンスレイヤーの刀身の平たい面でユリアの白いワンピースをパン！と叩いた。

すると、ワンピースは一瞬閃光を放ち、ポン！と破裂音を伴いながらはじけ飛んだ。

「い、いやぁー！」

ユリアは全裸となり、かろうじてボロきれが大切な所を覆っている。

なんとかしたいと、もがくユリアだったが、鎖にガッシリと縛られてどうにもならない。

「なんだ、お前まだ男を知らんのか。イケメンとよろしくやってると思ったんだが……」

ホレスはいやらしい笑みでユリアの身体をなめるように見た。

「うっうっうっ、やめてえ……」

ユリアはか細い声をあげて泣く。

「さーて、ドラゴン！ こいつが女になるところをしつかりと見とけよ！」

ホレスはそう言うと言とユリアの両足をつかんだ。

「ダメえ！」

ユリアは足を動かそうとするがビクともしない。まるで鋼鉄に足をつかまれたかのようにほんの少しも動く気配がなかった。

その時だった、バン！ という扉を蹴る音がしてジェイドがダッシュで駆けてくる。

血をふりまき、美しい顔を苦痛でゆがめながら瞳を真っ赤に輝かせて飛ぶように

ホレスに接近した。

「バカめ！」

ホレスはドラゴンスレイヤーを振り上げ、ジェイドめがけて振り下ろそうとする。その時、ボシュ！ という音がして盛大な蒸気がホレスの目の前に吹き上がった。ジェイドは水魔法と火魔法を同時に出し、煙幕としたのだ。

くっ！

ホレスはあてずっぽうにドラゴンスレイヤーを振り回したがジェイドには当たらない。

直後、ジェイドがホレスの頭上に現れた。

「ワシには攻撃など効かん！」

そう言いながらドラゴンスレイヤーを構えなおすホレス。

直後、ジェイドは何かを振り下ろす。

うひい——。

奇妙な声を残して、ホレスは消えた……。

「えっ!？」

ユリアは驚いた。緑色の巨体が一瞬で消え去ったのだ。

あつけに取りられていると、ジェイドがアイテムバックを見せる。なんと、ホレスをアイテムバックに収納してしまったのだった。

通常、生き物を吸い込んでしまわないようにアイテムバックにはセーフティロックがかかっているが、ジェイドはそれを解除して武器として使ったのだ。

クッ……。

ジェイドがガクツとひざをついて、血がポタポタと落ちる。

「あぁっ！ ジェイド！」

魔法の鎖が解けたユリアはボロ布で身体を隠しながら、うずくまるジェイドに回復魔法をかける。しかし、ジェイドの傷はふさがらず、血がだらだらと流れるばかりだった。

ツウ……。

ジェイドは痛みにも顔を歪ませる。

「えっ!? なんて効かないの!？」

ユリアは必死に何度も治癒魔法をかけた。

「神の力でついた傷には魔法は効かないんだ」

「じゃあどうしたら治るの？」

ユリアは涙をポロポロ流しながら聞く。

「自然治癒で直すしかない。棲み処へ帰らないと……」

ジェイドはアイテムバッグからユリアの服を出しユリアに渡すと、立ち上がったが……、貧血でふらついた。

「ああ！」

ユリアは急いで支える。ジェイドの暖かい血がたらたらとユリアの白い肌を赤く染めながら流れていく。

「ジェ、ジェイド……？」

ジェイドは荒い息で凄い高熱を発している。

ユリアはことの深刻さに目の前が真っ暗になる。

「えっ!? ジェイド、ジェイドが死んじゃう———!」

ユリアは急いでソファにジェイドを横たえ、傷口に布を当て、ジャケットの袖を器用に縛って止血をする。

ジ
エ
イ
ド
は
苦
し
そ
う
に
荒
く
息
を
す
る
ば
か
り
だ
っ
た
。

212. 口移し

「ジェイド！ お家に帰ろう！」

ユリアはジェイドに話しかけるが返事がない。意識がもう失われてしまっている。

一刻を争う事態に、ユリアはジェイドを背負うと飛行魔法で浮かび上がった。

そして、月夜の空へ飛び立っていく。

ダギユラの街明かりを受けながら徐々に高度を上げるユリア。

だが、ジェイドを担いで飛ぶのはユリアには荷が重かった。何度もフラフラとバランスを崩しながらも必死に飛び続ける。

「ジェイド、死んじゃダメ！」

ユリアは月明かりを浴びながら涙をポロポロとこぼし、必死にオンテークを目指す。

自分が余計なことを頼んだがためにジェイドを傷つけてしまった。ユリアは自分の考えの甘さが招いた悲劇に打ちひしがれながら必死に飛んだ。

ジェイドのいない人生なんてもうユリアには考えられない。ジェイドを失ったらもう生きていく自信なんてなかった。

自分を救ってくれた大切な人、こんな自分を「好き」と、言ってくれたかけがえのない人、自分が命にかけても救うのだ。

ユリアは歯をぎゅつと食いしばると飛行のイメージを固め、さらに加速していく。途中何度も強風であおられるも、ユリアは自分の命も燃やす勢いで力を絞り出し、ただひたすらに遠くに見えてきた火山、オンテークを目指した。



月が沈みかける頃、ユリアはボロボロになりながらようやくジェイドの棲み処に戻ってきた。

ユリアはジェイドをベッドに寝かせると、服をはいで傷口を露わにする。パツクリと開いた肩口の傷はまだ血が止まらず、青黒く変色しており、その痛々しいさまにユリアは思わず歯がガチガチと鳴る。この傷をうまく治療できないとジェイドは死んでしまうのだ。ユリアは涙をポロポロとこぼしながら、浄化魔法をかけた。

ぐわあぁ！

ジェイドは、苦しそうに叫ぶ。浄化魔法が瘡蓋かさぶたになりかけの部分までぬぐってしまっているからなのか、相当に痛そうだった。でも傷口を綺麗にしなければ化膿してしまう。

「ごめんね、ごめんね」

ユリアは泣きながら手を握り、浄化魔法を続けた。

消毒が終わると、裁縫道具から糸と針を取り出す。戦場では消毒して傷口を縫うと聞いたことがある。自分は回復魔法が使えるから無関係だと思っていたが今、大切な人の命を懸けて縫わねばならない。

ユリアはブルブルと震える手を何とか押さえ、溢れてくる血の中、一針ずつ涙をポロポロとこぼしながら縫っていった。

縫うたびにジェイドは歯を食いしばり、苦しそうにするが、どうしようもない。「もう少し……もう少し、我慢してね」

ユリアは袖で涙をぬぐいながら針を進めた。



全部縫い終わると、タオルを縫い合わせた包帯で患部をグルグルと巻き、毛布を

掛け、寝かせた。

しかし、ジェイドの息は荒く、高熱で汗が止まらない。

このままだと脱水症状になってしまふ。ユリアは、魔法で小さな水玉を浮かべ、ジェイドに飲ませようとした。しかし、意識がもうろうとしているジェイドはうまく飲んでくれない。

「ああ……、どうしよう。ジェイド……」

ギョツと手を握って、苦しそうに喘ぐジェイドを悲痛な思いで眺めるユリア。

そして意を決すると、ユリアは自分の口に水を含み、そのままジェイドのくちびるに重ねた。そして舌で少しずつつすき間を作り、ジェイドの中へと口移しで流し込んでいく。最初は戸惑っているようだったジェイドも、無心にゴクゴクと飲む。

何回か水を飲ませると、ジェイドは少し安らいだ表情になって静かに眠りについていった。



ベッドわきで看病しながら眠り込んでいたユリアは、頬を優しくなでられて目が覚めた。

「ん……？」

目を開けると、ジェイドが優しく微笑んでいる。

「ジェ、ジェイドお！」

ユリアはバツと身を起こすと、ジェイドの手を抱きしめ、ポロポロと涙をこぼした。

「ユリアのおかげだ。ありがとう」

ジェイドはそう言って震えるユリアを引き寄せ、頬を寄せる。

うっうっうっ……。

ユリアは大切な人が回復した喜びと同時に、自分のせいでジェイドを失いかけた恐ろしさを感じ出し、頭の中がぐちゃぐちゃになってただ泣きじゃくっていた。

2・13・ 神様の戯れ

ジェイドの傷は快方には向かっているものの、重傷であり、少なくとも一週間は寝たきりである。

その間、ユリアは食事を用意したり、包帯を替えたり、身体を綺麗にしたりかいがいしく看病をした。

公爵を捕縛した事はアルシェには伝えてあるが、ジェイドがこんな状態である以上、しばらく王都へは行けない。王国の立て直しは十四歳の新王には荷が重いとは思うが、化け物と化した公爵を見てしまったユリアには、もう政治の世界に近づく気にはなれなかった。

「公爵は……、なんであんな化け物になっちゃったのかな……？」

ユリアは食後に魔法で紅茶を入れながら聞いた。

「分からない。だが、彼が使っていたのは神の力……、人間が手にできるような力ではない」

「後ろに神様がついてるってこと？ 神様が私を追放させ、王国を滅ぼそうとし

たってことなの？」

「そうなるが……、神様にはそんなことするメリットなんてない。公爵なんか使わなくても一人で王国なんて滅ぼせてしまうし」

「そうよね……。どういふことなのかしら……」

ユリアは眉をひそめながらティーカップに紅茶を注ぎ、ジェイドの前に置いた。

「神様が関わっているとしたら我はもう出られない」

ジェイドは傷口をさすりながら言う。

「そうよね……」

アルシエを手伝ってあげたい思いもあるが、これ以上ジェイドを危険な目に遭わせるわけにはいかないのだ。

神様の戯れに振り回される人間たち……。

ユリアは大きくため息を漏らし、紅茶をすすりながら思案に沈んだ。



その晩、ユリアがベッドに入ると、ジェイドが腕枕をしてきた。

「えっ!? 傷口が開くわよ?」

ユリアは驚く。

「このくらい大丈夫だ。いろいろありがとう」

ジェイドはユリアの頭をなでながら言った、

ユリアはジェイドの精悍な男の匂いに頬を赤らめながら、

「このくらい大したこと無いわ」

と言って、スリスリと頬でジェイドを感じた。

「最初の晩に……」

ジェイドがちよつと恥ずかしそうに切り出す。

「え？」

「もしかして、水を……飲ませてくれた？」

ユリアはボツと顔から火が出る思いで真っ赤にして、

「ごめんなさい、あれは必死だったの！」

そう言ってジェイドの胸に顔をうずめた。

「謝らないで……。もっとして欲しいくらいなんだから……」

ジェイドはユリアに頬を寄せ、耳元でささやく。

「え……?」

ユリアは恐る恐るジェイドを見る。

すると、ジェイドは優しくユリアの頬にキスをした。

唇の温かな感触にユリアは少しボーっとして……、そして、吸い寄せられるようにジェイドの唇を求めた。

ぎこちなく唇を重ねるユリアをジェイドは優しく受け入れる。しばらく二人はお互いの想いを確かめるように舌を絡めた。

想いが高まったユリアはついジェイドを抱きしめようと、もう片方の腕に触れてしまう。

うっ！

ジェイドが痛そうな声をあげて固まる。

「あっ！ ごめんなさい！ ごめんなさい！」

ユリアは慌てて離れた。

「だ、大丈夫……」

ジェイドは美しい顔を歪めながら傷口を押さえる。

ユリアはジェイドの様子を申し訳なさそうにしばらく眺め、毛布を広げるとそつとジェイドにかぶせた。



翌日、ユリアが食事の用意をして部屋に持ってくると、ジェイドが深刻そうな顔をしている。

「ど、どうしたの？ 何かあった？」

ユリアがプレートをテーブルに置きながら、引きつった笑顔で聞く。

ジェイドは大きく息をつくと言った。

「王国で内戦だ。公爵軍が反旗を翻した」

「えっ!? 公爵はもういないのに？」

「先日のオザッカの侵攻で王国軍がかなりやられてしまったので、統制が効かないのだろう」

「ど、ど、ど、どうしよう……」

ユリアは青くなつてうつむく。また多くの人が死んでしまう。アルシェも死んでしまうかもしれない……。

「どうしようもない。人間同士の争いに首を突っ込んじゃダメだ」

「そ、そんな……」

ユリアが行ったとして戦争なんて止められない。それは分かっているが、王都の人たちが傷つくのは何とか減らしたい。何かいい手は無いだろうか……？

「治癒だけ、ケガを直すのだけやればいいのかも？」

「ダメだ。直した兵士はまた戦いに行くし、ユリアも標的になる」

「じゃあどうしたら!？」

ユリアは今にも泣きそうな目でジェイドを見る。

ジェイドは目をつぶり、大きく息をつくと言おう。

「祈る……しかない」

「そんなあ！」

ユリアはガックリとうなだれ、涙をポロポロとこぼす。

自分の無力さ、神の理不尽さ、そんな神に踊らされる人間たちの不甲斐なさに打ちのめされ、動けなくなった。

2・14・ 荒廃した大地

「勝敗がついたら復興を手伝いに行こう」

「そんなこと言って、アルシェが死んだらどうするのよ！」

ジェイドはムツとした様子で言う。

「あいつは特別なのか？」

「と、と、特別……、なんかじゃないけど……。追放された時にずいぶん助けてもらって勇気づけられたの」

ジェイドはふう……と、息をつくと言った。

「分かった、友達に言って彼が死ぬことのないように警護してもらおう」

「えっ？」

「この情報をくれたのも彼女なんだが、友達の妖狐が今、王都で様子をうかがってくれている。本陣が危なくなったら彼だけでも助けだしてもらおうよう頼んでみよう」

「あ、ありがとう！」

ユリアはジェイドの手を取り、涙をぬぐう。

「戦争が終わったら彼女に美味しいものでも食べさせてやってくれ」

ジェイドはユリアの手をギュッと握る。

ユリアはゆっくりうなずいた。



しばらく二人は妖狐からの戦況情報を聞きながら、落ち着かない日々を過ごしていた。

すると、突然、とんでもない情報をもたらされる。

南西にある大きな島国のサグが挙兵してオザツカに攻め込んだというのだ。オザツカは先の王都侵攻で将校たちが囚われ、軍事力に陰りが出ているのは確かだったが、全く予想もしなかった事態にユリアはうろたえる。

「王国が分裂してるからチャンスだと思ったんだろう」

ジェイドが淡々と言った。

「サグがオザツカを制圧したら王国にも……来るかな？」

ユリアが泣きそうな顔で言う。

「反乱をうまく鎮圧できなければ来るだろうね」

「そ、そんな……」

うなだれるユリア。

ジェイドは心配そうにユリアを見つめ、そっとハグした。

事態はさらに混迷を深めていく。

オザツカをあつという間に制圧したサグはその勢いのまま王都へと侵攻していった。

アルシェたちは王都で籠城をし、サグを迎え撃ったが、なんとその時、島国サヌークの軍隊が電撃的にサグの首都を急襲したとの報が駆け巡る。

これですべての国が戦争に突入し、全土が戦火に覆われることになった。

街の人たちは次々と田舎へと逃げだし、街は閑散として経済もマヒする。さらに軍隊の特殊部隊は敵地の農村の田畑を焼き払い、兵糧攻めを図る。

食べ物を使った人々は次々と飢えに倒れ、地獄絵図があちこちで展開されることとなった。



じっとしてられないユリアは、朝早くジェイドに内緒で王都へと飛んだ。

森を越えると焼け焦げた農村が広がり、人の姿はどこにも見えない。あれほど豊かな実りを見せていた豊穡の大地はただの焼け野原となり、まさに地獄と化していた。

ユリアはあまりのことに呆然とし、涙をポロポロとこぼしながら飛ぶ。

うっうっうっ……。

とめどなくあふれてくる涙を止めることができず、ただ、王都へと急いだ。

遠くに王都が見えてきたが、どうも様子がおかしい。いつもならにぎやかに人が行きかい、あちこちから湯気の上がる活気を見せていた街には何の動きも見られない。

はやる気持ちを押さえながら近づいて行くと、そこはゴーストタウンだった。あれほど活気にあふれていた街には誰もいなかったのだ。

「うそ……」

ユリアはその惨状に言葉を失ってしまう。

つい先日まで王国の中心として十万人の人が暮らしていた活気のある巨大な街

が、あちこち焼け焦げた廃墟の街と化してしまっていたのだ。

かろうじて中心部の方に人の気配があり、ユリアは急いで飛んだ。

王宮が見えてきたが、美しかった庭園は掘り起こされ、畑となっており、何人かが畑仕事をしている。

ユリアが着陸しようとする、魔法が飛んできた。急いでシールドを張って防いだが、次々と攻撃を受け、やむなく引き返すことにする。

敵意がない事をちゃんと示して丁寧によかったのかもしれないが、荒廃しきった王都や農村を見てしまったユリアは、もういっぱいいっぱいそんな余裕がなかったのだ。

3・1・爆弾の皇帝

その頃、東京でも動きがあった――。

ウェーブがかった美しい金髪を揺らし、少女「ルドヴィカ」は田町の街を歩いていた。大胆に大股で歩く、ミニスカートから延びるすらりとした生足に、すれ違う人も目を奪われている。国道十五号線を行きかうバスやタクシー、ずらりと並ぶガラス張りの高層ビル、遠くには赤い東京タワーも見える。少女は楽しそうに歩き、高級マンシヨンの前まで来ると、まるでドラッグをキメたかのように狂気を孕んだ瞳でキャハッ！と笑ってマンシヨンを見上げた――。

マンシヨンの最上階、メゾネット造りの気持ちのいいオフィスにきた少女は、会議室へと案内される。少女はずらりと並ぶ面々をチラッと見ると、フンと鼻を鳴らし、席に着く。

「ルドヴィカさん、わざわざ来てもらってすみませんね」

チェストナットブラウンの髪を揺らし、琥珀色の瞳を輝かせながら、神懸った美しさを放つ女性「ヴィーナ」が口を開いた。

「いや、全然かまわないわ」

ルドヴィカはやや反抗的な口調で答える。

「さっそくで悪いけど、これを見てくれるかしら？」

そう言ってヴィーナは会議机の上にグラフをいくつか浮かび上がらせた。

「あなたに管理を任せていた星の情報よ。戦乱だらけで人口……、多様性……、その他全ての点で急速に悪化してるの。説明をしてもらえるかしら？」

ヴィーナはポインターでグラフを指し、ルドヴィカを静かに見つめた。

「説明もくそも、見たまんまよ！」

そう言って肩をすくめる。

「では、廃棄処分に同意という事でいいかしら？」

ヴィーナは淡々と事務的に言った。

「ふん！ あんたらしいつもそうよ。お高く留まって偉そうに処分をするだけ！

いいご身分なこと！」

ルドヴィカは叫ぶ。

「あなたの行動記録……見たわよ。管理アドミニストレーター者権限使って酒池肉林に享楽の数々……。

それで批判するの？」

抑制的なトーンで返すヴィーナ。

くっ！

ルドヴィカは齒をぎゅつと食いしばると、いきなり立ち上がり、腕を高く上げて、

「爆弾の皇帝！」
ツァーリボンバ

と、叫んだ。

直後、窓の向こう、東京タワー上空で激烈な閃光が放たれ、東京は瞬時に鮮烈な熱線に灼かれた。街路樹は一瞬にして黒焦げとなって燃え上がり、ガラスは溶け、街ゆく人々は瞬時に沸騰して爆発した。

閃光がおさまると、白い繭のような衝撃波が広がっていき、ビルは次々と吹き飛び、東京全域を瓦礫の山へと変えていく。

「キャハッ！　ざまあみろ！」

イカれた狂気を孕んだ目で叫ぶルドヴィカ。

しかし、全てを焼き尽くす史上最強の核兵器爆弾の皇帝をまともにくらないながらも会議室はビクともしなかったし、出席者も白けていた。

「どうしてみんなコレやるのかしら？」

ヴィーナはウンザリしたように肩をすくめる。

そして、腕を高く掲げると、

「後退復帰！」
ロールバック

と、叫ぶ。直後、窓の外が青白い光の奔流に覆いつくされ……、やがて光が晴れるとそこには爆破前の東京が戻っていた。

「へっ!？」

啞然とするルドヴィカ。

青空に東京タワーがそびえ、道には多くの車が行きかい、爆発前と寸分たがわない東京がそこにあった。

「ご苦勞様、言い残すことは？」

ヴィーナは鋭い視線でルドヴィカをにらむ。

「くっ！ 化け物どもめ！ グア———！」

ルドヴィカは怒りに任せてこぶしを会議テーブルに叩きつけ、粉々に砕いて吹き飛ばすとヴィーナに飛びかかった。

「くらえ！」

渾身のパンチがヴィーナの頬にさく裂し、ヴィーナは吹き飛ぶ。

そして、ルドヴィカはそれを追いかけると馬乗りになり、両手で次々とヴィーナを殴った。唇が切れて血が飛び散り、ゴスッ！　ゴスッ！　と猟奇的な鈍い音が部屋に響き続ける……。

「死ね！　死ね！」

しかし、殴りながらルドヴィカは違和感に囚われた。

なぜ誰も止めないのか……？

そして、血にまみれた殴る手を止め、恐る恐る周りを見ると、ニコニコと笑っている水色の髪の子「シアン」一人を残して、他には誰もいなくなっていた。

「な、何で……止めないんだ？」

ルドヴィカはげんそうに聞く。

「だって、それただの人形だもん。きゃははは！」

シアンは楽しそうに笑った。

「に、人形!?　くっ……」

ルドヴィカは血まみれとなった女性の人形を忌々しそうに見つめ、大きく息をつくと首を振った。

3・2・一億年の刑罰

「さて、君、テロリスト集団に魂を売ったね？ 情報、吐いてもらうよっ！」

シアンはうれしそうに言う。

「バーカ、仲間を売るわけねーだろ！」

ルドヴィカは今度はシアンに殴りかかったが……、こぶしはシアンをすり抜け、空を切った。

「きゃははは！ もうこの部屋は『時の結晶』に変えてある。この世界には君しかないんだ」

「また、面妖めんようなシステムを作りやがったな……。だが、何したって無駄だ！ 吐くぐらいなら死んでやる」

「どうやって死ぬの？」

シアンはニコニコして聞く。

「そんなのこれで心臓一突き……。あれ……？」

ルドヴィカは机の破片を拾おうとして、手がすり抜けてしまったことに驚く。

「君の身体はもう何とも干渉しない。まあ幽霊みたいなものだよ。お腹もすかないし、老化もしない。死ぬことなんて無理だねえ。きゃははは！」

「マ、マジかよ……」

哑然とするルドヴィカ。

「じゃあ、僕は十年後に来るよ。その時、また返事を聞こう」

「じゅ、十年後!」

「そう、その次は百年後、その次は千年後……、さて、何年後に吐いてくれるかな?」

シアンはワクワクしながら言う。

「ちよ、ちょっと待てよ! そんな未来に情報吐かせたって意味ねーだろ!」

『時の結晶』内の一億年って外の世界の一日くらいなんだよね……」

シアンは首をかしげる。

「一億年!」

「そうだ、最初から一億年待ってみようか?」

シアンは満面に笑みを浮かべて言う。

「ま、ま、ま、待ってくれ！」

ルドヴィカは顔面蒼白になって頼む。

「一億年じゃ全部忘れちゃうか。では、十年後、また会おうね！ きやははは！」

シアンは嬉しそうにそう言うのと、消えていく……。

「あっ！ 待ってって言ってるだろ！ チクショー!!」

ルドヴィカは必死に吠えたが、その声はどこにも届かなかった。



一分後、シアンが部屋に戻ってくると、ルドヴィカは十年の放置ですっかりやられてしまい、ぐったりと床に転がり、うつろな瞳がただ宙を映していた。

「おまたせちゃん！ 吐く？ それともまた百年待つ？」

シアンはニコニコしながら聞く。

ルドヴィカはヨロヨロと起き上がると、おもむろにシアンに土下座をした。

「全て……吐きます。だから……殺してください……」

シアンはうれしそうにうんうんとうなずいた。



「パパー！ テロリストの拠点が分かったよー！」

シアンはメゾネット造りのオフィスの階段を下りながら、手を振って言った。

「よくやった。それじゃ作戦会議だ」

パパと呼ばれた男性「誠」^{まこと}はニコツと笑い、ヴィーナたちを再度集める。

「ルドヴィカの星はどうしよう？」

「そんなの廃棄処分以外ないわよ。テロリストがどんな仕掛けを残してるか分からないんだから」

ヴィーナは言い切る。

「残念だけど仕方ないわね」「もったいないけどなあ……」

他のメンバーも渋々同意する。

腕を組んで目をつぶり、渋い顔をしていた誠が意を決したように言う。

「では、廃棄で行こう」

「それじゃ、システムはシャットダウンして初期化するわね」

ヴィーナはそう言って手を高く上げる。

「ちよ、ちよっと待って……」

誠はヴィーナの手をつかんだ。

「何よ？ また予言？」

いぶかしげにヴィーナは言う。

「焼却処分したらいい事ありそうなんだよ……。シアン、焼却処分でお願い」
そう言って誠はシアンに頼んだ。

「わかったよ。きゃははは！」

シアンはうれしそうに笑う。

「まあ、いいわ。で、テロリストはどうすんのよ？ 私は嫌よ」

ヴィーナはジト目で誠を見る。

「あー、新人たちに任せるか。四人いたよね？」

「新人……ですか？」「うーん……」

メンバーたちは不安そうに眉をひそめる。

「実戦を経験して育てないといけないかなって……。四人で勝てそう？」

誠はシアンに聞く。

「うーん、ヴィクトルなら一人でもいけるんじゃない？」

「ヴィクトル？」

「ドラゴンと結婚した大賢者よ」

ヴィーナが言う。

「あー、あの六歳児！」

「あの子、もう子供いるのよ」

「えっ!? 六歳児が!？」

「もういい青年よ」

「へえ……。じゃあ、その大賢者に出動してもらうようにお願いできるかな？」

「え——、嫌よ。面倒くさい」

ヴィーナは口をとがらせてそっぽを向く。

「僕から言っとくよ！」

シアンはニコニコしながら言い、i P h o n eを取り出す。そして、

「あー、ちょうどテロリスト集団はヴィクトルの星の南極に逃げだしたし、都合いいかも」

そう言いながらどこかに電話をかけた。

3・3・ アポカリプス

所変わってオンテークの森——。

自分たちの星が焼却対象となってしまったことも知らず、ユリアたちは夕飯を食べていた。

ユリアは食欲のない様子で、王都の惨状を話す。

ジェイドは、

「危ない事はしちゃダメだ」

と、怒っていたが、想像以上の荒廃っぷりに渋い顔をし、うなだれた。

「どうなっちゃうのかな……？」

ユリアは心配そうに聞く。

「そこまで荒廃すると……、神様に見限られてしまう……かもしれん……」

「見限られるって……？」

「この星が消されるってことだよ」

「えっ!?! そ、それはダメよ！ そんなことになったら私たちも消されちゃうっ

て……ことよね？」

「そうだ……」

極めて厳しい事態に追い込まれたことに二人はうつむき、沈黙の時間が続いた……。

「ねえ、何とかならない……かな？」

キリキリと痛む胃を押さえながら、ユリアは口を開く。

「神様のやることに我々は干渉できない。何しろ我々を作ったのは神様なのだから……」

「そんな……」

ユリアは青い顔をしてうつむく。



早々に食卓を片付け、寝支度をしている時だった。

パパーラッパ！　　パパーラッパ！

外でラッパの音が鳴り響く。

「えっ!？」

ジェイドはあわてて窓を開いて空を見上げる……。

ラッパの音は夜空高く、宇宙から降り注ぐようにオンテークの森に響き渡っていた。

「ア、アポカリプスだ……」

ジェイドは顔面蒼白となり、空を見つめたまま動かなくなる。

「な、何なの……？ それ？」

ユリアはジェイドの異様な様子に恐る恐る聞く。

「終末を告げるラッパ……、神様がこの星を終わらせると宣言したんだ……」

ジェイドは呆然としながら崩れ落ちた。

「えっ！ この星、消されちゃうの!？」

真っ青になるユリア。

ジェイドは無言でゆっくりとうなずく。

「ど、どうやって消されるの？」

「分からない……」

ジェイドはそう言って、うなだれた。

世界の終わりがやってくる。

いきなりの死刑宣告に二人とも言葉を失い、ただ、呆然とするばかりだった。やがてラッパの音が鳴りやみ、静けさが戻ってくる。

ユリアはこれから始まる死刑執行をどうとらえていいのか途方に暮れ、窓辺で夜空を見上げていた。

その時だった。夜空の向こうに、何かぼうつと赤く光る点がゆっくりと動く。

「あれ……、何かしら？」

ジェイドは立ち上がってユリアの指さす先を見る……。

すると、目をカッと見開き、叫んだ。

「巨大隕石だ！ デカい……二十キロはあるぞ！」

二十キロと言えば、王都だけでなく、王都を囲む盆地全体が覆い隠されるサイズ。落下したエネルギーで、この星の生きとし生けるものは全て燃やし尽くされてしまいうだろう。神様が選択した星の消去方法は巨大隕石による焼却処分だったのだ。

「二十キロ!？」

ことの深刻さにユリアは言葉を失う。

するとジェイドはユリアの目を見つめ、

「我が隕石の軌道をそらして浮かす。ユリアは全力のシールドで宇宙へ帰っていくようにさらに軌道を変えてくれ」

「えっ!? 軌道をそらすってもしかして?」

ユリアは嫌な予感がした。

「愛してるよ、ユリア……」

ジェイドは覚悟を決めた目でユリアを見つめる。

「待って! 止めて!」

ユリアはジェイドにしがみつく。彼は自分の命をなげうってこの星を守ろうとしているに違いない。ジェイドが失われた未来、そんなのどう考えても受け入れられなかったのだ。

しかし、ジェイドはそつとキスをするユリアの手を振りほどき、窓の外へと跳ぶ。

「ジェイド——!」

ユリアの叫び声が響く中、ジェイドはドラゴンの姿に戻り、いまだかつてなく激しく光り輝くと隕石の方へとすっ飛んで行った。

「いやあああ！」

ユリアはいきなり訪れた別れの、胸が張り裂けるような痛み貫かれ、絶叫する。隕石は徐々にまぶしく輝き始め、世界の終わりが近づき、ジェイドの鮮やかな青白い軌跡はまっすぐに隕石の飛び先へと進む。

夜空に展開される大勢の命のかかった鮮烈な光の共演。それはユリアの胸を絶望に染め、ただ力なく手を伸ばすばかりだった。

そして、両者が交わる瞬間、激しい閃光が夜空を、大地を光で埋め尽くした――。

3・4・ 降り注ぐ命の輝き

「いやあああ！」

最愛の人の最期、その激烈な光の洪水を浴びながらユリアは自分がバラバラになってしまうような衝撃で泣き叫ぶ。自分を救ってくれて、そして、大切に優しく慈しんでくれたかけがえのないジェイド。その愛しい命がまばゆい光となって大地に降り注いでいる……。

「ああああ……、ジェ、ジェイド……」

ユリアは焦点のあわない目でそうつぶやくと、奥歯をカチカチと鳴らしながら、真っ青な顔をして窓辺にもたれかかった。

光が晴れていっても、隕石は輝きながら飛んでいる。ただ、軌道は確かに大きく変わっていた。

ユリアはジェイドに託された作戦を思い出し、全力のシールドを張るべく体に力を入れようとしたが、手がブルブルと震えて上手くいかない。

「ダ、ダメ、ちゃんとやらなきゃ！」

ユリアはポロポロと涙をこぼしながら深呼吸を繰り返し、意識を集中して超巨大なシールドを隕石の進行方向に斜めに展開した。

秒速二十キロの超高速でシールドに突入した隕石は、衝突の衝撃でバラバラに碎けながら斜め上に弾き飛ばされていく。

隕石の破片群はまるで壮大な花火のように、激しい光の軌跡を描きながらゆっくりと高度を上げていき、やがて宇宙へと帰っていった。

ユリアはハァハァと荒い息をしながら、両手を夜空に向けたまま満天の星々が戻ってくるさまを呆然と見る。

ホウ、ホーウ……。

まるで何もなかったかのように、静けさを取り戻した森からは鳥の鳴き声が聞こえてくる。

「ジェ、ジェイド……?」

ユリアはまだ現実感が湧かず、力なくつぶやく。

必死にジェイドの気配を探索したが……、どこにもジェイドの姿は見つけられなかった。

「ジェイド——！　ねえ！　ジェイド——！」

ユリアの絶叫はただ静かな森へと吸い込まれていく。

うっうっうっ……。

ユリアはジェイドが消えた辺りの空をじっと見つめながら、ただ涙を流した。
やはりジェイドは身を挺^てしてこの星を守ったのだ。ユリアを残して……。



すると、流れ星のような光跡がツーツと夜空から降りてくる。

「ジェイド……？」

ユリアはその光跡を目で追う。やがてその光は激しく輝きながらグングンと近づいてきてユリアは思わずしゃがみ込む。

きやあ！

光は窓を抜け、部屋に入ってきた。室内をまばゆく照らす眩しさに目がくらむユリア。

ひいひい！

パリパリ！　というスパークがはじける音が部屋中に響き渡った。

「君、すごいね！」

光の中から若い女の声がする。

「えっ!？」

光がおさまって、中から現れたのは水色の髪の子、シアンだった。

「隕石を止められたなんて初めてだよ」

そう言ってニコニコと笑う。

「あ、あなたが隕石を落としたんですか!？」

ユリアはシアンに食ってかかる。

「そうだよ？」

シアンは悪びれることなく平然と言った。

あまりのことにユリアは泣き叫びながら喚く。

「な、なんてことするのよ！ ジェイドを返してよ！」

「いいよ！」

ニコニコとするシアン。

「え？」

あっさりとOKされてしまって、拍子抜けのユリア。

「ドラゴン、生き返らせてあげよう」

シアンはサムアップして嬉しそうに言う。

「あ、あ、じゃあ、お願い……します……」

この星を滅ぼそうとしながら、ジェイドを生き返らせるという、この軽い女の子が一体何を考えているのか全く分からず、ユリアは困惑しながら頼む。

「ただ、一応パパの許可を取らないとね。東京行くからついてきて」

シアンはそう言うのと、ユリアの手を取って一気に空間を跳んだ。



ユリアが気がつくと、目の前には美しい間接照明を施したガラスづくりの建物がたくさん並んでいた。

「うわぁ……」

思わず目を奪われるユリア。

そこは表参道だった。

「お願いする時はケーキ買わないとね」

シアンはそう言いながら綺麗な歩道を楽しそうに歩く。

「えっ？　ちょ、ちょっと待って……」

ユリアは初めて見るオシャレな街に気圧されながら、シアンを追いかける。

ショーウィンドウには見たことも無いようなオシャレなドレスやアイテムが煌びやかに展示され、そんな店が次から次へと並んでいるのだ。

そして、街ゆく人たちはみんな着飾っていて、見たことも無いようなエレガントなファッションに身を包んでいる。ユリアは圧倒され、みすばらしい自分のワンピースを少し気にした。

3・5・ 時を駆ける少女

「このケーキにしよう！」

シアンはうれしそうにそう言うと、ガラス戸をあけてケーキ屋へと入って行く。ガラスのショーウィンドウの中には、芸術品のような造形をしたケーキが所狭しと並び、繊細な照明がキラキラとその美しさを際立たせている。

「うわぁ……」

ユリアは見たこともないそのきらびやかなケーキたちに圧倒される。

「どれ食べたい？」

シアンはニコニコしながら聞いてくる。

「私はどれでも……。それよりジェイドが……」

うつむくユリア。

するとシアンは、うんうんとうなずき、

「おねえさん、ここからここまで全部一つずつちょうだい！」

と、大人買いをする。

そして、大きなケーキの箱を受け取ると人目もはばからず、そのまま田町のオフィスへと跳んだ。



オフィスでは誠たちが歓談している。

「ただいまー！」

シアンが元気にケーキを掲げながら割り込んでいく。

「あれ？ ケーキ……？　なんかあった？」

誠が怪訝けげんそうな顔でシアンを見て、その後ろのユリアに気がついた。

「あれ？」

「こ、こんにちは」

ユリアは急いで頭を下げる。

「じゃーん！　大聖女ちゃんです！　この娘凄いいんだよ。隕石跳ね返したの」

シアンはうれしそうにアピールした。

「へっ!？」

予想外の展開に驚く誠。

「なので、あの星、この娘に任せるっていうのはどうかな？」

ニコニコしながらシアンは言った。

「うーん、そうだったか……」

誠は腕を組んで考え込む。

「まあ、ケーキでも食べながらちょっと話聞いてあげて」

シアンはそう言うのと、ケーキを次々とテーブルの上に並べていった。



みんながケーキを食べるなか、ユリアはうつむきながら今までの事をとつとつと語る。

追放され、ドラゴンに助けられ、魔物と化した公爵に襲われ、戦乱の世に堕ち、最後にジェイドが身を挺して隕石を防いだことを涙まじりに説明した。

「無罪！」

うなずきながら聞いていた誠は、そう言って涙をぬぐった。

パーン！

ヴィーナはティッシュペーパーの箱で誠の頭をはたき、

「何が無罪よ！ お気楽な事言っていないで真面目に考えなさいよ。テロリストに汚染された星なんてどうすんのよ！」

と、ジト目で言う。

「痛いなあ、何すんだよ……」

誠は頭をさすりながらそう言って、首をひねると、

「その……追放前の時間に巻き戻したらいいんじゃない？」

と、ニコッと笑って提案する。

「時間を巻き戻す!？」

ユリアは驚いた。一体この人は何を言っているのだろうか？ もしそんな事ができるなら、自分が追放されることも防げるし、誰も死なないのだ。でも、そんな事本当にできるのだろうか？

「あ、いいんじゃない？ 悪さをする人たちが分かっているんだから対策もできるしね」

シアンはニコニコしながらそう言った。

「巻き戻したってテロリストの仕掛けはゼロにはならないわよ？」

ヴィーナは渋い顔をする。

「まあ、テロリストが湧いたらユリアさんに退治してもらうってことで
誠はお気楽に答える。

「ちょ、ちょっと待ってください！ 私ですか？」

いきなりの提案に青ざめるユリア。

「隕石跳ね返したんでしょ？ 才能あるよ」

シアンはうれしそうに言う。

「テロリストって、あの緑になった公爵みたいな攻撃が効かない人たちですよ？

無理です！ 無理無理！」

ユリアは目をつぶって首をブンブンと振った。

「大丈夫、君も攻撃効かなくするから」

シアンはとんでもない事を言う。

「私あんな緑になりたくない！」

思わず叫ぶユリア。

「普通……、緑になんてならないわよ？ その公爵なんなの？」

ヴィーナは首をかしげる。

「え……？」

「ユリアさんがやってくれないとなると、星は消さざるを得ないよ？」
誠は淡々とひどいことを言って追い込む。

「そ、それは……、困ります……」

うつむくユリア。

「いざとなったら僕や仲間が手伝うから安心して！」

シアンはニコニコしながらユリアの背中をパンパンと叩いた。

3-6. オフィス崩壊

ユリアは泣きべそをかいとうつむいたが、よく考えてみると、悲劇の起こらない別の未来を切り開くこと、それは大聖女として天命のようにも思えてきた。

とは言え、神の力を得たとしても得体の知れない異形の敵と戦うことは恐怖でしかない……。

目をつぶり、しばらく考え込むユリア。

しかし、星を消すという選択肢など選べない。答えなど一つしかないのだ。

ユリアは大きく息をつき、意を決すると顔を上げて言った。

「わ、わかり……ました。やります……」

ユリアは星に息づく数多の人々のことを想い、過酷な運命を受け入れる覚悟を決めた。

「じゃあ、ユリアさん、シアンの研修を受けて管理アドミニストレーター者のスキルを身につけてね。準備できたら時間巻き戻すから」

誠はにこやかに言う。

「は、はい……。で、でも……ジェイドは……」

ユリアは頬を赤らめながら口ごもった。

「はいはい、今すぐ会いたいよね？」

ヴィーナが優しい目をしてそう言うのと、ユリアは恥ずかしそうにうなずいた。

「じゃあ、イケメン君、カモン！」

ヴィーナはおどけた感じで手を上げる。

「待って待って！」

と、誠は叫んだが間に合わず、ボン！ と爆発が起こってオフィスの屋根や柱が吹き飛んだ。

「うわぁ！」「キャ——！」

落ちてくる天井やがれきの中、悲鳴が上がる。

ドラゴン形態のジェイドが召喚されてしまったのだ。砂ぼこりが巻き上がり、机や本棚などオフィス家具はぐちゃぐちゃに潰されてしまった。

「もう！ 二度とドラゴン呼んじゃダメって話したじゃん！」

誠は砂ぼこりの舞う中で、頭を抱えながら怒る。

「あれ——？　今回は人間形態を選んだはず……よ？」

ヴィーナは『やっちゃった』という感じでうなだれる。

「ジェイド——！」

戸惑ってキョロキョロしてるドラゴンの足に、ユリアは飛びついた。

ジェイドはそれを見ると、ユリアを愛おしそうに見つめる。

そして、ボン！　と、音を立てて人化し、ユリアをハグした。

「ジェイド——！　うわあああん！」

ユリアはしばらくおいおいと泣き続ける。

そんなユリアをジェイドは愛おしげに抱きしめ、頬を寄せる。

誠はそんなラブラブな二人を見ながら、ヴィーナに言った。

「騒ぎになる前に早く直して」

「ハ————イ」

ヴィーナは空中に黒い画面を広げると、何かを表示させ、渋い顔でパシパシと画面を叩いた。そしてしばらく画面をにらんでいたが、やがてウンザリとした様子で宙をあおぐ。そして、iPhoneを取り出し、どこかに電話をかける。

「ねえねえ、美味しいケーキがあるんだけど、田町に来ない？ うん……うん……。
待ってるわよ、すぐにね！」

そしてニヤリと笑った。



「はい、こんにちはあ……、へっ!？」

ドアを開けて入ってきた金髪おっぱの女子中学生のような女の子は、がれきの山と化したオフィスを見て固まる。

「レヴィアちゃん、待ってたわよお」

ヴィーナはうれしそうに近づくと、手を引っ張って会議テーブルの所に座らせて、目の前にケーキを置いた。

レヴィアは辺りを見回してジェイドを見つけると、

「もしかして……、またドラゴン……召喚したんですか？」

レヴィアは少しあきれた様子で聞く。

「レヴィアちゃん、綺麗に直してたじゃない？ これもお願い！」

ヴィーナは手を合わせて頼む。

「ヴィーナ様だってできるじゃないですか！」

「このオフィス以外なら一瞬で直せるんだけど、ここ、面倒なのよね……」

わがままな事を平気で言うヴィーナ。

「分かりました。一つ貸しですからね！」

レヴィアはジト目でそう言うのと、空中に黒い画面を広げ、パシパシと画面を叩いていく。

「頼りになるわぁ」

ヴィーナはニヤツと笑った。



「お礼に焼き肉でもおごるわ」

ヴィーナは綺麗に直ったオフィスを眺めながらニコニコして言った。

「やたっ！ 美味しいのでお願いしますよ」

レヴィアは満面に笑みを浮かべる。

「あなた達も行くかしら？」

ヴィーナはユリアたちを誘う。

女神様直々のお誘いを断るわけにもいかない。ユリアはジェイドと顔を見合わせると、

「お、願います……」

と、頭を下げた。

3・7・ 世界の本質

西麻布の焼肉店にやってきた一行は、シックな赤と黒のインテリアに彩られた個室へと通される。間接照明が質感の高い紅の壁面を照らし、高級感を演出していた。

「うわぁ……、すごい……」

ユリアは思わず声を出してしまう。

「ふふっ、今日はたくさん食べてね」

ヴィーナはニッコリと笑った。

「はい、早く座って！ 食べるぞー！」

レヴィアは浮かれている。

店員がやってくると、レヴィアは怒涛^{どとう}の注文を始めた。

「青りんごサワーを二つと、大ジョッキ十杯な」

「えっ!? 十杯……ですか？」

「いいから十杯な。それから霜降り大トロカルビ二十人前、極上ロース二十人前、それから極上タン塩十人前……」

ユリアはその異常な注文数に圧倒され、

「彼女、まだ子供ですよね？ そんなに食べるんですか？」

と、小声でヴィーナに聞いた。

「はははっ、レヴィアはもう二千年くらい生きてるドラゴンなのよ」と、小声で返しながらいれしように笑う。

「ド、ドラゴン!？」

ユリアは目を丸くして驚き、レヴィアを見た。

「なんじゃ、お主の彼氏だってドラゴンじゃろうが」

レヴィアはそう言ってジト目でユリアを見る。

「いや、まあ、そうなんですが……」



歓談しているとドリンクが大量に運ばれてくる。

レヴィアは傍らにジョッキをたくさん並べ、

「さあ、飲むぞ！ カンパーイ！」

と、陽気に音頭をとった。

「カンパーイ！」「カンパーイ」「かんぱーい」

レヴィアは一気に大ジョッキを飲み干すと、

「プハー！ 生き返るのう！」

と、上機嫌に言つて、新しいジョッキを手に取る。

ユリアがその飲みっぷりに圧倒されていると、レヴィアが言った。

「うちの星の若いのもな、ドラゴンの女の子と結婚したんじゃ」

「け、結婚ですか!？」

「そうじゃ、今じゃ子供もおる」

そう言つてまたジョッキを飲み干した。

「こ、子供……ですか？」

「ドラゴン相手でも子供はできるらしいぞ？」

レヴィアがニヤツと笑つてそう言つと、ユリアは真っ赤になつてうつむく。

「あらあら、うぶなのねえ」

ヴィーナはニヤニヤしながらうれしそうにユリアを眺めた。

「お肉お持ちしましたー」

店員が肉を満載した大皿をいくつも持って入ってくる。

「おー、キタキタ！」

レヴィアはうれしそうに皿を受け取ると、二十人前の霜降り大トロカルビをそのままロースターに全部ぶち込んだ。

「えっ!？」

店員は思わず声を出す。

「大丈夫じゃ、もう二十人前追加じゃ！」

レヴィアはそう言って空いた皿を店員に返した。

レヴィアはロースター上で山盛りになった肉を適当に動かすと、ガッと箸でまだ生の肉を何枚もつかみ、そのままパクツとほお張ると、ゴクツと丸吞みする。

「クハー！ 美味しいのう！」

そう言うときジョッキを一気飲みして、

「プハー！ 最高じゃ！」

と、上機嫌になった。

するとジェイドも真似してガッと箸で肉をつかむと丸吞みし、

「おお、これは素晴らしい物ですね」

と、言って目を輝かせる。

「そうじゃろう、肉はやはり日本の霜降りに限るわい。カンパーイ！」

そう言ってレヴィアはジェイドのグラスにジョッキをぶつけ、また一気飲みした。
ヴィーナはそんな二人の様子に眉をひそめ、

「私たちは焼いて食べるから、この肉触らないで」

そう言ってロースターの一角に肉を並べた。そして、

「ドラゴンを肉食にしたのは失敗だったわ……」

そう言っただけ息をつく。

「えっ!? ヴィーナ様がドラゴンを作ったんですか？」

ユリアは驚いて聞く。

「昔ね、ファンタジーオタクな管理^{アドミニストレーター}者がいて、勝手に作ってたのよ。で、それ

を黙認しちゃったの。食生活は人間と同じでって言っとけばよかったわ」

ヴィーナは渋い顔で肉を裏返しながらか言った。

「我は肉食でハッピーですよ。肉だけ食べて生きていけるなんて最高！」

レヴィアはうれしそうに生肉をガツとつかんで上機嫌に言う。

ユリアは圧倒されながらつぶやく。

「ドラゴンなんて作れるんですね……」

「そりゃあ何だって作れるわよ。あなただって管アドミニストレーター理者になればいろんな生き物

作れるわよ。……。あ、これ、すごく美味しい！」

ヴィーナは上品に肉を食べながら言う。

「生き物を作る……。なんでそんなことができるんですか？」

ユリアは首をかしげながら聞いた。

「ふふっ、あなたはこの世界は何でできてると思う？」

ヴィーナはニヤツと笑いながら聞く。

「えっ？ この世界……。ですか？ うーん、生き物と物の集まり……。ですか

？」

「情報よ。この世界は情報で出来てるの」

ヴィーナはそう答えるとジョッキをグツとあおった。

3-8. 海王星の衝撃

「じよ、情報……ですか？」

困惑するユリアに、ヴィーナはナムルの小鉢を持ち上げて、

「この物体は、『小鉢の形の陶器』という情報と全く同じなのよ」

「はあ……」

「言葉って情報でしょ？　つまり、言葉で言い表せるものは全て情報と等価なのよ」

「この世界の物はすべて言葉で言い表せるから、全部情報ってこと……ですか？」

「そう、正確にはこの世界は十七種類の素粒子と一つの数式でできてるんだけど、それらは全部データとして表現できる。つまりデータと等価、情報と等価なのよ」

「情報と等価……ですか……」

ピンとこないユリアを見て、ヴィーナは小鉢を箸でコンと叩いた。

すると小鉢はワイヤーフレームになり、透明でスカスカな針金細工状になる。そして、それをユリアに渡した。

「へっ!？」

ユリアは針金細工でできた小鉢と中のナムルを見て言葉を失う。手触りはひんやりとした陶器だが、透明だし、中のナムルをつまむとワイヤーフレームは刻々と変わりながら変形していく。

「食べてごらん」

ヴィーナはニヤツとして言う。

「た、食べられるんですか？」

「だって、それ、普通のナムルよ」

ユリアは恐る恐る口に入れるとゴマ油の効いたモヤシの味がする。それは食感も普通の食べ物だった。

「この世界が情報で出来てるって意味が分かったかしら？」

ヴィーナはニコニコする。

「この世界は……、ハリボテって……ことですか？」

ユリアは困惑する。

するとヴィーナは肉を食ってるレヴィアの背中をパン！　と、叩いてワイヤー

フレームにした。金髪おかつぱ娘は透明となり、ただ、細く白い線が彼女の輪郭を丁寧に表示し続ける。

最初レヴィアはそれに気づかず、肉を貪る。すると肉は丸呑みされて胃の方へと流れて消えていった。

その面妖な情景にユリアは固まる。

「別にハリボテじゃないわよ。中身詰まってるから」
ヴィーナはうれしそうに言った。

「何がハリボテ……、はっ!? 何するんですか! エッチ!」
レヴィアは自分が透け透けになっていることに気がついて怒る。

「はははっ、ゴメンゴメン。でも、透明だと迫力無いわね」

「もう! 早く戻してくださいよ!」

「追加のお肉お持ちし……ま……、えっ?」

揉めると店員が入ってきて固まる。

透明のワイヤーフレーム人間が隣の女性につかみかかっているのだ。それはお化けとか幽霊とかそう言う類に見える。

ヴィーナは固まってる店員から肉の皿を受け取ると、パチンと指を鳴らし、

「ありがと。あなたは何も見てないわ」

そう言ってニコツと笑う。

「はい、何も見ていません……」

店員はぼーとした表情でそのままゆっくりと出ていった。

「世界が情報で出来てるといいうのは分かりました。でも、情報であることと操作で
きることは別の話……ですよね？」

ユリアは真剣な目で聞く。

「あら、すごいわね。そうよ。オリジナルな宇宙では操作なんてできないわ」

「え!? では、ここはオリジナルでは……ない?」

「まあ、見た方が早いわね」

ヴィーナはそう言うのと、右手を高く掲げる。

直後、四人は真っ暗な宇宙空間に放り出された。

「うわあ!」

無重力の中で慌てるユリアは、ジェイドの腕にガシツとしがみつく。

そこは満天の星々の広がる宇宙空間、そして、足元を見て驚いた。そこには紺碧の鮮やかな青色を放つ巨大な惑星が浮かんでいたのだ。

「へっ!？」

真っ暗な宇宙空間に浮かぶ、壮麗な青……。それは、神々しさすら覚える澄み通った穢れなき美しい輝きだった。

ユリアが魅せられているとヴィーナが言った。

「あれが海王星。あなたの星や私たちの星、『地球』って呼んでるんだけど、地球の実体はあそこにあるわ」

「実体……?」

ユリアは何を言われているのか分からず眉をひそめる。

「行ってみましょ！」

そう言うと、四人を囲んでいた透明なシールドごと、ものすごい勢いで加速させた。

「うわぁ！」

ユリアは体制を崩して思わずジェイドに抱き着き、ジェイドはうまくユリアを

ホールドしてニコツと笑う。

3・9・ 六十万年の営み

少しずつ大きくなっていく海王星……。

よく見ると表面には筋模様が流れ、ところどころ暗い闇が浮かび、生きた星であることを感じさせる。

目を上げれば、十万キロにおよぶ壮大な美しい楕円を描く薄い環が海王星をぐるっと囲み、その向こうを濃い天の川が流れている。

ユリアはその雄大な大宇宙の造形に圧倒され、思わずため息をついた。

どんどん海王星へと降りて行く一行――。

「さあ、大気圏突入よ！ 衝撃に備えて！」

ヴィーナは楽しそうにそう言うのと、何重かに張ってあるシールドの先端が赤く発光し、コォ――っと音がし始めた。

やがてその光はどんどんと輝きを増し、直視できないくらいにまばゆくなっている。

「こ、これ、大丈夫なんですか？」

ユリアは顔を手で覆いながら聞く。

「失敗したらやり直すから大丈夫」

ヴィーナはこともなげに答える。

「や、やり直す……？」

ユリアが言葉の意味をとらえきれずにいると、レヴィアは、

「時間を巻き戻してもう一回やるってことじゃ。女神様を常識で考えちゃイカン」と言つて、ポンポンとユリアの肩を叩き、ユリアは絶句する。

やがて発光も収まり、一行は雲を抜け、いよいよ海王星へと入って行く。

目の前に広がる真っ青な星の表面はところどころ台風のように渦を巻いており、まるで荒れた冬の海を思い起こさせる。

「こんなところに私たちの星があるんですか？」

ユリアは怪訝けげんそうに聞く。

「そうよこの星の中に地球は一万個ほどあるのよ」

「一万個!？」

ユリアはその途方もない話に啞然とする。

この荒れた海のような世界に、自分たちの星を含め、一万個もの星があつて無数の人が息づいているというのだ。

ユリアはジェイドの手をギュッと握り、ジェイドを見る。

するとジェイドは温かいまなざしで優しく微笑み返し、うなずいた。

海王星はガスの惑星、地面はない。一行は嵐の中、青に染まる世界をどんどんと下へと潜っていく。

徐々に暗くなり、下を見ると恐ろしげな漆黒の世界が広がっている。それでもどんどんと深くもぐっていくので、ユリアは思わずジェイドの腕にしがみついた。

真っ暗な中を進むと、やがてチラチラと遠くの方に明かりが見えてくる。何だろうと思っているとそれは巨大な構造体の継ぎ目から漏れる明かりだった。

「えっ!？」

人の気配すらない壮大な惑星の中にいきなり現れた、何の飾りつけもない無骨な巨大構造物、その異様さにユリアは圧倒される。

それは広大な王宮が何個も入りそうな巨大な直方体で、上部からはまるで工場の様に煙を噴き出していた。さらに近づく、漏れ出る明かりに照らされて、吹雪の

様に白い物が舞っている様子が浮かび上がる。

そして、その構造物はよく見ると向こう側にいくつも連なっていて、まるで吹雪の中を進む巨大な貨物列車の様に見えた。

「これが地球の実体『ジグラート』よ」

ヴィーナは淡々と説明する。

「な、なんで、こんな所に？」

「ここはね、氷点下二百度。太陽系で一番寒い所だからよ。コンピューターシステムは熱が敵だから……。あ、あなたの地球はこれね」

そう言って、奥から迫ってくる次のジグラートを指さし、近づいて行く。

ジグラートは高さが七十階建てのビルくらいで、その高さの壁が延々と一キロメートルくらい向こうまで伸びている。その巨大さにユリアは圧倒され、言葉を失う。

漆黒の壁面パネルは不規則にパズル状に組み合わせられており、そのつながり目から青白い灯りが漏れ、その幾何学模様の造形は前衛的なアートにすら見えた。

これが自分が生まれ育ってきた星……という事らしい。壮大なオンテークとその

森や美しい南の島の海、泳ぎ回る魚たち、そして、王都とそこに住む十万人の人たち、それらがすべてこの構造体の中に息づいているという。それはあまりに飛躍しすぎていてユリアはうまく理解できなかった。

「これ作るのに、どれくらい時間かかったと思う？」

ヴィーナはニヤツと笑ってユリアに聞いた。

「え？ これ……ですか……？ うーん、千年……？ いや二千年とかですか？」

「六十万年よ」

そう言ってヴィーナは肩をすくめた。

3・10・ 本当の私

「ろ、ろ、六十万年!？」

予想だにしなかった答えにユリアは啞然とする。

「ヴィーナさんが……つくられたんですか？」

ユリアは恐る恐る聞いてみる。

するとヴィーナは首を振る。

「海王星人が作っ たんじゃ」

横からレヴィアが答えた。

「海王星人？ どなた……ですか？」

「今はもうおらんな」

レヴィアは肩をすくめる。

「えっ!? こんなすごい物を作ったのにいなくなっちゃったんですか？」

「人間は六十万年なんて生きられんのじゃ」

「子孫が生まれていくじゃないですか」

「産まなくなっちゃうんじゃ」

「へ？　そ、そんなことって……」

「不思議じゃろ？」

レヴィアは含みのある笑みを浮かべる。

「では皆さんはどういった経緯で……地球に関わられているんですか？」

ヴィーナとレヴィアは顔を見合わせ、少し困った顔をする。

「そのー、あれだ。この宇宙に人間が現れたのは五十六億七千年前のことじゃ」

「すごい……、古い話ですね？」

「で、この宇宙がこういう形になったのは誠さんが決めたんじゃ」

「誠さん？　さっきの男性の方……、では彼は五十六億年生きてるってこと……」

ですか？」

「誠はまだ三十代よ」

ヴィーナは呆れたように言う。

「えっ、えっ？」

「ちなみにこの海王星作ったのは私だけど、まだ二十代よ」

ヴィーナはニヤツと笑ってウィンクした。

「そのお……、時間がおかしいんですが……」

ユリアは困惑する。

「ヴィーナ様が若いのは代替わりなだけじゃが、誠様のは宇宙の法則の話じゃ。宇宙は無数の可能性の集積で作られておる。そして、宇宙は時の流れに従う訳でもないじゃ」

「え？ 時間の流れが変わったりするんですか？」

「そもそも時間が過去から未来へと流れていると感じてるのは人間だけなんじゃ。物理的には過去も未来もただの方向の違いに過ぎん。宇宙にとっては過去も未来も同じってことじゃな」

「そ、そんな……。では、未来が過去を変える事もあるってことですか？」

「変える事はない。ただ、未確定のところが確定されるってことじゃな……」

「未確定？」

「量子力学の世界では状態が確定していない方が普通なんじゃよ」

「量子……力学……????」

ユリアはパンクしてしまった。

「はいはい、そのくらいにして、着いたわよ」

ヴィーナはそう言う、シールドを出入り口のハッチに横付けした。



ジグラートの中に入ると、まるで満天の星々の様に無数の青い光がチカチカとまたたいていた。

「うわぁ……」

ユリアが見とれていると、ヴィーナが照明をつける。

すると、そこには小屋くらいのサイズの円筒形の金属がずらりと並んでいた。床の金属の網目を通して、上の方にも下の方にも延々と並んでいるのが見える。

「これがあなたの星の実体よ」

ヴィーナはドヤ顔で言う。

しかし、ユリアにはこれらの無数の円筒が何を意味するのかピンとこない。

「ついてきて」

ヴィーナはそう言う、脇の階段をカンカンと音を立てながら登り始めた。

そして、上の階をしばらく歩き、ある円筒を指さして止まる。

「これがあなたよ」

ユリアは何を言われてるのか分からなかった。なぜ、金属の塊が自分なのだろう？

「みてごらんさい」

そう言うと、ヴィーナは円筒に挿さっていた畳サイズのブレードを少し引き抜く。円筒はこのブレードの集合体だったのだ。

ブレードは精緻なガラス細工の集合体で、無数の細かな光がチラチラ瞬いてまるで芸術品のような美しさを見せていた。

「これは何……へっ!？」

ユリアが質問すると、そのチラチラとした瞬きが言葉に合わせて規則的な波紋を描く。

「これは光量子コンピューター。この光の波紋があなたよ」

「えっ!?! ちょっと！ えっ!?!」

ユリアは混乱した。自分の声や動作に合わせて光の波紋がキラキラと美しく泳動

する。確かにそれは自分と密接なものであることは疑いようのない事だった。しかし、自分がこのガラス細工だと言われてしまうとそれはアイデンティティに関わる重大な話である。

「こうやって、あなたの星にあるものは全てこの光コンピューターが創出していのよ。全体で十五万ヨタ・フロップス。桁外れの計算力よ」

ヴィーナはうれしそうに言った。

「これが……、本当の……、私……」

ユリアはそっとガラス細工に手を伸ばし、そっと触れてみる。ガラスはほんのりと暖かく、チラチラと明滅する明かりが指を照らした。

「あ、ちなみに魂はあっちの別のところで一括管理してるわ」

「そ、そうなんですわ……」

ユリアはうつろな目で答える。

3-11. 巻き戻される世界

「このデータを今度昔の物に全部入れ替えるわ。そこからがあなたの出番よ」
ヴィーナはニコツと笑って言う。

この膨大なコンピューターのデータを全部昔のデータに換装するというのだ。

「え……？ あ、それをするとか昔に戻ることですか？ 時間を巻き戻すわけではないんですね」

「時間は巻き戻せないわ。でも、この星の人たちにとっては巻き戻したのと同じ効果があるのよね」

「なるほど……、そうかも……しれません」

ユリアは理屈では分かるものの何だか釈然としない思いが残った。

自分たちが必死に生きた時間がただのデータとして処理され、昔のデータに書き換えられる。その軽さが気になったのである。とは言え、亡くなった人もそれで生き返るのならそっちの方がいいのは明白ではあるのだが。

ここまで考えて、データを入れ替えて亡くなった人が生き返るのなら命とは何な

んだろうとユリアは悩む。死んでしまった人が生きていた昔の続きを生きるとして、それは同じ人と言えるのだろうか？

しかし、それは哲学的で答えは出なかった。

ユリアは周りを見回してみた。何百枚ものブレードが挿さった円筒が、はるか彼方向こうまで延々と並んでいる。なるほど、これが自分たちの星なのだ。そして、これで過去に戻っていく……。

ユリアは期待と不安の混ざった心持ちで、チカチカと明滅するランプの群れをボーっと眺めていた。



焼肉屋に戻ってきた一行は、しばらく歓談したのちに解散となった。

「今晚はこのホテル使って」

ヴィーナはそう言うとかードキーをユリアに渡した。

「ドラゴン、あなた行き方わかるわね？」

「はい、前回もここ泊まりました」

「よろしい。それでは明日十時にオフィス集合ね。熱い夜を楽しんでね！ チャ

オ！」

ヴィーナはウインクしながら上機嫌に消えていった。



しばらく二人は手を繋いで東京の街を歩く。

道にはレクサスにテスラにベンツ、そしてタクシー、トラックがひっきりなしに走り、その道の上空には首都高速が通っている。王都の石畳の道をのどかに走る馬車しか見たことのないユリアにはまるで夢の世界だった。

そして、道の脇にはきらびやかな飲食店にコンビニ、そして夜のお店……。ユリアは思わずため息をつき、ただ圧倒されていた。

すると、超高層ビルを指さしてジェイドが言った。

「あそこだよ」

ユリアはビルの間に見えてきたひとときわ高いビルに目を奪われる。

「えっ!? あれがホテル?」

全面ガラス張りのそのビルは上品な照明が窓からのぞき、流れるような尖ったラインを夜空に向かって描き、その威容を誇っていた。

「部屋番号は5001、あのビルの五十階だ」

「五十階!？」

ユリアはビルを見上げ、自分がそんな所に本当に泊まれるのか心配になった。
ジェイドはそんなユリアをそっと引き寄せると、

「素敵な部屋だから大丈夫だよ」

と耳元でささやく。

ユリアはゆっくりとうなずいた。



部屋のドアを開けると、そこはスイートルーム。豪華なインテリアで彩られ、リビングのテーブルにはフルーツの盛り合わせが飾ってあった。

そして、大きな窓の外には東京の夜景がどこまでも広がっている。

ユリアは窓に駆け寄り、

「うわぁ……」

と、圧倒されながら煌びやかな高層ビル群や首都高を走る車の群れを眺めた。
ジェイドもそっと寄り添って一緒に夜景を眺める。

「ねえ……、ジェイド？」

「どうした？」

「さっきの話、本当なのかな？」

ユリアは首をかしげながら言う。

「女神様は嘘などつかない。ここから見える景色もまたジグラートの中で作られたものだ」

「ここに住んでいる人は知ってるの？」

「知らない。でも、たまに気がついちゃう人がいて、いたずらを仕掛けてくるらしいよ。お金儲けに使ったりね」

「いたずら……。ふう、私なんて、ジグラートを見せられたって信じられないのに」

ユリアは眉をひそめてジェイドを見る。

ジェイドはそっとユリアの髪をなでて言った。

「何はともあれ、二人とも無事でよかった」

ユリアはニコツと笑って、

「本当によかった……」

と言うと、ジェイドをハグし、ジェイドの精悍な男の匂いを吸い込む。
温かな安心感に満たされ、ユリアは幸せそうな笑顔を浮かべる。

「ジェイド……。もうダメかと思っちゃった……」

「心配かけたね、ありがとう」

ジェイドはユリアの背に手をまわし、髪に頬よせて言った。

3・12 一回だけ

「あのね……」

「なに？」

「私もう、ジェイドがいないとダメみたい」

ユリアはか細い声を出した。

「……」

ジェイドは無言で動かなくなる。

「め、迷惑……、かな？」

ユリアはジェイドの反応に不安を覚え、慌てて言う。

「迷惑なんかじゃない。ありがとう……」

ジェイドは堅い調子で答える。

「な、何か……あった？」

ジェイドは大きく息をつき、しばらく何かを考え、口を開いた。

「……。我はドラゴン。天与の異能で偉そうに生きてきたが……、それは単に神様

が設定してくれた力に過ぎない。要は配られたカードが良かったただけだ」

「えっ？」

ユリアは意外な言葉に驚く。

「人に大切なものが心だとするなら、我には自信がない。損得勘定せず、ひたすらに人々の事を願って動くユリアが輝いて見える。それに……、研修が終わればユリアは神の力を得る。もはや神様……。そんなユリアの隣に立つ自信が……ない」

ジェイドはそう言ってうつむく。

ユリアは少し離れ、ジェイドをじっと見つめて言った。

「何言ってるの？ 神の力を得たって私は私よ。私はジェイドにどれだけ救われたか。ドラゴンの力に惹かれてる訳じゃないのよ？」

ジェイドは顔を上げ、弱った顔でユリアを見つめる。

「私を大切にしてくれる気配り、力におぼれない節度、誰にでもできる事じゃないわ。もしあなたがドラゴンじゃなくても、一緒にいたい……。もっと胸を張って」

ユリアはそう言って真剣な目でジェイドを見つめた。

ジェイドは目をつぶり、大きく息をつく。そして、

「ありがとう……」

と言うと、ニコツと笑って優しくユリアの髪をなでた。

見つめ合う二人。

ジェイドの瞳に映るキラキラとした東京の夜景を見つめ……、ユリアは思わず吸い寄せられるように、背伸びをしてジェイドの口を吸った。

少し驚いたジェイドだったが、チロチロと動くユリアの舌を自分の舌で絡める。

二人は思いを確かめ合うように激しくお互いを求めた。

やがて離れると、ジェイドはユリアをお姫様抱っこをする。

「きやあ！」

少し驚いたユリアだったが、ジェイドの赤い炎の揺らめく瞳を見つめ……、そっとうなずいた。

ダブルベッドの上に優しく横たえられたユリアは、ワンピースの胸のひもを緩める。

そしてトロンとした目で、ジェイドに両手を伸ばす。

「来て……」

ジェイドは少し躊躇するそぶりを見せたが、ニコッと笑うとユリアの上に覆いかぶさった。そして見つめ合うと、またくちびるを重ねる。

そして、キスをしたままジェイドはユリアのしつとりと柔らかい白い肌に指をはわせた。

あっ……。

思わず漏れる吐息。

ジェイドはさらにユリアのデリケートな所へと指を伸ばした。

部屋にはユリアの可愛い声が響く。

やがてユリアは頬を紅潮させ、ジェイドの耳元で

「お願い……」

と、囁いた。

ジェイドはうなずき、優しくユリアの服を脱がすと重なっていく……。

お互いの危機を助け合い、一緒に冒険し、ジェイドの死を乗り越えて今、二人はここにいる。思い出を重ねてきた二人は東京の新たなステージでついに一つに結ば

れる。

その晩、二人は何度も何度も激しくお互いを求めあい、東京の夜は更けていった。



翌朝、香ばしいコーヒーの香りが漂ってきてユリアは目が覚めた。

見ると、バスローブ姿のジェイドがコーヒーを入れている。

ユリアは心の底から湧いてくる温かいものに包まれながら、ジェイドの姿を眺めていた。

とめどなくあふれてくる幸福感に、あまりに嬉しすぎてつい涙をこぼす。

こんなに幸せでいいんだろうか？

ユリアは仰向けになって思わず目頭を押さえた。

絶望を超えてたどり着いた東京。そこに輝ける未来があった。それはまるでおとぎ話のようでもあり、またある意味神話と言えるかもしれない。

「おはよう、我のお姫様」

気がつくとジェイドがベッドサイドでほほ笑んでいた。

「お、おはよう……」

ユリアは昨晚を思い出し、真っ赤になって毛布で顔を隠す。

ジェイドはそんなユリアを優しく見つめ、額に軽くキスをする。

するとユリアはジェイドに抱き着き、唇を求めた。コーヒーの香ばしい匂いが口の中に広がる。

二人は昨晚を思い出しながら舌を絡めていく……。

「ダメだ、また欲しくなっちゃう」

ジェイドがそう言うのと、

「ダメ……なの？」

と、トロンとした目でユリアが聞く。

「じゃ、じゃあ……一回だけ……」

「一回だけ？」

ユリアは激しく舌を絡めた。

4・1・ 神様誕生

神様になるための研修は熾烈を極めた。

シアンはノリノリでしごいてくるので、ユリアはついていくので精いっぱい。

座学では情報理論の基礎を叩きこまれ、情報エントロピーの計算にうならされる。実技では、いろんなツールを自分のイメージの中で使いこなしながら管理データを書き換えていくことを何度もやらされた。これを使うことで、空を飛んだり、魔法のような効果を実現したりする。特に対テロリスト用のハッキングの実技が大変で、毎日何度もシアン相手にハッキングを仕掛けては返り討ちに遭って黒焦げになっていた。

ハッキングの世界ではハックを仕掛けた瞬間が一番危険なのだ。手練れ相手には攻勢防御を食らってしまう可能性が高い。なので、ハッキングは慎重に敵の虚をつくのが大前提だが、シアン相手にはなかなか隙は作れなかったのだ。

「だいじょぶ、だいじょぶ！ ユリアちゃん筋がいいからすぐ慣れるよ！」

シアンはそう笑いながら黒焦げにしたユリアを再生する。

ユリアは炭になった身体を元に戻してもらいながら、虚ろな目でシアンを見ていた。



研修最終日、ユリアはシアンの猛攻を何とか防ぎ切り、合格のお墨付きをもらった。

「これで研修は終了、お疲れちゃん！　これが合格証だよ」

ニコニコしながらシアンは白く透明なブレスレットを渡した。

「え？　何ですかこれ？」

「良く分かんないけど、星を守ってくれるお守り。星が破滅しそうになったらこれを神の力で引きちぎると守ってくれるんだって」

「そ、そうなんですネ。どうやって……守ってくれるんでしょう？」

「うーん、パパが作ったので僕も良く分かんない。宇宙のかけらで出来てるんだって」

「宇宙の……かけら？」

「ここ、仮想空間だけど、このブレスレットだけは本物の宇宙でできてるんだよ」

「えっ!? オリジナルの宇宙ですか?」

ユリアはブレスレットを光に透かして見る。中には薄い半透明の膜が無数に層をなしており、入ってきた光が複雑に反射してキラキラと多彩な色で輝きを放っている。

「ここだけ特殊処理してるんだろうね。なかなか贅沢な品だよ」

シアンはうれしそうに笑った。

「オリジナルの宇宙って、どんなところなんですか?」

「点だよ」

「え? 点……?」

ユリアは何を言っているのか分からなかった。壮大な大宇宙が広がっているのかと思っただけな点だという。

「宇宙とは情報が無限に詰め込まれた世界、空間なんて要らないんだよ。だから
イベントホライズン
事象の地平面の向こう、全てが点になる世界にあるんだ」

「では、点の中身がこの世界……ってことですか?」

「そうだね」

「ふうん……。いいんじゃないかな？　でもこの星と似たようなもの作ってもダメだよ？」

シアンは鋭い視線でユリアを見る。

「はい、幸いうちの星には魔法システムが動いているので、それを活用した新しい民主主義を作りたいんです」

「なるほど。この星の民主主義はちょっと古いからね。確かに新たに始めるなら真似ない方がいいかな」

「ウソがばれる魔法とか使うといいんじゃないかと……」

「え？　政治家がウソをつけなくなるってこと？　それはまた面白い世界になりそうだね」

シアンはうれしそうに笑った。

4・2・ 神様嘘つかない

翌日、ユリアたちがオフィスに来ると、シアンはすでにユリアの星のデータをすべてバックアップの物に交代ロールバック復歸していた。

「おはよう！ 準備はオッケーだよ！」

シアンはニコニコして言う。

「ありがとうございます。なんてお礼を言ったらいいか……」

いよいよ始まるユリアの逆転劇。ユリアは期待と不安で胸がいっぱいになりながら、シアンの手を取って頭を下げた。

「お礼なんていいんだよ。頑張ってるね」

「は、はい。全力でやってみます！」

「テロリストが関係しそうなものを見つけたらすぐに報告してね。間違っても戦ったりなんてしちゃダメだよ。まだユリアじゃ絶対勝てないから」

「はい、気をつけます！」

「それじゃ、いつてらっしゃーい！」

シアンはそう言つて二人をユリアの星に跳ばした。



ユリアは気がつくつと、ジェイドと共に過去の王宮へと戻つてきていた。

花の咲き誇る美しい庭園、それは焼け焦げて畑にされる前の美しい姿を取り戻している。確かに過去へと巻き戻されたようだ。

白い大理石でできた荘厳な王宮、中では侍女たちが忙しそうに動き回っている。ユリアは赤いじゅうたんの廊下を上機嫌に歩き、奥の王族の棟へと急ぐ。

すると入り口の警備兵がユリアたちを制止して言う。

「お待ちください。大聖女様でもここから先はご遠慮ください」

警備兵の目には困惑が浮かんでいた。

「分かったわ！」

うれしそうにそう言つとユリアはパチンと指を鳴らす。

その瞬間、時間が止まる。

パタパタと歩き回る侍女たちの足音も、かすかに流れていた音楽もピタッと止まり、完璧な静けさが王宮を包んだ。

警備兵たちも目を見開いたまま静止して、まるでマネキンのようになっている。

「ふふっ、お疲れ様！」

ユリアたちは警備兵をすり抜け、ダイニングルームへと進んだ。

ドアを開けると、王様と王妃、そして、第一王子とアルシェが食卓で昼食をとりながら静止している。

ユリアは楽しそうにアルシェの後ろまで来ると、パンパンと肩を叩いた。

「えっ……？ あ、あれ……？」

アルシェは時の呪縛から解放され、周りを見回し、困惑の声を上げる。

そして、美しい金髪をゆらしながら振り向き、驚いて言った。

「ユ、ユリアさん？ ど、どうしたんですか？」

「今、少しいいかしら？」

「は、はい……。で、でもこれは……？」

王様たちがピタリと静止してしまっている異様な状況に戸惑う。

「私ね、神になったの」

「は？ か、神……？」

エンペラーグリーンの瞳に困惑の色が浮かぶ。

「そう、神なの」

ユリアはうれしそうに言う。

「この……、みんなを止めてるのはその……神の力？」

アルシエは部屋を見回し、給仕の侍女もピタリと止まっているのをいぶかしげに見て言った。

「そうよ？　神だもん。でね、戦争が起こるわ」

「せ、戦争!!　一体どこで？」

いきなりキナ臭い話になってアルシエは焦る。

「ここだよ。公爵軍やオザッカが攻めてくるの」

「そ、そんなはずはないよ。もう何十年も平和な関係を築いてるんだから」

「アルシエ、私は神なの。全部知ってるのよ。この王宮が攻め滅ぼされ、庭園が焼け野原になるのをこの目で見てるのよ」

「ほ、本当に？」

仰天するアルシエ。

「私は神、ウソなんて言わないわ。そして、そんな戦乱が続く星は不要だとこの星を作った神様は考えてるの」

「不要!?! ど、どうなるの?」

「この星丸ごと消されるのよ」

「はあっ!?!」

いきなり世界の滅亡を予言され、動転するアルシェ。

「消されたら困るわよね?」

「も、もちろん……。でも、そんなことを僕に言ってどうするの?」

「あのね、クーデター起こして欲しいの」

ユリアはニコツと笑って言った。

4・3・ 僕らのクーデター

「ク、クーデター!？」

思わずアルシエは青ざめ、王様や第一王子を見る。それは彼らを倒せと言うとんでもない提案だった。

「いろいろ考えたんだけど、現状の体制ではこの星の未来は変えられない。だからアルシエに体制を一新してもらって国々を征服、統一し、共和制へ移行してもらうわ」

「いや、ちょっと待って！ そんなことできつこないよ！」

「あら、私は神なのよ？ 神にできない事など無いわ。このまま王様たち縛ったっていいのよ？」

ユリアはニコニコして言う。

「いや、ちょっと、えっ？」

混乱するアルシエ。

「断ってもいいわよ。別の人に頼むだけだから」

ユリアはちょっと意地悪な笑顔を見せる。

「べ、別の人!？」

「アルシェが一番適任だと思うけど、アルシェじゃなきゃいけないって訳じゃないし……」

あごに指を当て、首をかしげるユリア。

「クーデターは決定……なの？」

「戦争がなくなり、貧富の格差が生まれない状態を作れる方法が、他にあるならいいわよ」

「王家は消滅？」

「あ、無くさないわよ。権力が無くなるだけで、今後も王様として国民の尊敬を集めてもらうわ」

「そんなこと……できないよ」

アルシェは眉をひそめ、否定する。

「大丈夫、私、そういう国、見てきたんだ」

「えっ!？」

「日本という国はね、天皇陛下という王様がいらっしゃるんだけど、権力は持っていないのよ。政治は国民から選ばれた人がやってるの。この国でもできると思う。……、あ、お茶ちょうだい。のど乾いちゃった」

ユリアはそう言うのと、隣の空いた椅子に座ってテーブルのティーポットに手を伸ばす。

「ぐ、具体的には……どうするの？」

アルシェは気を利かせて空きのカップをユリアの前に置く。

「あら、ありがと……。『蒼天の儀』に集まった王侯貴族を拘束し、新体制を認めさせるの」

紅茶を注ぎながらそう言うのと、美味しそうにすすった。

「いやいや、警備の騎士団たちが大勢いるんだよ？」

「あ、紹介し忘れてたわ、彼、ドラゴンなの」

ユリアは後ろに立ってるジェイドを紹介した。

「ド、ドラゴン!？」

「初めまして」

ジェイドは瞳の奥に真紅の炎を揺らし、ニコツと笑った。

明らかに人ではないその威圧感にアルシェは凍り付く。

「ドラゴンを倒せる人なんてこの世界にいないわ。それにいざとなったらこうやって時間を止めちゃえばいいの」

アルシェは圧倒された。

神になった大聖女とドラゴンが自分にクーデターを持ち掛けている。やるも地獄、やらぬも地獄……。

ただ、話を聞けば誰かを殺したり傷つけることを計画している訳ではない。邪心や野望があるわけではないのだ。純粹に大聖女としてこの星の未来を考えている想いは伝わってくる。

「ぐ、具体的には、僕に何をさせたいの？」

「何もしなくていいわ。『大聖女とドラゴンを使って自分が世界を統一する』とだけ言ってる」

ユリアは気軽に言う。

アルシェは腕を組んで考える。ここで断れば他の人の所へ行くだろう。国王の耳

に入れ、阻止しようと動いてもらってもドラゴンや神の力に勝てるとは思えない。むしろそこで無駄に死傷者を生むだけだ。王家は存続というのなら、自分が臨時で王になり、全てが終わったら父に家督を返上すればいい。逆に言えば、別の人があれば王家の存続も危ういかもしれない。

「わかった……やるよ」

アルシェはうなだれながら言う。

「ありがと。でも、そもそもこのクーデターはこの星のみんなを救うためにやるのよ？ 胸を張って」

「そ、そうかもしれないけど、話を聞いたばかりじゃ良く分かんないよ」

「まあ、そうかもね」

ユリアは上機嫌で紅茶をすする。

「それにしても、ユリアさんって、ずいぶん雰囲気変わりましたね」

ユリアは少し考え、言った。

「うーん、私ね、分かっちゃったの」

「えっ？」

「大聖女としてしきたりとか儀式とかマナーとかたくさんあるじゃない？ あれ、全部意味ないのよ」

「そ、そんなこと……、ないの……では？」

「私ね、一生懸命言われるがままに全部ちゃんとやったの。それこそ毎日必死で、でも、結果は散々だったわ。言われた通りのことをやってちゃダメだったのよ」

ユリアは反省を込めて渋い顔をする。

「いや、しかし、儀式とかマナーとかが品格を生むんだよ？」

「平和で余裕があるならいいわよ。暇つぶしにはちょうどいいわ。でも、今は緊急時、神様が怒っているのにマナーとかやってられないわ」

ユリアは肩をすくめた。

4・4・ すれ違う思い

その後、ユリアは時間を止めたままアルシェを連れ、宰相さいしょうの部屋に行く。クーデターを成功させても国の実務が止まっては何の意味もない。実務部門のトップ、宰相の協力は不可欠である。

そして、そこでもユリアは半ば脅しながらクーデター計画への同意を迫った。時間を止める事ができ、ドラゴンを役役するユリアに逆らえる者などいない。

「クーデターが成功したらその権力者に従うだけです。我々は政治家じゃないので……」

宰相は渋い顔でそう答える。

ユリアはうれしそうに宰相の肩を叩いて、

「任せたわよ！ クーデターの後には世界統一！ 全世界の行政実務のトップはあなただからね！」

と、ニコニコしながら言った。

宰相は哑然とした表情で、アルシェと顔を見合わせ、思わず天を仰いだ。

「あ、二人とも面倒くさいことになったって思ってるわね？ 一番面倒くさいのは私なのよ？ こんな本来大聖女の仕事なんかじゃないのよ？ 分かる？」

ユリアは腰に手を当て、ほおを膨らませて二人を不満そうに見る。

「そ、それは分かります。ただ……、クーデターしないと世界が終わると言われても、実感わかないですよ？」

宰相は気圧されながら答える。

「んー、もう！ 平和ボケなんだから！ まあいいわ、クーデターの時に使う権力移譲の書面、用意しておいてね！」

「わ、分かりました」

宰相は渋々うなづく。

「それじゃ、当日はよろしく！ チャオ！」

ユリアはそう言ってウインクすると、ジェイドとともに消え、時間はまた動き出す。

アルシェと宰相は渋い表情で顔を見合わせあった。



『蒼天の儀』当日がやってきた。

ユリアは前回のスケジュール通り、純白のシルクにきらびやかな金の刺繍の入った壮麗な衣装で控室のソファに座る。

前回はここで睡眠薬を盛られてしまっただけで崩れてはいってしまっただけで物心ついてからずっと一緒だった幼なじみのティモ。本当に彼がそんなことをやるのか……、ユリアは暗い気持ちでため息を繰り返す。

コンコン！

ノックされ、ヒョロツとした天然パーマの少年、ティモがお茶のセットをトレイに入れて入ってきた。そして、ティーカップに紅茶を入れてユリアの前に置く。

見ていると、動きがぎこちない……。

「ねえ、ティモ？ 何か……、私に隠してないかしら？」

ユリアはジッとティモを見ながら言った。

しかし、ティモは目を合わすことなく、

「えっ？ な、何のこと？」

そうとぼける。

ユリアは大きくため息をつくと、

「ねえ、私たち、どこで……、間違えちゃったかな？」

悲痛な表情でそう語りかける。

しかし、ティモは、

「し、知らないよ！」

そう叫ぶと、顔を真っ赤にして部屋を飛び出していった。

ユリアは再度深くため息をつき、入れられた紅茶のデータを解析する。

すると、浮かび上がる『ベンゾジアゼピン（睡眠薬）』との表示。

ユリアは頭を抱え、しばらく考え込む。ティモを便利な従者としてしか見ず、人としての交流を怠ってきた自分の至らなさを反省した。でも、だからといってこんな仕打ちは度を超えている。

ユリアは軽く首を振ると、睡眠薬の成分を消去し、ただの紅茶に戻してすすった。そしてソファに横たわって寝たふりをする。

ほどなく誰かが入ってくる。ゲーザだ。

そろりそろりとユリアに近づき、ユリアの肩をパンパンと叩く。

ユリアが動かずにいると、ゲーザはユリアの胸元に手を忍ばせて封印のシールを貼った。そして、傍らに置いてあった『蒼天の杖』を盗ると、また静かに部屋の出口を目指す。

ユリアは薄目を開けながらその様子をじっと見ていた。
なるほど、こうやったのだ。

「動くな！ 窃盗の現行犯だ！」

物陰に隠れていたアルシェがゲーザに飛びかかる。

ひっ！

ゲーザは急いで逃げようとするが、足が動かない。ユリアが足の筋肉を麻痺させていたのだ。

「な、何なのよコレ！」

ゲーザは『蒼天の杖』を振り回して威嚇いかくするが、程なく捕縛つかわされる。そして、ティモも警備の兵士によって捕まり、連れてこられ、二人とも床に正座で並ばされた。

4・5. ざまあ再び

「国宝の窃盗は死罪よ？」

ユリアは二人をにらみながら、感情のこもらない声で淡々と言う。

「ふん！ これは私の独断じゃないわ！ 牢でも何でも入れなさいよ。すぐに釈放されるわ」

ふてぶてしく言い放つゲーザ。

「残念でした。公爵も教皇ももう捕まえてあるの」

ニヤツと笑うユリア。

「へっ!？」

ゲーザは真っ青になって言葉を失う。

「死刑……、残念だけど仕方ないわね」

ユリアは憐れみのこもった視線を投げかける。

「ふざけんじやないわよ！ この！ 何の苦勞も知らない小娘が！」
すごい形相で喚くぎょうそうゲーザ。

「あら、私、あなたのコレですっごい苦勞……したのよ？」

ユリアは胸のシールをペリペリと剥がし、火魔法でポッと燃やすとゲーザをにらんだ。

「あなた何……言ってるの？ それになんで火魔法なんて使えるのよ？」

ゲーザはどういうことか分からず困惑する。

「それにあなたの苦勞って何？ 男に股開いただけじゃないの？」

ユリアはジト目でゲーザを見る。

「な、何を！ ……。ユリア……、あ、あなた純潔を捨てたわね？ 大聖女のくせに！」

「『愛を知った』と、言って欲しいわ」

ユリアはうれしそうに笑った。

「何が『愛』よ！ 男はね、可愛い女だったら誰だっていいの！ あんたもそのうち捨てられるのよ！ ざまあみろ！」

「そんなこと考えてるから、あなたには『愛』が手に入らないのよ」
ユリアは余裕の笑みで言う。

くっ！

ゲーザは鬼のような形相でユリアをにらんだ。そして、大きく息をつくと、

「いいわ、そしたらいい事教えてあげる。……、耳を貸して……」

そう言ってニコツと笑う。

「あら……、何かしら？」

ユリアはそっとゲーザに近づく。

直後、ゲーザは奥歯をギュイッと鳴らして何かをかみ砕くと、ゴォーッと豪炎を口から吐いた。

猛烈な火炎は一気にユリアを包み、純白の衣装が燃え上がる。

「バーカ！ ざまあ！ はーはっはっは！」

ゲーザは大笑いし、アルシェは慌てた。

「大丈夫、あれ、人形なの」

いつの間にかアルシェの後ろにいたユリアは肩を叩いて言う。

「へっ!？」

ゲーザは驚いて振り返る。と、その時、燃え上がってる人形がゲーザの方に倒れ

込む。

ぎゃあああ！

ゲーザは慌てて逃げようとするが、足は動かず逃げられない。

勢いよく燃える炎はゲーザに燃え移り、服や髪を燃やし始めた。

「あちっ！ あちっ！ 何してんのよ！ 助けなさいよ！ うぎゃあああ！」

必死に喚くゲーザだったが、ユリアたちはあまりに馬鹿げた自業自得に言葉を失い、ただ、間抜けなさまを白い眼で眺める。

ほうほうの体で何とか転がって火を消し止めたものの髪の毛を失い、火ぶくれした顔はもはや別人になっていた。

「ヒール！ ヒール！」

ゲーザは必死に治癒魔法を唱え、何とか事なきを得たが、焼け焦げた服にチリチリの坊主頭で放心状態となり、床に転がったまま動かなくなる。

「ここから先は裁判で決めてもらうわ」

ユリアはそう言うと、アルシェに収監を依頼し、ゲーザは連行されていった。

4・6・ 鮮やかな制圧

「それでは、大聖女様、お願いいたします」

案内役と呼ばれ、ユリアは壇上に登った。

煌びやかに装飾が施された大広間、壇上には多くの魔法ランプが配されて、まるでスポットライトの様にユリアを浮かび上がらせる。

ユリアは大きく息をつき、『蒼天の儀』に招かれた王侯貴族たちが一堂に会する様子を見回してニヤツと笑った。

そして、『蒼天の杖』を高く掲げ、サファイヤを青くまぶしく輝かせると、
エクストリームパリア
「絶対結界！」

と、叫んで王侯貴族たちを強固な結界に閉じ込めた。

段取りと違うことに出席者は驚き、どよめきが上がる。

すると、アルシェが奥から現れて壇上に上がり、姿勢をピツと正し、右手を高く掲げ、高らかに声をあげた。

「アルシェ・リヴァルタはここにクーデターを宣言します！」

嘩然とし、静まり返る王侯貴族たち。

さらに奥から宰相が重厚な紫色のファイル掲げて登場し、一礼してアルシエにそれを渡した。

アルシエは書類にサラサラとサインを書き込む。

それを確認した宰相は、

「ここに、アルシエ・リヴァルタ様が王国の全権力を掌握したことが法的に認められました」

と、王侯貴族たちに向かって声をあげた。

「おい！ ふざけんな！」「何をやってるのか！」「いいかげんにしろ！」

王侯貴族はそれぞれ怒り心頭で怒鳴り、席を立つが結界が強固で出ることができない。

すると、後ろの方から異常を察知した騎士たちがバタバタと入って来て、壇上を目指す。

直後、ズン！ という音と共に脇の壁が吹き飛び、砂ぼこりの中から巨大なドラゴンの首がニュツと顔を出した。

「ひえ———！」「キャ———！」「うわあ！」

敵ついウロコに巨大な牙に鋭い爪、ギョロリと見回す巨大な瞳に大広間は大騒ぎになる。騎士たちもドラゴンの登場に恐れおののき、動けなくなった。

「お静かに！ 我が王国を守ってくれる神の使い、ドラゴンです。私は大聖女様とドラゴンと共に世界征服を実現させます。王侯貴族の皆様におかれましてはご理解とご協力を賜りたく存じます」

アルシエはエンペラーグリーンの瞳を輝かせ、堂々とそう言い切った。

ここに来て王侯貴族たちはこれが茶番でないことに気づき、真っ青になってお互いの顔を見合わせ、ひそひそと善後策を話し合い始める。

「アルシエ！ これはどういうことだ！」

今までじっと静観してきた国王が立ち上がり、声を上げる。

「父上、ご相談もせずに申し訳ありません。ただ、これは王家を守る唯一の道なのです。全てが終わったら全部ご説明します」

「お前！ いいかげんにしろ！」

第一王子が声を荒げる。

「お兄様、もう私はこの国の国王です。口を慎んでいただけますか？」

アルシエはニコッと笑って言う。

「俺は認めないぞ！」

第一王子は真っ赤になって吠える。

しかし、アルシエは取り合わず、

「ここから先は大聖女様からご説明があります。私はこれで……」

そう言って退場していった。

「おい！ 待て！ 逃げんなよ！」

第一王子は必死に叫んだが結界を超えることもできず、地団太を踏む事しかできない。

「はい、皆様、それでは私から今後の流れをご説明します！」

ユリアはニコニコしながらまた壇上に戻り、声を上げる。

王侯貴族たちはムツとした表情でユリアをにらんだ。

「まず、皆さまの身体ですが、すでに実体を消してあります。物には触れられませんが、お腹も減りませんし、おトイレも不要です。言わば幽霊みたいな状態になっ

たとお考え下さい」

どよめきが起こり、一部の人は椅子に触れようとして手がすり抜け、啞然とする。「今後の世界統一のスケジュール、共和制への移行についてはそちらをご覧ください」

そう言って壁を指さすと、プロジェクターで映し出されたように一連の計画がずらりと表示された。

「皆さんの選択肢は三つ。一、このまま一生ここにいる。二、当計画を受け入れ、全権限を王国に返上し、裕福な家として存続する。三、ドラゴンと戦って散っていただく。決まったら声をかけてくださいね。たまに様子をうかがいに来ますので」そう言うのと、ユリアは一同を見回し、ニコっと笑って退場していく。

どよめく大広間だったが、誰も結界は壊せなかったし、幽霊状態になってしまった王侯貴族たちはもはや何もできなかった。

4・7・ 目標、来ます!

ユリアたちは会議室に集まった。

「アルシェ、見事だったわ!」

ユリアはうれしそうにアルシェの肩を叩く。

「ああ、もう後戻りできないよ、どうしよう……」

十五歳になったばかりの少年、アルシェはうなだれる。

「アルシェ様、今さらそんなことおっしゃられても困りますぞ。賽^{さい}は投げられたのです」

宰相はそう言って渋い顔をする。

「わ、分かってます。ちゃんとやりますよ……。はあ……」

「では、計画通り、次は宣戦布告よ! 国王様、サインして!」

ユリアはそう言って宣戦布告の書面をアルシェに渡した。

アルシェは嫌そうに書面を眺め、目をつぶって大きく息をついた。



オザツカの宮殿で御前会議が開かれる日、タイミングを計ってユリアとジェイドは空間を跳んで乗り込んだ。

着くやいなや「絶対結界！」
エクストリームバリア

と、叫ぶユリア。

驚き固まる王侯貴族たちは瞬時に強固な結界に閉じ込められる。当然宮殿には、魔法での侵入などできないような防御機能が嚴重に張り巡らされているのだが、この世界の構成データを直接書き換えるユリアの神の力の前には全てが無意味だった。

「ハーイ、皆様こんにちは！」

ユリアは楽しげに挨拶する。

「き、貴様は王都の大聖女！ 面妖な技を使いおって！」

オザツカの君主は短剣で結界を破ろうとしたが、全く歯が立たず怒りの声を上げる。

「あなた達全部捕まえたからこの戦争、王国の勝ちね！」

ニコニコしながら言うユリア。

「な、何を言う！　こんなの認めんぞ！」

頬に大きな傷を持つ筋骨隆々とした男が机をガン！　と拳で叩きつけて叫ぶ。見覚えのあるあの將軍だった。

ユリアはジェイドを前に出し、うれしそうに言う。

「じゃあ、この男があなた達の軍、全てと戦いましょう。勝てたらあなたたちの勝ちでいいわよ」

「えっ!?　一人を……倒せばいいだけ？」

ポカンとする將軍。

「ええ、でもきつと彼の勝ちですよ。ふふっ」

ユリアはニヤツと笑った。



二万人のオザツカ軍とジェイドは草原で対峙した。

將軍とユリアは脇の方で戦況を見守る。

「本当にあの男を倒すだけでいいんですな？」

將軍は念を押した。

「そうよ！　せいぜい頑張ってね」

ユリアはうれしそうに言う。

將軍は見くびられたものだとい内心憤慨した。あんなシャツを着ただけのヒョロツとした男一人に、二万人を数える自らが育て上げた精鋭たちが敵わない訳がない。怒りのこもった声で將軍は叫んだ。

「戦闘開始！　ぶっ殺せ！」

兵士たちはフォーメーションを整えていく。ジェイドは軽く準備体操をするとスタスタと無造作に兵士たちに近寄っていった。

先頭の兵士たちは盾を構え、しゃがんで一列に並ぶ。しかし、あんな無防備な男一人にやり過ぎではないかと内心いぶかしく思っていた。

ジェイドは構わずにスタスタとさらに距離を詰める。

直後、魔術師が二十人ほど宙に浮きあがると、一斉に攻撃魔法を放った。炎の槍が飛び、風の刃が舞い、氷のつぶてが流れ、全てがジェイド一人に降り注ぎ、ジェイドはシールドも張らずそれらをすべて全身に浴びた。

ズブーン！

激しい衝撃音が響き、もうもうと煙が上がっていく。

「よしっ!」

將軍はガッツポーズを見せ、誰もが勝利を確信した。

「ワシらの勝ちですな!」

喜び勇んでユリアの方を見た將軍だったが、ユリアは平然として言う。

「ふふっ、こんなのはいいから早く本気を出してくださいね」

將軍はムツとした。自慢の魔法部隊の攻撃を『こんなの』とはどういう事だろうか？

すると、補佐官が叫んだ。

「ダメです! 目標、来ます!」

「へっ!?!」

將軍が目を凝らすと、熱気に揺らめく陽炎の向こう、煙の中に赤く光る瞳が揺れるのが見えた。

「ひえっ!」

將軍は背筋に冷たい物が流れるのを感じた。あれだけの攻撃を受けてなお健在…

…。その不気味な赤い光に心の底から恐怖が巻き起こってくるのを止められなかった。

煙の中からジェイドは何事もなかったかのように現れ、さらに足を進める。

兵士たちは嘔然としてその様子を眺めていた。

あの攻撃を浴びて無傷、それもシャツに汚れ一つついていないという現実をどう受け入れたらいいか困惑していたのだ。

4・8・ 絶望のプラン B

「くっ！ まだまだ！ プラン B、用意！」

將軍はぐつと齒を食いしぼり、恐怖心を押さえこんで叫ぶ。

兵士たちは一斉に塹壕に逃げ込み、草原には歩くジェイドだけが残される。気がつくとも將軍もユリアを残して穴に飛び込んだ。

直後、ジェイドの足元から漆黒のオーラが次々と立ち上がり、ジェイドに巻き付いていく。どんどん闇に飲まれていくジェイド……。

「ハッハッハ——！ あの闇の中では誰もが正気を失う。精神を蝕む闇、奴がどれだけタフでもこれに耐えられる人間などおらん！」

將軍は塹壕から様子を覗きながら勝ち誇った様子で叫ぶ。

直後、真紅の巨大な魔法陣がジェイドの上空に輝いた。それは莫大な魔力を受け、パリパリと周囲にスパークを放つほど高エネルギーが充填されている。

「とどめじゃ！ 焼き尽くせ！」

將軍がそう叫ぶと魔法陣はジェイドめがけて一気にはじけ、閃光が天地を覆いつ

くした。

ズーン！

激しい衝撃波が大地を、ユリアを襲い、生えていた木々は次々となぎ倒されていく。

巨大なキノコ雲が立ち上り、熱線を辺りに振りまきながら高く高く舞いあがった……。

熱線が降り注ぐ中、将軍はニヤニヤしながらそーっと塹壕から顔を出す。これはオザッカ軍最大の攻撃手段であり、それを直撃させた以上勝利にはゆるぎない自信があったのだ。

しかし……、キノコ雲が晴れていった中、将軍が目にしたのは無傷のジェイドだった。

まるで何事もなかったかのようにジェイドは焼け野原で佇たたずんでいる。

「え……？」

将軍は言葉を失う。精神を乱し、そこに最大の爆撃を加えた。もうこれ以上の攻撃方法はないし、そもそもあの直撃を受けて無傷な理由が分からない。そんな人間

はいるはずないのだ。

兵士たちも塹壕から顔を出し、どよめきが上がる。みんな無傷なジェイドに驚き、底知れぬ恐怖に顔を青ざめさせていた。

「ジェイドそろそろいいわよー」

ユリアは楽しそうに声をかけた。ユリアも爆発の衝撃を受けたはずだったのに何のダメージもおっていない。將軍はこの二人のあまりの異常さに、湧き上がる恐怖心を抑えきれず、歯をガチガチと鳴らした。

ジェイドは、ボン！ という爆発を起こし、ドラゴンへと変化する。

將軍も兵士も目を疑った。いきなり現れた、巨大な翼を翻すひろがえ威風堂々とした巨体。それは厳ついウロコに巨大な鋭く光る爪、まるでこの世の者とは思えない伝説級の威容だった。

あわわわわ……。

真っ青になる將軍。

なるほど、彼はドラゴンだったのだ。小賢しい人間の攻撃など効くわけがない。

「も、もうダメだ……」

將軍はへなへなと、塹壕の中にへたり込んでしまう。

ギョワアアア！

ジェイドは重低音の咆哮を一発、二万人の兵士たちは圧倒的な迫力に威圧され戦意を喪失した。

雄大な翼を大きく天へ掲げると、ジェイドは太い足で一気に空へと跳び上がり、バサツバサツと翼をはばたかせる。

兵士たちはパニックに陥った。ドラゴンはかつて街を一息で灰燼かいじんに帰したらしい。そういう伝説は皆、子供の頃から聞かされて知っている。もはや逃げる以外考えられなかった。

ジェイドは上空から逃げ回る兵士たちを睥睨へいげいすると全身を青白く輝かせ、ギユアアア！ という咆哮と共に兵士たちに衝撃波を放つ。

衝撃波は兵士たちを直撃し、地響きが響き渡った。兵士たちは無様に吹き飛ばされ、もんどりを打って転がっていく。

ひいひい……。

將軍は自慢の軍隊が壊滅してしまったことに言葉を失い、冷や汗をたらたらと流

す。伝統あるオザツカの軍隊を任されて十数年、誇りをもって今までやってきたが無様にも壊滅されてしまったのだ。

相手がドラゴンであったとしても、それなりの戦い方があったに違いない。それを見抜けず、慢心して壊滅させてしまった失態はとても許されないし、一番自分が許せなかった。

將軍は意を決すると塹壕を飛び出し、剣を抜いてユリアに駆ける。

せめて大聖女だけでもうち滅ぼしておかねばオザツカの臣民に、君主に顔向けができない。

將軍は筋骨隆々としたたくましい腕を振り上げ、

「ソイヤ——！」

と、の掛け声とともに、目にも止まらぬ速さでユリアに剣を振り下ろした。

ザシュツ！

剣はユリアの肩口から斜めに袈裟切りにバツサリと切り裂いた。

將軍は肉を切り、骨を断つ手ごたえをしつかりと感じながら最後まで剣を振り抜く。まさに歴戦の勇士による見事な剣さばきだった。

4・9・東京には負けない

ぐはぁ！

だが、直後に血を吐いて倒れたのはなんと將軍。

見ると、將軍の身体が切り裂かれ、血が噴き出している。

「な、なぜ……」

理解できず荒い息でうつろな視線をユリアに向けた。

ユリアはそんな將軍を見下ろし、

「ごめんなさい、私、神なの。神に人間の攻撃なんて効かないわ」

と、憐れむような視線を投げかける。

ユリアはダメージを反転する設定を自分の体にかけていたのだった。

「か、神……？ 化け物め……」

將軍はそうつぶやくとガクツと意識を失う。

「あら、死なれちゃ困るわよ」

ユリアはそう言うのと、將軍の身体データを斬られる前の状態に戻した。



ユリアは將軍を連れてオザツカの宮殿に戻る。そして、將軍に君主をはじめ首脳陣に対して敗戦を報告させると、

「無条件降伏してね。それともまだやる？」

と言ってにこやかに笑う。

君主たちは渋い顔で顔を見合わせるが、軍は全滅、ドラゴン相手に勝つ算段など見つからない。もはや降伏する以外なかった。

君主はがっくりと肩を落とし、無条件降伏の書面にサインをする。
こうしてユリアはあつという間にオザツカを降伏させたのだった。



ユリアたちは王都へと飛んだ。

穏やかな温かい日差しの中、伸び伸びと気持ちよく高度を上げていく。

「ジェイド、お疲れ様」

ユリアはジェイドの手を取って言った。

「あのくらい大したことは無い」

「でも、ジェイドのおかげでとんとん拍子で話が進んだわ」

「強さでいったらユリアの方が強いだろう。なんたって神の力がある」

「強いだけじゃダメなのよ。『大聖女が強かったです！』って言ったって誰も信じないけど、『ドラゴンガー！』って言ったならみんな納得するもん」

「そう言うものか？」

「そうよ」

そう言いながら、ぽっかりと浮かぶ白い雲をのびやかに越えていく。

「ねえ？」

ユリアは微笑みながらジェイドを見つめ、続ける。

「この星の立て直しが終わったら、結婚しない？」

「け、結婚？」

いきなりの提案にジェイドは目を丸くする。

「嫌？」

ちよっと寂しそうに聞くユリア。

「も、もちろんうれしいが……、我は龍、神様と結婚だなんて……」

「そう言うの気にしないの！　ちゃんとパパとママにも会わせたいし、二人を祝ってもらいたいの」

「そうだな、ご挨拶しないと……」

ジェイドは緊張した表情をする。

「ふふっ、きつとパパもママも喜んでくれるわ」

ユリアは満面に笑みを浮かべる。

「だといんだが……」

「結婚式は……、そうね、小ぢんまりと身内だけで王都のレストランでやろうかしら？」

「ユリアに任せるよ」

「司会はヴィーナさんをお願いしようかしら？」

「神様の神様に頼むの？　それはまた破格だな」

「受けてくれるといいなあ」

そんなことを話していると遠く眼下に王都が見えてきた。

「私の計画だと、王都もそのうち東京みたいになるのよ」

ユリアは王都をじっと眺めながら言う。

「五十階建てのビルをたくさん建てるの？」

「そう、あの辺は全部高層ビルで埋めるのよ。そして、高速道路をズドーンと真っ直ぐに。首都高速みたいにクネクネっていうんじゃないくてズドーンとね」

「ハハハ！ 都市計画だね、楽しそうだ」

「ふふっ、東京には負けないわ」

ユリアはニヤッと笑った。



「オザツカ倒してきたわよー」

ユリアは王宮に戻ってくると、バーンと会議室のドアを開けて上機嫌に言った。

「えっ!? もう？」

目を丸くするアルシェ。

「はい、無条件降伏の書面よ」

ユリアはアルシェにファイルを渡し、席に座るとポットからカップに紅茶を注いだ。

「え？ 抵抗……されなかった？」

アルシェが恐る恐る聞く。

「ジェイドがね、兵士二万人全員ぶっ倒したから諦めたみたい」

「全員!？」

アルシェは額に手を当てて目をつぶった。

「やっぱり『全力でやって負けた』と思ってもらわないと、なかなか統治は進まないからね」

「殺しは……してないよね？」

「ジェイド、大丈夫よね？」

「手加減したから大丈夫だろう」

ジェイドは淡々と言う。

アルシェは二万人相手でも手加減が必要だ、というジェイドの破壊力に思わずゾツとした。

「占領軍の派遣と、事務方の協議の方、頼んだわよ」

ユリアは宰相に向かって言う。

「はい、わかりました……」

宰相はそう言うと、目をつぶって大きく息をつく。そして、ファイルをいくつか取って、足早にどこかへと出て行った。

4・10・ 喰われる腕

オザツカ軍がドラゴンに壊滅させられた噂は全世界に一気に広まり、サヌークもサグも降伏を申し出てきた。敗北してから無条件降伏するよりは、交渉の余地を残したいとの判断だろう。

これで世界統一は実現してしまった。もちろん、条件交渉や法制度の整備など、やる事は山積みではあるが、ユリアとジェイドの仕事はもう終わりである。

後はユリアが描いた絵通りに、新しい民主主義への移行を淡々とやってもらうだけだ。

会議が終わり、ユリアが紅茶をすすっていると、文官が入って来てアルシェに何かを報告し、アルシェは腕を組んで悩みだした。

「アルシェどうしたの？」

「ダギユラにおかしな部屋があるんだって」

「おかしな部屋？」

「宮殿の地下の部屋が、何をやっても真っ暗なんだって。ランプで照らしても魔法

で照らしても闇が広がっているだけで不気味なので、接收部隊が困ってるって」

ユリアはジェイドと顔を見合わせる。不思議なものは神の力の影響だろう。

「分かった。調査に行ってくるわ」

ユリアはニコツと笑って言った。

「ちよ、ちよっと待つて。テロリストのワナかもしれない。怪しい物を見つけたらシアン様に連絡を入れるって話だったじゃないか」

「暗いだけなんでしょ？　すぐさま危険って訳じゃないわ。シアンさんだって忙しいんだから気軽に連絡なんてできないわ」

「いや、でも……」

「時間止めて中を調査するだけ。それで変なのがあったら報告しましょ」

ユリアは気軽にそう言うのとジェイドと共に宮殿に跳んだ。

地下の廊下を歩いていると黄色と黒の非常線が貼られた区画が見えてくる。どうやら奥の部屋がそのおかしな部屋らしい。

ユリアは時間を止めると非常線をくぐり、部屋のドアを開ける……。

確かに中は真っ暗で何も見えない。いろいろと試したが、光を無効にする設定が

施されているらしく何をやっても闇のままだった。

「テロリストめー……。どうすんのこれ？」

「これはダメだ。シアン様に報告だ」

ジェイドは首を振る。

ユリアはそんなジェイドの言葉を見無視して、室内のデータをツールで解析していく。すると、そこに見覚えのある物が浮かび上がってきた。なんと『蒼天の杖』が空中に浮いているのだ。

「えっ!? なんで私の杖がこんな所に!？」

ユリアは思わず部屋に駆けこんでしまう。

「ユリア、ダメだ！」

ジェイドはそう叫んだが、ユリアは暗闇の中ツールで位置を把握し、手を伸ばして杖をつかむ。

直後、ぼうっと闇の向こうに何かが浮かんだ。

ウェーブのかかった金髪の少女が、まるでスポットライトを浴びたかのように光をまといながらふわりと浮いている。

そしてユリアを見てニヤリと笑ったのだ。

「あ、あなたはルドヴィカ!？」

ユリアは急いで逃げようと思ったが、ルドヴィカの隣に誰がいる……。

ユリアが目を凝らすと、それはジェイドだった。

「えっ!? な、なんでジェイドが……?」

呆然とするユリア。

そしてルドヴィカは挑発的な表情でジェイドのシャツのボタンを外し始める。

ユリアは啞然とした。前管 アドミニストレーター 理者でありテロリスト、そんな彼女がなぜジェイ

ドの服を脱がすのか？

ユリアは逃げる事なんてすっかり忘れて、ルドヴィカの指先を見つめてしまう。

ルドヴィカはジェイドの胸をはだけさせると、ジェイドの厚い胸板をまさぐる。

そして、背伸びをするとなんとジェイドにキスをしたのだ。

ユリアの中で何かがプツンと切れる。逃げなきゃいけないと分かっているのに頭に

血が上ってしまっていた。

そして、対テロリスト用ツールをずらりと起動すると右手をルドヴィカに向ける。

「ジェイドから離れなさいよ！」

ユリアはそう叫ぶと一斉にルドヴィカにハッキングを仕掛けた。漆黒のコードが何本もルドヴィカめがけて飛びかかる。

しかし、ルドヴィカはそれを待ってたかのようにニヤッと笑う。

そして、コードがルドヴィカにとりついた瞬間、攻撃ケーブルを逆にたどってユリアの右腕を吹き飛ばした。

うぎゃっ！

ユリアは悲痛な叫びを上げ、もんどり打って倒れこみ、右腕はびたんと言を立てて転がった。

ルドヴィカはそんなユリアをニヤニヤ見下ろしながら、コードを引っ張り、転がるユリアの右腕を引き寄せる。そして白くすべすべとした右腕をジロジロと眺め、次の瞬間、なんと美味しそうにかじりついたのだった。

口の周りから鮮血をたらしながらクチャクチャと音を立て、右腕を食うルドヴィカ。その猟奇的な姿にユリアは真っ青になって逃げだそうと立ち上がる。

しかし、ルドヴィカは右腕をくわえながらハッキングコードをユリアに次々と撃

ち込んできた。

きやああ！

ユリアは何本か打ち返せただけで次々とコードの餌食となる。

コードを撃ち込まれた部分は赤黒く変色し、ユリアは身体のコントロールを失っていく。

「やめてえ！」

ユリアは叫びながら自らの愚行を痛烈に後悔した。神だなんて思いあがったあげく、いざとなったら手も足も出ない。まさにテロリストの格好の餌食だった。

「お前の身体のリソースは、ありがたーく使わせてもらうわ。キャハッ！」
ルドヴィカはうれしそうに笑った。

4・11・ 黄金色に輝く星

ズン！

いきなり激しい閃光が部屋に走り、強烈なエネルギー弾がルドヴィカを貫いた。
ぐはぁ！

胸に大穴が開き、ガクツとひざをつくルドヴィカ。

「そこまでだよっ！」

水色の髪をゆらしながらシアンが部屋に飛び込んでくる。

そして、右腕を黒いワイヤーの束のようなハッキングツールに変形させ、緑色に光らせた。

「ちっ！ もう少しだったのに！」

ルドヴィカはそう言い残すとフツと消えていく。

「までっ！ あぁ……」

シアンはハックツールを撃つ体勢をゆるめ、肩を落とした。

そして、大きく息をつき、ユリアを助け起こす。

「あらあら、ずいぶんとやられたねえ……」

そう言いながら失った右腕を再生させていく。

「ご、ごめんなさい……」

ユリアは涙をポロポロ落としながら謝る。

「戦っちゃダメって言ったよ」

シアンはジト目でユリアを見た。

「ユリア、大丈夫か？」

ジェイドが駆け寄ってくる。

「あれっ!? ジェイド? 部屋の外に……いたの?」

「え? あのまま外でシアン様を呼んでたんだが?」

「じゃあ……、あのジェイドは……?」

「幻覚攻撃だね。ジェイドの映像で動揺を誘ったんだな」

シアンは渋い顔をする。

「そ、そんな……」

「奴らは狡猾だ。強いだけじゃない、そういうからめ手にも長けてるんだ」

ユリアはあっさりとテロリストの術中にはまった間抜けさに、ガックリと肩を落とした。

「あいつはユリアの身体のリソースを得て多くの権限を獲得しちゃった。ちよつと厄介だよ」

シアンは腕組みをして何かを考える。

すると、シアンはハツとした顔をしてユリアとジェイドの腕をつかむと空間を跳ぶ。

気がつくと、ダギユラの街の上空を飛んでいた。直後、激しい閃光が天地を覆い、ズズーン！ という爆発音が響いて、下の方で街の中心部が吹き飛んでいるのが見えた。

「あぁっ！」

ユリアは真っ青になる。

やがて立ち昇ってくる黒いキノコ雲。

自分が迂闊な行動をしたばかりに大変なことになってしまった。胸がキュツと
なって目の前が真っ暗になる。

するといきなり空中に映像が浮かび上がった。

「ハーイ！ みなさん、こんにちは！ キャハッ！」

上機嫌に金髪をゆらしながら手を振るルドヴィカだった。背景にはずらりと並ぶ円筒、なんとジグラートに居るらしい。

ユリアは啞然とした。テロリストがこの星の心臓部にいるのだ。絶体絶命の大ピンチである。

「どうやってそこに行ったんだ？」

シアンは険しい表情でルドヴィカをにらむ。

「あら、田町の方なのにそんなことも分かんないの？ キャハッ！」

ルドヴィカは楽しそうに笑う。

ユリアの権限を奪った訳だから、海王星に行く事はルドヴィカにもできるだろう。だが、それは海王星の衛星軌道上のコントロールルームまでである。海王星の中にあるジグラートにこんな短時間で行けるわけなどないのだ。

本当にそこにいるのだとしたらさらに上位の権限を得たという事であり、それは一万個の地球全体に対する脅威を意味している。

もちろんシアンは宇宙を統べる存在の一翼である。今すぐジグラートに跳んでルドヴィカを吹き飛ばすことなど簡単なのだ。しかし、それを知りながらルドヴィカは姿をさらしている。何らかのワナがあると考えの方が妥当だった。ルドヴィカのカラクリを解かない限り動けない。

「これ、なーんだ？」

そう言っただけに新たな映像を展開するルドヴィカ。そこには黄金色に輝く美しい星が映っている。

シアンはギリッと奥歯を鳴らした。

やがて映像がパンをして、衛星軌道上に展開されている巨大な施設が映し出される。

それはいぶし銀の金属で覆われた、たくさんの大きな円筒モジュールで構成されており、そこから広大な放熱パネルがまるで翼のように多数展開されている。そして、少し離れたところには薄い金属フィルムでできた日よけが全体を太陽から守っていた。

映像の奥の方をよく見ると、この施設が次々と連なっているのが分かる。巨大な

惑星を一周しているのかもしれない。その異常な規模は海王星のジグラートが霞むくらいだった。

4・12・ 消える六十万年

「金星だ……」

シアンは渋い顔をしながら言う。

「金星……?」

ユリアはその壮大な光景に見入りながら答える。

「海王星を作り出している施設だよ。テロリストがたどり着けるような場所じゃないはずなんだけどなあ」

シアンは腕を組み、首をかしげる。

直後、モジュールが閃光に包まれ、爆破された。

「キャハッ!」

うれしそうな声が響き、一瞬ユリアたちの周りの風景が四角形だらけのブロックノイズに埋まった。

「きゃあ!」

ユリアはその異常な事態に青ざめて叫ぶ。この星の根幹が揺らいでいる。それは

極めて深刻な事態だった。

「この星のバックアップデータはすべて破壊した。もう復元はできないよ」

ルドヴィカはドヤ顔で言う。

ジグラートを破壊されてもバックアップデータさえあれば復元は可能である。しかし、金星の設備を吹き飛ばしたとなると事は重大だ。ジグラートにしかもうこの星のデータは残っていない。ユリアはこの深刻さに目の前がくらくらした。

「何がやりたいの？」

シアンが聞く。

「この星の自治権を要求する！」

ルドヴィカはこぶしを握りながら叫んだ。

「なるほど、この星を人質に取ったんだ……。だが断る！ きゃははは！」

シアンはニコニコしながら答えた。

ルドヴィカはムツとしてシアンをにらみ、こぶしを赤く光らせると近くの円筒にエネルギー弾を放った。

ズン！

激しい音がして円筒が吹き飛び、ユリアたちの上空から東側一帯の空が真っ黒になった。さっきまで青空が広がり、白い雲が浮いていた空はまるで異界に繋がってしまったかのように光を失い、ただ漆黒の闇が広がるばかりだった。

「自治権が得られるまでこのコンピューターを次々と壊すがいいんだな!？」
ルドヴィカは目を血走らせながら叫ぶ。

「いいよ？ でも、君も消されるよ?」

シアンはそう言った。

「ダ、ダメです！ 壊されたら困ります!」

ユリアは焦ってシアンの腕にしがみついた。

「そ、そうだぞ！ よーく考えろ！ それに私に危害が及ぶと自動的に金星のどこかがまた爆発するようになってる。下手な考えは止めろ!」

「やれば?」

シアンはうれしそうに即答する。

ユリアもルドヴィカも嘖然とする。数多^{あまた}の命のかかわる貴重で重大な施設を『壊してもいい』とにこやかに言い放つシアン。二人とも言葉を失ってしまう。

「いいか？　ここの施設は六十万年かかって作られているんだぞ？　それを壊されていい訳がないだろ！」

ルドヴィカは焦って吠える。

「んー？　また六十万年待てばいいだけでしょ？」

シアンは首をかしげながら、こともなげに言った。

ユリアは背筋がゾツとした。シアンは本気でそう思っているのだろう。百万個の星々を統べる神々にとってみたら一万个の地球が吹っ飛び、六十万年の成果が失われることも些細なことなのかもしれない。しかし、ユリアにとってはこの星がすべてなのだ。この星が消されてしまうのは絶対に避けなくてはならない。

「よーし、それなら全部ぶっ壊してやるぞ！　本当にいいんだな？」

ルドヴィカは激昂して叫ぶ。

シアンは腕組みをしながら何かを考えている。

ユリアはジッとシアンを見つめる。シアンがこうしている時は裏で何かを行動している時なのだ。

「おい！　何か言えよ！」

ルドヴィカは再度こぶしを赤く光らせ叫ぶ。

半分、青空を失ってしまった地球。ユリアはその漆黒の空を眺め、何かできる事が無いか必死に考える。そしてブレスレットのことを思い出した。

そしてそっと右手をブレスレットにかける。

ルドヴィカが本気でジグラートを破壊しようとしたらこれを引きちぎるしかない。それでこの星は守られるのだ。だが、それはオリジナルな宇宙をこの世界に展開すること。自分の命の保証も何もない無謀な最終手段なのだ。

ユリアの頬にツーツと冷や汗が流れる。

『ねえ、二十秒、時間稼いで』

シアンからテレパシーが届いた。シアンなりに解決策が見つかったらしい。

ユリアは出口が見つかったことに安堵を覚え、ぐっと下腹部に力を込めるとルドヴィカに声をかけた。

「あ、あのお。私、ルドヴィカさんの言うこと分かるんです」

『後十五秒……』

「ちやほやされてきた大聖女に何が分かるって言うんだよ！」

ルドヴィカは酷い形相で叫ぶ。

『後十秒……』

「あー、大聖女は大聖女で苦勞あるんですよ？　ま、それは置いておいてですね、私の話を聞いて……」

『後五秒……』

「あっ！　時間稼ぎだな！　チクショー！　死ねい！」

そう叫ぶと、ルドヴィカはジグラートの外壁に向けて鮮烈な赤い閃光を放った。

4・13・ 輝くデジタルの赤ちゃん

「えっ!？」

悪夢のような光景が展開される。

あと数秒、あと数秒が届かなかった。

画面の向こうでジグラートに大穴が開き、爆発を起こしながら円筒が吹き飛ばされていく。

この地球が消える。多くの命が消える。ユリアは目の前が真っ暗になった。

また失敗してしまった……。

ユリアの失敗が重なり今、全てが崩壊していく。

南側に見えていた広大な海が次々と漆黒の闇に飲まれ、消えていく。この国が、多くの人たちが消え去ってしまうのはもう時間の問題だった。

ユリアはギュッと奥歯をかみしめると、全てを覚悟し、目をつぶる。そして一つ大きく息をつく、右手に神力をこめてブレスレットを引きちぎった。

パン！ パリパリパリ……。

ブレスレットから勢いよく光の微粒子が噴き出し、吹雪のようにユリアたちを覆って黄金色にまぶしく輝く。

光の微粒子は細かな『1』と『0』の形をしており、それが勢いよくユリアたちの周りを飛び回っていた。

「うわあ!」「きゃあ!」

何が起こったのか混乱していると、やがてその一部が集まって来て雲のようになっっていく。

嘸然としてその様を眺めていると、そのうちに雲は空を飛ぶかわいい赤ちゃん天使の姿へと変わり、にこやかに微笑んだ。

その微笑みは優美で慈愛に満ち、心を温かくしてくれる神聖な輝きを放っている。

「えっ……?」

ユリアが思わず赤ちゃんに見入ると、直後、赤ちゃんの顔がいきなり数メートルの大きさに巨大化し、大きく口を開く。

三人があっけにとられた直後、赤ちゃんはユリアをパクリと飲み込み、激しい閃光を放った。

「ユリア——！」

ジェイドが絶叫する。

しかし、その叫びもむなしく、ユリアはバラバラに分解され、光の中へと溶けていったのだった。



シアンとジェイドは海王星のコントロールルームに飛ばされる。

金星はかろうじてシアンの対処で事なきを得たが、ルドヴィカの自爆によって星は失われ、同時にユリアも消えてしまった。

窓の外にはただ、紺碧の海王星が満天の星々の中に美しく佇たたずんでいる。

ジェイドはひどくショックを受け、ただ海王星を眺め、呆然としていた。

シアンはポンポンとジェイドの肩を叩いて言う。

「ユリアはブレスレットであの星を守ったんだよ」

だが、ジェイドには理解できない。

「守った……って、どう守られて、ユリアはどこにいますか？」

「それは……、分からないよ。少なくともこの宇宙からは消えてしまった」

シアンは肩をすくめた。



「それー行ったぞー」「まって、まってー」「キャハハハ！」

子供たちの遊ぶ楽しげな声が聞こえる……。

気がつくとユリアは気持ち良い芝生の上に寝転がっていた。澄みとおる青空に、ぽっかりと浮かぶ白い雲。そして燦燦と照り付ける太陽。
さんさん

ゆっくりと体を起こすと、そこは公園だった。多くの家族連れがピクニックを楽しみ、子供たちがボールを蹴って楽しそうに遊んでいる。

「あれ……？　ここはどこ？」

ゆっくりと体を起こすと、白い建物が見える。見覚えのある建物……。

「えっ!？」

なんとそれは王都の王宮だった。しかし、なぜ王宮が公園になっているのか分からず、ユリアは混乱して二度見をした。

そして振り返って思わず素っ頓狂とんきょうな声を出した。

「はあ!？」

そこには超高層ビルが林立していたのである。

東京で見たビルよりもずっと高く、カッコよいビル群が、その個性を競うあうようにひしめき合っていた。そして、そのビルの間を多くの乗り物が飛び回っているのが見える。まさに未来都市だった。

ユリアは啞然とする。ここは王都、ユリアの星である。しかし、もはや別の星のように見えた。

フラフラと立ち上がり、王宮の方へ歩いて行く。花の咲き誇っていた広大な庭園が今は公園となつて一般開放されているようだった。

王宮の前には銅像が建てられていた。威厳のある高齡の紳士が指先をまっすぐに前にのばした像。それは足元がみんなに触られていて、そこだけツヤツヤに赤銅色に輝いている。

プレートを読んでユリアは固まった。

『初代大統領アルシェ・リヴァルタ 享年85歳』

なんと、この像は老人になったアルシェの像だったのだ。

解説を読むと、百年ほど未来に自分は来てしまったらしい。

「ア、アルシェ……」

予想もしなかった事態にユリアは動揺し、涙をポロリとこぼす。

ユリアがブレスレットを破壊したおかげでこの星は守られ、アルシェはその中で国を盛り立て、今、夢のような発展を遂げたのだ。

素晴らしい発展……それはまさにユリアの描いた理想をはるかに超え、東京すら超えた理想郷となっている。

だが、ユリアが知っている人、パパもママも誰も生き残っていないだろう。ユリアは摩天楼を見上げながら途方に暮れ、

「な、なんなのよ……これ……。ねえ、アルシェ……」

そう言いながら静かに涙を流し、銅像の台座にヨロヨロともたれかかると、アルシェ像の足元をさすった。

4・14・ 絶対神ユリア

「そ、そうだ、ジエ、ジエイドは？」

ユリアは周りを見回したが、転送されてきたのはユリア一人のようだった。目をつぶって必死にジエイドの気配を探ってみても、それらしきものは見つけれない。

「えっ!? 私一人だけ？」

この摩天楼そびえる大都市で、ユリアは一人ぼっちになってしまったことを知り、愕然^{がくぜん}とした。

「う、嘘よね……、まさか」

楽しそうな家族連れ、子供たちが遊ぶ中でユリアは一人呆然として立ち尽くす。

「シ、シアンさん……、そうよシアンさんならどこかにいるはずだわ」

ユリアは心を静め、神の回線を開き、シアンを呼ぶ。

しかし、応答がない。

「そ、そんなはずはないわ！ シアンさん、シアンさん！」

ユリアは心の奥で強くシアンをイメージする。水色の髪をした可愛い女の子、で

も中身は底知れない強さと神秘に彩られた『神様の娘』。六十万年を平気で待てる彼女なら百年程度で消えるはずなどないのだ。

「シアンさん……シアンさん……」

ユリアは感覚を全開にして深層意識の中でシアンのイメージを追う。

すると、覚えがある雰囲気を感じた。

「あっ！」

ユリアは目を開けて辺りを見回す。

すると、初めて会った時のように上空から光をまといながら降りてくる人影が見える。

「シアンさーん！」

ユリアは思わず両手を振って叫び、シアンはユリアの前に着地した。

しかし、降り立ったシアンはいつもと様子が違う。

「ユリア様、お呼びでしょうか？」

そう言いながら胸に手を当てて頭を下げたのだ。その予想外の応対にユリアは困惑しながら聞く。

「えっ？ ど、どうしたんですか？」

「どうと言われましても、ユリア様はこの世界の神であらせられます。私は神に創られた僕に過ぎません」
しもべ

ユリアは困惑する。見た目も声もシアンそのままなのに、中身はシアンではないのだ。

「ちょ、ちょっと待ってください。私がシアンさんを創ったってどういうことですか？」

「この宇宙はユリア様の想いによって生まれ、ユリア様の観測によって事象が確定しています。無限の可能性の中から選ばれた僕しもべの姿、それが今の私です」

シアンはらしくない真面目な顔で言う。

「えっ!? この宇宙は私の宇宙なんですか？」

ユリアは混乱した。さっきまでいた宇宙は誠を中心に回っていた。誠が未確定の所を確定させていき、宇宙の形が作られていたのだ。だが、この宇宙は自分を中心に回っているという。

「私が思ったことがこの宇宙に反映されるって……こと……ですか？」

ユリアは恐る恐る聞く。

「その通りです。頼れる人が欲しいと望まれ、そのイメージとしてシアンという方を選ばれたので私が創られました」

ユリアが作り出した新しいシアン『ネオ・シアン』はクリツとした碧い瞳で淡々と説明する。

「えっ!? じゃあ、誠さんの世界の人とはもう会えない? ジェイドは?」

「私はジェイドという方を知りませんが、私と同じように創ることはできます」

ユリアは愕然とした。この世界は自分の思うがままになるとんでもない世界だった。しかし、それでも誠の世界の人を連れてくることはできないらしい。

「えっ……、わ、私が創ったのじゃなくて、オリジナルなジェイドがいいの!」

「他の宇宙から人を連れてくることは不可能です」

ネオ・シアンは無慈悲に言った。

「そ、そんな……」

ユリアはガクッとひざから崩れ落ちる。最愛の人ジェイドともう二度と会えない。ユリアはこの世界で一人ぼっちになってしまったのだ。

「ジェ、ジェイド……。うっうっうっ……」

ユリアはポロポロと涙をこぼす。宇宙を超えて離れ離れに引き裂かれた二人、もう二度と会うこともできない。

知り合いが一人もいないこの未来都市で、自分はどう生きて行けばいいのだろうか？　いくら本当の神になっても一番欲しい物は手に入らない。そんな馬鹿な事があるだろうか？

しばらくユリアはこの理不尽な世界を恨み、絶望する……。

「そうだ！　おうちにいるかも！」

ユリアはバツと顔を上げた。

ジェイドがアルシェと同じくこの星に残っていたら、今もオンテークのあの棲み処にいるかもしれない。

残された最後の可能性に一縷の望みを託し、ユリアはネオ・シアンの手を取って急いでオンテークの山へと空間を跳んだ。

4・15・ 朽ち果てた二人の思い出

森の上空に瞬間移動してきたユリアたち——。

オンテークは以前と変わらず壮大な火山としての威容を誇り、広大な森の中にそびえていた。百年経っても開発の手は入っていないらしい。

近づいて行くと断崖絶壁に開いた洞窟は崩落し、入り口が埋まっている。

「へっ……!?」

ユリアは両手で口を押さえ、真っ青な顔で震えた。

どう見ても誰かが住んでいるようには見えない。

ユリアはフラフラと埋まった入り口にたどり着くと、崩落している岩のすき間をぬって奥へと進んだ。中はカビ臭くジメジメとしており、長く誰も住んでいないように見える。

神殿まで来ると、カビとホコリで純白の大理石は黒く汚れていた。

「酷い……」

ユリアは肩を落とし、目に涙を浮かべながらトボトボと神殿の奥を目指す。

扉が朽ち果て、床に散乱し、無残な姿をさらしているのを乗り越え、突き当りの部屋まで来たが……、そこただの廃墟だった。

二人の想い出のベッドはただの朽ちた木片となり、原形をとどめていない。

ユリアはヨロヨロと近づき、そつとその木片を拾い、そしてグツと握りしめ嗚咽を漏らした。

二人の大切な思い出は朽ち果て、ジェイドはこの星にはいないのだという事が分かってしまった。

「結婚するって……約束……したのに……」

ユリアはもう身体を支える事も出来ず、そのまま木片の上に崩れるように倒れ込むと、大声で泣く。

しばらく洞窟の廃墟にはユリアの悲痛な泣き声が響き渡っていた。



「あのお……」

ユリアが泣き疲れ、呆然自失していると、ネオ・シアンが話しかけてきた。ユリアはうつろな目でネオ・シアンを見る。

「何かヒントをもらってたりしないですか？」

「ヒント？」

「もしですね、私の元となった方が私と同じ考え方をする人であれば、こんな状況を放置しないと思うんですよね」

ネオ・シアンは首をかしげて言う。

ユリアは必死に考えてみるが、オリジナルのシアンは『ブレスレットを引きちぎったらどうなるか知らない』と言っていたのだ。ヒントなど残さないだろう。

「そんなのは……聞いてないわ」

ユリアは首を振った。

だが、ここでふと違和感がよぎった。シアンは好奇心旺盛で、研修期間中もいろんなチャンスを逃さず知識を増やそうとしていた。だとしたら、『知らないから何もやらない』なんてことあるだろうか？ 何か少しでも情報を集められるような工夫をしてる方が妥当ではないだろうか？

この星が新たな宇宙になる可能性があるなら、なった後に情報を収集できる仕組みを残しておいてもおかしくない。

「そうよ！」

ユリアはガバッと飛び起きた。

何かを残すとしたらどこか？ それは長く人目に触れない所、そして、ユリアが必ず訪れる所……。ここだ。ここ以外考えられない。

ユリアは神の力で部屋全体をくまなくサーチしていく。部屋が終わったら廊下、キッチン、そして神殿。最後に残された手掛かり、それにすぎるように洞窟の中を隅々まで必死にスキャンする。

しかし、何もそれらしきものは見つからない。

「絶対何かあるのよ！」

ユリアは自らを鼓舞し、再度丁寧を探し始める。壁の中に天井に床に大理石のままで丁寧に調べつくしていった。

だが、何時間かけても何も見つからなかった。

ユリアはうなだれ、泣きべそをかきながら立ち尽くす。

「だ、大丈夫……ですか？」

ネオ・シアンが声をかける。

ユリアはバツと顔を上げると、

「こんな汚いから気分が滅入るのよ！ クリーナッブ 生活浄化！」

そう言って両手をバツと上げると、神殿全体に全力の浄化魔法を放った。

神殿全体がブワツとまばゆい輝きに包まれ、長年染みついた汚れが分解され、浄化されていく。

と、この時、壇上の供物台の上の空中に、光り輝く立方体が見えた。

「へっ？」

ユリアは一瞬目を疑った。なぜ、空中に浄化される場所があるのか？

光がおさまるとそれは見えなくなったが、よく見ると、その部分だけ背景の模様が少しずれて見える。光学迷彩だった。

4・16・ 宇宙の特異点

「あったわ！」

ユリアは飛びあがらんばかりに喜ぶと、神の力を使ってつついてみる。

すると、ビシュワァー！ という炭酸がはじけるような音がして立方体が姿を現す。それは淡く青色の光を帯びた水槽のような、明らかに異質な存在だった。ガラスのような透明な立方体はまるで深い透明な湖の様な澄み通った青をたたえ、中心部は深い闇に沈んで見える。

ユリアがその美しい青に見入っていると、立方体はピコーンという電子音を放ち、激しい閃光を放ちながらビュオオオオと激しいつむじ風を巻き起こした。

「うわぁー！」

ユリアは顔を覆ってしゃがみこむ。

立方体はするすると降りてきて供物台の上に乗る、風がやむ。

ユリアとネオ・シアンは顔を見合わせ、お互いうなずくと、そーっと立方体に近づいた。

すると、立方体の上に小さなシアンの立体映像が現れる。

「やあ！ シアンだよ！ ユリアは元気？」

シアンは腰に手を当ててニコツと笑って言う。

その、相変わらず空気を読まない発言に、ユリアはムツとして、

「元氣な訳ないじゃない……」

と、口を尖らせた。

「この箱は通信装置、僕の宇宙とユリアの宇宙を繋げちゃうぞ！ 必要な事は二

つ。はい、メモの用意して！」

「えっ!? メ、メモって!?」

慌てふためくユリアに、ネオ・シアンがペンとノートをすつと差し出す。

「ありがと。凄く用意いいのね？」

「そのようにユリア様がお創りになりましたので」

うやうやしく答えるシアン。

「では、一つ目！ ユリアの世界が僕の宇宙と同じ構造をしてるって認識して。つまり、金星があつて、海王星があつて、ジグラーがあつて、そのコンピュー

ターがその世界を作っているとしつかりと認識するんだ。ユリアがそう認識しさえすればその宇宙も僕の宇宙と同じ構造に確定する。互換性がでるんだね」

「に、認識……するだけ……なの？」

ユリアはメモを取りながら首をかしげる。『神様の仕事は認識すること』という概念がまだピンとこない。

「続いて二つ目！ この箱の上の穴からブラックホールを入れて。以上！ 待つてるよ！」

そう言うとき映像のシアンは笑顔で手を振りながら、フツと消えていった。

「あつ！ ちょっと待って……」

あっけなく終了した映像にユリアは戸惑う。

「ブラックホール入れるだけで通信って、シアンさんってすごい方ですね……」
ネオ・シアンは感心している。

「ブラックホールって……何？」

ユリアは眉をひそめて聞く。

「宇宙の特異点ですよ。地球をコインの大きいくらいにギュッと潰した奴です」

「いやいやいや、そんなことできないですよ」

ユリアはあまりに常識はずれな話に思わずのけぞる。

「あ、作らなくてもいいですよ。きっと宇宙にはたくさんマイクロブラックホールが漂っているのです、それを一つ捕まえれば」

「え？ ど、どうやって捕まえるんですか？」

「ユリア様は神様です。ここにマイクロブラックホールがあるはずだ、と本気で思いこめばそこにやってくるんだと思いますよ？」

「そ、そういうもののなの？ でもそれって……、すごく危険じゃないですか？」

「そうですね、地面に落としたりこの星全部吸い込まれちゃいますからねえ」

ネオ・シアンはうれしそうに言う。

ユリアは背筋にゾツとするものを感じた。しかし、リスクのない挑戦はない。大きく息をつくと言った。

「じゃあ、手伝ってくれる？」



ユリアはまず、互換性が出るように必死に宇宙を認識する。ジグラーで見たあ

の光コンピュータのきらめきが自分を洞窟を、オンテークの森を、森に息づく動物たちを形作っていることを丁寧に想像し、認識した。

一通り認識し終わると、海王星まで行って確認をする。

海王星はどこまでも澄みとおる深い碧をたたえ、大宇宙にたたずんでいた。ユリアは静かにその様子を見つめ、そしてジグラーの内部の動作も感じてみる。

自分が作る世界、間違いがあれば世界そのものが簡単に滅んでしまうだろうし、ジェイドとも二度と会えなくなってしまう。

ヴィーナに見せてもらった元居た世界のジグラーとの差異がないか、思い出せる範囲で必死に確認を続けていく。そして、最後に大きく息をつくとき、ユリアはゆっくりとうなずいた。

4・17・ ジェイドの覚悟

続いて神殿に戻ってブラックホールを呼ぶ。

スウ——、……、フウ——。

スウ——、……、フウ——。

ユリアは立方体の前で両手を向かい合わせにし、深呼吸を繰り返すと深層意識に自分を落としていく。

宇宙が生まれた時にたくさん作られたというマイクロブラックホール。蒸発せずに残っているものをイメージし、それがユリアの手の間にやってくることを認識する。仮想現実の世界に本物のブラックホールを呼ぶわけなので、AR（拡張現実）の逆版のような特殊処理が必要であるが、この辺りは最終形態を認識すれば自動的に補完されていくだろう。何しろユリアは神なのだ。

薄目を開け、深層意識にどっぷりとつかり、虚ろな目で宇宙とシンクロするユリア。

やがて激しい閃光がバチバチとユリアの両手の間に瞬き、直後、ブウンという重

低音が響いて漆黒の球が手の間に生まれた。その玉の周りは強烈な重力で空間が歪曲し、レンズのように向こう側がゆがんで見えている。

ユリアは、落とさないように細心の注意を払いながら、そっと立方体の上に開いた穴にブラックホールを合わせ、ゆっくりと下ろしていく。

すると、ボシュッ！ という低音が響き、激しい光を放った。

「きゃあ！」

目がくらんだユリアは思わずのけぞる。

バリバリバリ！ と、激しい衝撃音を放ちながら閃光を放ち続ける立方体。一歩間違えたらこの星全体が吸い込まれかねない究極の存在であるブラックホールが放つ衝撃に、ユリアは思わず冷や汗が浮かぶ。

「ブラックホールの事象の地平面の向こうは、全ての宇宙の根源に繋がってるんですよ」

ネオ・シアンはうれしそうに説明してくれる。

なるほどそういう理屈だというのは良く分かったが、全てを押しつぶす究極の存在をどうやって活用するのかユリアにはさっぱり分からなかった。

やがて徐々に穏やかになっていく立方体。光がおさまると、供物台の上には四次元超立方体がウネウネと動いていた。それは立方体の中から小さな立方体が現れて新たな大きな立方体に変形していくのを繰り返す、奇妙な物体であり、ユリアは怪訝そうにそれを見つめる。

いきなり、ガッガ——ッ！ と、ノイズが上がった。そして、

「ユ、ユリア、いるか!？」

と、ジェイドの声が響く。

「ジェ、ジェイド——!」

ユリアは思わず絶叫した。

そして、

「ジェイドおお……」

と、呻きながら涙をポロポロとこぼす。

「ユリア！ 無事か？」

「うっうっうっ……。ぶ、無事なんかじゃないわ！ ジェイドのいない人生なんて生きていけない」

そう言って顔を覆った。

「そ、そうか……」

「ねえ、助けて……ジェイド」

ユリアは疲れ果て、うなだれながら絞り出すようにつぶやく。

ジェイドは少し考えると隣のシアンに頼む。

「何とかして我をユリアの所へ送ってもらえませんか？」

「この通信はブラックホールを経由して送ってる。人を送るのは到底無理だね」

シアンは肩をすくめる。

「この世界は情報で出来てるんですよね？　だったら我を構成してるデータを伝

送すれば行けませんか？」

「理屈上はそうだよ。でも、受信側に身体を再構成するシステムの開発が必要だし、データ量が膨大でこんな音声通信経路で送るのは現実的じゃない」

シアンは首を振る。

「なら、魂だけ送ってください」

ジェイドはシアンをまっすぐに見つめ、頼み込む。

「えっ!? 身体を捨てるってこと!?」

シアンは驚く。

「向こう側でユリアが作った身体に私の魂を送れば、実行行けることになりますよね?」

「そうだけど、身体は魂の容れ物。容れ物が変わったら魂も変質しかねないよ? 自我が崩壊しちゃうかも」

シアンは渋い顔をする。

「大丈夫です。どんな身体に入っても私は我、ユリアを愛する気持ちは変わりません」

ジェイドは真剣な目で言い切った。

「宇宙を渡る魂の転送なんてやったこと無いよ? 失敗して死んじゃうかもよ?」
「ユリアがいない暮らしなど死んだと同じです。問題ないです」

爽やかに笑うジェイド。

「ジェ、ジェイドお……」

話を聞いていたユリアは、涙をポロポロとこぼしながらジェイドの覚悟に震える。

「分かった！面白いじゃないか」

シアンはニヤツと笑う。そして、ユリアに聞く。

「と、いう事だ。ユリア、魂だけのジェイドは受け入れられるか？」

「え？」

いきなり振られてユリアは悩む。自分の創った身体にジェイドの魂が入ったら、それは本当に今までと同じジェイドになるのだろうか？ 変わらず愛しあう事はできるのだろうか？

だが、彼は自我崩壊のリスクを承知で宇宙を渡ると言っているのだ。その彼の覚悟があればうまくいくに違いないし、自分もその覚悟に応えたい。

ユリアは手で涙をぬぐうと大きく息をつき、言った。

「大丈夫です。お願いします！」

4・18・プリンセスのキス

シアンはウンウンとうなずくと、

「じゃあ、ジェイドの身体はお願いできるかな？」

と、聞く。

「な、何とか……。こっちに私の創ったシアンさんがいるので、手伝ってもらって創ります」

「へっ!? 僕のコピー? なるほどなるほど……。じゃあ、そっちのシアンちゃん、手伝ってくれるかな?」

ネオ・シアンはいきなりシアンに呼ばれて緊張した面持ちで答える。

「は、はい! 頑張ります!」

「きゃははは! 同じ声してる!」

シアンはうれしそうに笑った。

「オッケー! じゃ、二人でジェイドの身体創っておいてね。ちょっとなら自分好みに改造してもいいよ?」

シアンは余計な事を言う。

「そんな事しません！ 忠実に思い出して創ります！」

ムツとするユリア。

「ふふっ、夜に強くしとくのも……いいよ」

ニヤニヤしながらさらに余計な事を言うシアン。

「えっ……？ よ、夜……？」

ユリアは黙り込んで、微妙な空気が流れる。

「ちよ、ちよっと待って、何か不満があるなら……改造する前に我に教えてくれ」
ジェイドが焦る。

「ふ、不満なんて……、ない……のよ？」

歯切れの悪いユリア。

「その辺は二人で調整して！ じゃあ、そっちのシアンちゃん、これから設計図送るからちよっと見てみて」

「わ、わかりました！」

その後、ネオ・シアンはシアンから伝送に必要な機器の開発の説明を受けていた。



数日後、ユリアの準備する神殿にはベッドが用意され、ジェイドの身体が横たえられていた。

ジェイドの頭には脳波を測る時に使うような電極が設置され、コードで四次元超立方体へと繋がっている。

「ハーイ！ 準備はいいかな？」

シアンの声が響く。

「はい、言われたように準備しました」

ユリアが答える。

「では、接続チェック！」

そう言うと、立方体がウネウネしながら虹色にキラキラと光り、ジェイドの身体が淡く蛍光する。パシパシパシと、シアンが画面をタップしている音が静かな神殿にかすかに響いた。

「ふふっ、ユリア、やるわね」

シアンはニヤッと笑う。

「え？ 何もしてませんけど？ これが私の記憶の中のジェイドです」

ユリアはうれしそうに答える。

「はははっ、まあ、ジェイドも納得してるなら口出すのは野暮だな。じゃ、行くよ！」

シアンがそう言うと、立方体はバリバリと音を立てながら激しく閃光を放ち始めた。

ユリアは手を合わせて無事な成功を祈る。

しばらく神殿には激しいノイズが響き続け、ユリアは微動だにせずただ祈り続けた。宇宙を越え、ブラックホールからやってくる愛しい人の魂。この想像を絶する挑戦が今、目の前で行われている。

「成功する、成功する、成功する、ジェイドがやってくる……」

ユリアはブツブツと唱えながらただひたすらに祈り続けた。

やがて音が止み、

「ハーイ、終わったよー」

と、シアンの声がする。

ユリアはバツと立ち上がり、ジェイドを見つめる。しかし、ピクリとも動かない。そっとジェイドの手を取って様子を見るが、手にも全く力が入っていない。

「ダメです！ ジェイド、動かないわ！」

ユリアは青くなって叫ぶ。

「王子様が目覚めるにはお姫さまのキスがいるんだよ」

シアンはニヤニヤしながら言う。

「キ、キス!？」

目を丸くするユリア。

ネオ・シアンは気を利かせて目をつぶって向こうを向いた。

ユリアは大きく息をつく、ジェイドの頬を心配そうにそつとなで、ジェイドの顔をじっと見つめた。すると、薄目が開いて目が動いたのを見つける。

ユリアはうれしそうにニコツと笑うと、静かに唇を合わせた。ジェイドは両手でユリアを抱きしめ、会えなかった時の寂しさを埋めるように舌を絡め、それに応えるようにユリアも激しくジェイドを求める。

会えなかったのはたった数日、でも、それは二人にとっては不安と寂しさに襲わ

れる耐え難い時間だった。二人は時間を忘れ、お互いの愛を確認し合う。

ネオ・シアンはシアンに、

「成功しました」

と、小声で伝えると、気を利かせて神殿を離れた。

4・19・ 病める時も、健やかなる時も

「ハイ、できましたよ。お綺麗です」

ウェディングドレスを着飾ったユリアのダークブラウンの髪に、ネオ・シアンがティアラを付けながら言った。

今日は二人の結婚式。ネオ・シアンが全てを整えてくれて、これからチャペルへ行く事になっている。

「うふっ、ありがと！」

ユリアは鏡を見ながら満足そうに微笑み、純白のタキシードに身を包んで待っているジェイドの所へ行った。

「おまたせー」

「おっ！ おお……。ユ、ユリア……。綺麗だ……」

ジェイドは格段に美しくなったユリアを見て感激し、ユリアはちょっと照れて頬を赤らめた。

「それではチャペルへ行きますよー」

ネオ・シアンが手を高く掲げ、二人を連れて空間を跳んだ。

花の咲き誇る庭園の向こうにたたずむチャペルは、気持ちの良い日差しを受けて白く輝いている。そして、その背景には個性的でオシャレな超高層ビル群がずらりとそびえていた。

「わあ！　なんだかすごいチャペルね」

ユリアはうれしそうに言った。

百階を超えるビル群は日本のビルと違って途中階にエントランスがある。この星には魔法があるので、自動車もバスも普通に空を飛んでいるのだ。高さ百メートルおきに設けられたエントランスの前には道が作られ、隣のビルとの間を繋いでいる。見ると、チャペルも庭園ごと宙に浮いている。超高層ビル群に囲まれた公園の上空にいるらしい。

「さあ、こちらへ……」

ネオ・シアンは二人をエスコートする。

すると、チャペルの入り口の前に老夫婦が立っていた。老夫婦はユリアを見ると温かいまなざしを向け、うれしそうに微笑む。

「えっ!? も、もしかして……」

ユリアはその見覚えのあるまなざしに思わず駆け出す。近づいて行くと、それはやはり両親だった。

「パパ、ママ——!」

ユリアはポロポロと涙を流しながら二人に抱き着いた。

最後に見た時は三十代だった二人はもう白髪でしわだらけ、だが、優しい微笑みは昔のままだった。もう会うことは叶わないとあきらめていたパパとママに会えてユリアは涙が止まらなくなる。

「立派になったねえ」

パパはユリアの髪をなでながら優しく語りかける。

「ジェイドに……私の旦那さんに会って欲しかったの……ごめんなさい、遅くなっ
て」

「いいのよ、あなたが幸せなら、それが私たちにとって何よりのことなんだから」
ママはそう言ってユリアの頬を流れる涙をそっとハンカチで拭いた。

「もう死んじゃったかと思ってた……」

「あら、もうとつくに死んでるわよ。生きてたら百四十歳越えてるもの」

「えっ!？」

「あの女の子が特別に命のスープに溶けていた私たちを連れて来てくれたの」

そう言って、ネオ・シアンを指さした。

「本当は良くないんですが、私の独断で呼びました。長時間は無理ですが、短時間なら影響ないかと……」

シアンは恐る恐る言う。

「ありがとう……」

ユリアはネオ・シアンにお礼を言うと、両親にジェイドを紹介した。



結婚式が始まった。

ドラゴンの幼生の化身だという、銀髪碧眼の可愛い幼女がバスケットに入った花びらをパラパラと振りまきながら赤いじゅうたんを歩き、先導する。

ユリアとパパは腕を組みながら幼女の後ろを歩き、出席の人たちに頭を下げながら進む。そこには最近仲良くなった人たちに加えて、田町の神様たちも揃っていて

にこやかに小さく手を振ってくれる。

正面の段のところまで来ると、老紳士が司会としてジェイドと立っていた。その瞳にはエンペラーグリーンの輝きが見える。

「えっ!？」

思わず目を見開くユリア。

「ユリア、おめでとう」

髪はすっかり真っ白となってしまうたが、それはアルシェだった。

「ア、アルシェ……」

ユリアはアルシェの手を取ってポロリと涙をこぼした。

「君は美しい……。あの日のままじゃのう」

アルシェも涙ぐんで言った。

「この国をこんなに発展させてくれてありがとう。途中で放り出したみたいになつてしまつて悪かつたわ」

ユリアは謝る。

「いやいや、ユリアの構想が良かったんじゃよ。ワシはただそれを愚直になぞった

だけじゃ」

「でも、銅像、見たわよ。今もみんなに愛されているじゃない」

「何言ってるんじゃない。ユリアたちの方が余程愛されとるよ。見てごらん」

そう言つてアルシエは壇上に大きく飾られた国旗を指さした。国旗には法衣をまとった女性と火を噴くドラゴンが描かれている。

「えっ!? これ、私たちなの!?!」

「そう、君たちはこの国の誇りであり、象徴なんじゃ」

アルシエはニッコリとほほ笑んだ。

ユリアはジェイドと目を見合わせて苦笑する。まさか百年放っておいた自分たちを覚えている人がいるなんて、それも国旗になるレベルで残っているとは想像もしなかったのだ。

「それでは結婚式を始めよう」

アルシエはそう言うと言とユリアとジェイドを並べて開式を宣言した。

「新郎ジェイド、あなたはユリアを、病める時も、健やかなる時も、富める時も、貧しき時も、妻として愛し、敬い、慈しむ事を誓いますか?」

「誓います」

うなずくアルシエ。

「新婦ユリア、あなたはジェイドを病める時も、健やかなる時も、富める時も、貧しき時も、夫として愛し、敬い、慈しむ事を誓いますか？」

ユリアはジェイドをじっと見つめ、ニコツと笑うと、

「誓います」

と、嬉しそうに言う。

そして、指輪を交換し、誓いの口づけをした。

パチパチパチパチ

列席のみんなから祝福を受け、二人は正式に夫婦となったのだった。

4・20・ 空飛ぶオープンカー

チャペルを出ると、オープンカーが二人を待っていた。

「えっ!? 何これ？」

驚くユリア。

「何って、これからパレードですよ」

ネオ・シアンはニコツと笑って言う。

うわああああああ! うおおおおお!

まるでサッカースタジアムでゴールが決まった時の様な、怒涛の歓声が高層ビル群に響き渡った。

「えっ!?」

驚いて見回すと、なんと、周り一面人人……。高層ビル間の道も公園の中も周りの道も全部人で埋め尽くされていた。そして、みんなユリアとジェイドの描かれた小さな国旗を手に振っている。

「ど、どういうこと？」

嘩然として、パリッとしたスーツを着た青年がやってきて言う。

「第三十一代大統領のアルシェ・リヴァルタ三世です。今日はご結婚おめでとうございます。国民が皆お祝いしたいと今日は詰めかけております。ぜひ、一周して手を振っていただけませんか？」

「だ、大統領……。あ、そ、そう？　まあ、手を振るだけなら……」

「ありがとうございます。光栄です。では、お願いします」

そう言って大統領はうやうやしくオープンカーのドアを開ける。

ユリアたちは困惑しながらオープンカーに乗り込んだ。

パァ——！！

クラクションが鳴らされ、オープンカーは浮かび上がる。

うおおおおお！

ひとときわ高い歓声が上がった。

オープンカーはゆっくりと高層ビル群の周囲を飛び、ユリアは戸惑いながら手を振って観衆に応えていく。

思えば数カ月前、追放された時は群衆に襲われ石を投げられ、ケガまでしたの

だった。でも、今は伝説の存在としてこんなに多くの人たちに祝われている。それは複雑な気分だった。

次々とそびえたつ巨大な高層ビルの脇をゆつくりと飛びながら、ふとユリアは思った。違いがあるとすれば自分の頭と足で行動したかどうかなのではないだろうか？

数カ月前までは言われたことを淡々とこなしているだけだった。朝早く起きてお祈り、勉強、礼儀作法の研修、神聖魔法の練習、それは自分が決めたことではなかった。大変ではあったが言われたことをやっていただけだった。結果、利用され追放された。

でも、追放後は道なき道を自分で考え、必死に行動してきた。その主体性、自分の人生を自分で切り開く覚悟と信念、そして、頼れる理解者……。

「そうか……」

その瞬間、この宇宙の意味も全て分かってしまった。

宇宙とは、誰しも自分を中心に展開していくものなのだ。世界は自分が認識するから存在し、自分の思い描いたように成長していく。自分の心と調和しながら正し

く認識し、真っ直ぐに生きること、それが自分を、自分の世界を豊かにしていくのだ。

ユリアは目をつぶり、この数カ月の苦闘を思い出しながら感慨にふける。

そして、ジェイドの手を取ると立ち上がった。

「ジェイド、ドラゴンになって」

「えっ!？」

どういうことか分からず困惑するジェイド。

「来てくれた人に本当のあなたを見せつけてやるのよ」

ユリアはニヤツと笑い、居心地悪そうに縮こまって手を振っていたジェイドは、少し思案すると、

「うちの奥さんはさすがだな」

そう言っとうれしそうに笑って、ツーっと上空へと飛ぶ。

そして、ボン！ と爆発すると巨大なドラゴンの姿となる。厳ついウロコに覆われ、雄大な翼を揺らし、巨大な赤い瞳でギョロリと辺りを睥睨した。

うわあああああああ！

数十万人は初めて見る本物のドラゴンに歓喜する。

ユリアはピョンと跳びあがるとドラゴンの後頭部に乗り、

「さあ、レッツゴー！」

と、こぶしを高く突き上げた。

ジェイドは、

ギユアアアア！

と、咆哮を放つ。

その地響きのような重低音は摩天楼群にこだまし、観衆は圧倒された。

そしてバツサバツサと翼をはばたかせながら摩天楼群を一周すると、上空に向けて巨大な口をパカッと開き、直後、超ド級の火魔法を放った。

上空で激しい閃光を伴いながら大爆発を起こした魔法はズン！ という衝撃音で摩天楼を揺らす。

その、けた外れの迫力に観衆はどよめく。

4・21. 限りなくにぎやかな未来

最後にチャペルのそばを飛ぶ。

ユリアはみんなに手を振ると、パパ、ママ、アルシエは笑顔で手を振り返してくれて、その後スーッと消えていった。帰る時間が来てしまったらしい。

「あつ！ ああ……、もっとお話したかったのに……」

しばらくうつむき、涙をポロポロとこぼすユリア。

やがて、大きく息をつくと、

「じゃ、おうちへ帰ろうか？」

そう言ってジェイドのトゲ状のウロコを抱きしめた。

「おうちでいいのか？」

「ハネムーンは落ち着いてから行きましょ。スイートホームが一番なもの」

「分かった」

そう言うどジェイドは全身を青白い光で覆い、一気に上空へと加速して行った。ほどなく音速を超え、ドン！ という衝撃波が摩天楼群に響き渡る。

観衆は両手を合わせ、輝きながら超音速で消えていく二人を見送った。



気持ちの良い青空の中、二人は雲を超えながらゆったりと飛んだ。

「ジェイド、ずっと一緒にいてね」

ユリアは遠くに見えてきた雄大な火山、オンテークを見ながら言う。

「もちろん。この命続く限り」

そう言うジェイドは力強くバサッバサッと羽ばたいた。

「うふふ、ありがと」

見ると、後ろから金色の光を放ちながら誰かが追いかけてくる。何だろうと思っていると、それはドラゴンだった。

ドラゴンには田町の神様たちが乗り、手を振っている。

中には結婚式で先導してくれたプニプニとした頬の少女もいた。

二頭のドラゴンは広大な森の上空でしばらくランデブー飛行をする。

「あの子可愛いわよね。私も欲しいな」

銀髪を揺らしながら手を振る少女を見て、ユリアはうれしそうに言った。

「子供か、我也欲しいな」

「ふふっ、どんな子が生まれるかしら」

やがて、向こうのドラゴンが離れて行き、ユリアは大きく手を振る。

直後、激しい閃光を放つと、ドラゴンはピュルルルと奇怪な電子音をあげながら光速で消えていった。

ユリアは彼らの消えていった方向を眺めながらつぶやく。

「ジェイドの子なら黒髪で、目がクリッとしていて、賢くて優しい子に違いないわ……」

そして、ジェイドのトゲにしがみつき、目をつぶって幸せそうに上機嫌で続ける。
「そんな可愛い子が『ママ!』とか言って抱き着いてくるんでしょ? 最高じゃない!」

すると、

ボン!

という音がして、ユリアの前に何かが現れた。

「マンマ!」

と、つぶらな瞳の赤ちゃんがユリアにニッコリと笑いかけている。

「へっ!？」

ユリアはその黒髪の可愛い赤ちゃんを見て驚く。

「マンマ！」

赤ちゃんはニコニコしながらユリアに両手を伸ばした。

「え？ あなたまさか……」

ユリアは呆然としながら赤ちゃんに手を伸ばす。

「ユリアどうした？」

ジェイドが聞いてくる。

「ごめんなさい、もう赤ちゃん産まれちゃった……」

そう言いながらユリアは恐る恐る赤ちゃんを抱き上げる。

ふんわりと漂ってくるミルクの香り。

ユリアは優しく抱きしめ、そのプニプニの頬に頬ずりをする。

すると、赤ちゃんの無垢な柔らかい心がユリアの深層意識に流れ込んできた。

「うわぁ……」

その温かい心を感じながら、間違いなくこれは自分とジェイドの子だとユリアは確信する。

「産まれたって……どういうこと？」

ジェイドはまだ理解できない。

「二人の愛の結晶よ。私、自分が神様だってこと忘れてたわ……」

キッツキッツキッツ！

赤ちゃんはうれしそうに手足をばたつかせる。

「ジェイド！ ハネムーンは取りやめ！ 育児するわよ！」

ユリアはそう言っただけで赤ちゃんをギュッと抱きしめ、幸せそうに微笑んだ。

「い、育児……、ユリアといくと退屈しないな」

そう言って笑うジェイド。

やがて見えてきたスイートホーム。

今日から神様と、ドラゴンと、赤ちゃんのにぎやかな暮らしが始まるのだ。

「あそこがおうちですよ」

ユリアは赤ちゃんに洞窟を見せ、赤ちゃんはキッツキッツ！ とうれしそうに

笑った。
了

追放大聖女、ざまあしてたら日本に呼ばれた件

著者 月城 友麻

発行日 2023 年 2 月 8 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/271711/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。